

佳奈多アフター～
It's a Wonderful
Cross Life～ side
Kanata

月の海

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

葉留佳と理樹が連れ出してくれたあの日から私達3人は一緒に生活を始めた。

決して広くないアパートでの同棲生活。

新たな友人達と紡ぐ絆の物語―

目次

恋とニートと誕生日	前編	1
恋とニートと誕生日	中編	6
恋とニートと誕生日	後編	14
銀色の出会い		20
唯湖、襲来		27
鷹文くんと河南子さん	前編	37
鷹文くんと河南子さん	後編	41
もう一人のとも	前編	48
もう一人のとも	後編	53
おわりとはじまり	前編	58
おわりとはじまり	中編	65
おわりとはじまり	後編	72

SNOW WARS	epilogue	79
初めてのクリスマス	前編	89
初めてのクリスマス	後編	95
私は友達が多い(仮)		102
男の戦い		111
その瞳に映るのは		120
Beginning to run		125
Beginning to run		130

晴れ、金属音、河原にて	145
母をたずねて約何里？ 前編	150
母をたずねて約何里？ 中編	157
母をたずねて約何里？ 後編	165
時を刻む村 1	177
時を刻む村 2	182
時を刻む村 3	188
時を刻む村 4	196
時を刻む村 5	201
時を刻む村 6	209
悠久円環のアンファング	221

二木佳奈多の憂鬱

古河家の人々

日溜まりの街

深夜の告白

ピリオド

friend

恋とニートと誕生日 前編

初めの頃は、慣れるまでただただこそばゆい気持ちでいっぱいだった。

隣の部屋の理樹の寝息を感じてなかなか寝付けないこともあった。

葉留佳は全く気にかけていないようだったけど――

ようやく慣れてきた今、3ヶ月の時間が流れていた。

敷地に立っていた銀杏の木の葉もすっかり緑色から黄色へ移り変わって秋を感じさせられている。

理「じゃあ、行ってくるよ」

理樹が少し早めの手袋をつけて玄関に立った。

同棲が始まってすぐに理樹はバイトを始めた。

当面のお金は私達の両親が工面してくれると言っていたのだが、甘えてばかりでは悪いと働き始めたのだった。

私も働こうかと切り出してみたが今まで頑張ってきたんだからとやんわりと断られてしまった。

その分家事を任されたのでそちらを頑張ろうと思う。

佳「いってらっしゃい、頑張ってるね」

軽くキスをし、理樹を見送った。

理樹の出掛けて行った後を少しばかり見つめ、小さく溜め息をついた。

日めくりカレンダーが示すのは10月13日――

――私達の誕生日だった。

理樹はこのことを知らない。

自分が言っていないのだから知らないのは当然だ。

それでも恋人には祝ってもらいたいという矛盾した感情を抱いていた。

p r r r r r

思案にふけっていると不意に家の電話が鳴った。

佳「もしもし、二木と三枝と直枝ですが」

晶『おう俺だ、つかその挨拶はどうなんだ』

佳「事実ですから。突然どうしたの？」

晶『どうしたもなにも誕生日だろ？おめでとさん』

佳「覚えててくれたんだ……」

晶『大事な娘の誕生日だからな』

佳「……ありがとう」

思いがけない祝いの言葉に温かい気持ちになった。

晶『片割れにも祝いを言いたいんだが』

佳「無理ね、まだ寝てるわ」

晶『そうか、まったくいらぬトコは似やがって』

佳「ええ、その通りだわ」

晶『手厳しいな』

電話越しに苦笑いしているのが分かる。

晶『そういや小僧はお前達が誕生日って知ってたのか？』

佳「知らないと思うわ」

晶『つたくあの甲斐性無しめ』

佳「私が言わなかったんだもの仕方ないわ」

晶『いいのか？』

佳「ええ」

晶『ならいいけどよ。そろそろ仕事に行くからあいつにもおめでとうって言つといてくれ』

佳「わかったわ」

晶『じゃあな』

ツーツーツー

電話が切れてから私はもう一度溜め息をついた。

もし今日が誕生日だと打ち明けければ理樹は心から祝ってくれるだろう。

でも、どうしても催促しているような気がして話すことが出来なかった。

いつまでも気にしているわけにもいかない。

私は私のすべきことしなければならぬ。

気持ち切り替えて私は寝室の襖を開けた。

佳「葉留佳、いつまで寝てるの！起きなさい！」

布団の山になった部分を揺すった。

そう、目下最重要事項はこの子。

私の妹、三枝葉留佳。

最初は働くようなことを言っていたこの子は、3ヶ月経った今見事にニートと化してしまっていた。

葉「ん〜後一時間〜」

ももぞと動く葉留佳を思わずずっと見ていそうになったが我に返って布団を剥ぎ

取った。

佳「お皿洗いたいから早く食べちゃって」

葉「ふぁーい」

葉留佳は目をこすりながらたどたどしい足取りで洗面所に向かっていった。

……大丈夫かしらこの子。

恋とニートと誕生日 中編

顔を洗ってようやく意識が覚めてきたようで本調子になった葉留佳はトーストにかじりついた。

私は洗い物をしながら最近感じていたことを聞いた。

佳「葉留佳、あなたもそろそろ働くとかしたらどうなの？」

葉留佳は一度きよんとした顔をすると笑いながら言った。

葉「お姉ちゃんも働いてないじゃないですか（笑）」

佳「家事全部やってるの誰だと思ってるのかしら（怒）？」

額に青筋を浮かべつつも笑顔で答えた。

その顔が怖かったのか葉留佳は若干怯えながら反論してきた。

葉「わ、私だつてやろうと思えばできますヨ？」

佳「へえ、じゃあ今日はやってみてもらおうかしら？」

葉「お茶の子さいさいですヨ。姉御は言っていました『葉留佳君はやればできる子』だ
と」

それは出来ない子に使う言葉だと思っけれど、やる気があるのはいいことだ。

こうして葉留佳の一日家事挑戦が始まった。

とりあえず今日は洗濯、炊事、掃除を担当してもらうことにした。夕食は理樹も帰ってきているので私が準備することにした。

第一種目く洗濯く

佳「じゃあ洗濯しておいてくれるかしら？」

葉留佳の食べた皿を洗いながら指示を出した。

葉「らじやー！」

元気よく返事した後葉留佳は洗濯機のある洗面所へ向かった。

今日の洗濯でミスは少ないだろうと思った。

なぜなら色移りするものは今日は含まれていない。

流石の葉留佳も洗剤をドバつと入れるような真似はしなはずだ。

何か忘れているような気がするがあまり過保護に心配し過ぎるのもよくないだろう。

私は洗った皿をふく作業に移行した。

〜一時間後〜

私はテーブルに向かって勉強をしていると終了のアラームが鳴った。

佳「葉留佳〜、取って来て〜」

葉「は〜い」

トコトコ洗面所に駆けて行った。

次の瞬間―

葉「わひゃあ!!」

佳「いたっ」

突然の悲鳴に鉛筆の芯を折ってしまい、その折れた芯が私の額に直撃した。急いで洗面所に入ると青ざめた葉留佳がへたり込んでいた。

佳「どうしたの!?!」

葉留佳は震える手で洗濯機を指差した。

恐る恐るその中を覗いてみると確かに悲惨なことになっていた。

あるのはちり紙にまみれた洗濯物だった。

先程感じた忘れていたことはこれだった。

葉留佳はよくポケットにもものを入れたまま洗濯に出す癖があった。

普段はビー玉とかあまり問題ないものだったし、事前に私がチェックしているのでこんなことはなかったが今日は偶然にも残念な日だったようだ。

それからしばらくの間、私達はガムテープ片手に洗濯物と格闘することになるのだつた。

洗濯―×

第二種目く炊事く

ようやく洗濯物が片付いた頃には昼飯時を軽く過ぎてしまっていた。

佳「まったく…」

葉「やはは、ごめん」

葉留佳は苦笑いしながら謝った。

佳「遅くなったけどお昼にしましょう。葉留佳が作ってくれるのよね？」

葉「もちのろんですヨ」

自信満々で答える葉留佳。

…この自信はどこから来るのだろうか？

佳「それじゃお願いね」

洗濯を始める前のままにしてあったノートにもう一度向かい合い、葉留佳の料理が出るのを待った。

くしばらくしてく

葉「出来ましたヨ！」

笑顔で部屋に入ってくる葉留佳。

これは期待できるかもしれない。

教科書を閉じテーブルの上を片付けた。

葉留佳がドンと音をたて皿を置く。

その中身は――

――マフィンだった。

佳「マフィンだけ？」

葉「そうですヨ？」

疑問形に疑問形で返された。

佳「なんでマフィンなのよ？あなた卵料理なら得意だったじゃない」

卵ならちゃんと冷蔵庫にあったはずだ。

葉「あくえつとそれはですね〜」

葉「作り方すつかり忘れちゃいました（・ω・）」

佳「……………」

葉「いや〜自信あつたんだけど3ヶ月何も思わないと思いつけないですネ」

佳「……………」

炊事―×

第三種目〜掃除〜

マフィン自体はとておいしかった。

遅めの昼食にはこれくらいでちょうどよかったかもしれない。

最後の挑戦は掃除。

佳「今度は私がちやんとみてるわ」

これ以上時間を増やすわけにもいかない。

葉留佳を試す意図のもので監視指導員付きというのも既にどうかと思うが。

葉「こ、今度は大丈夫ですヨ」

佳「根拠は？」

葉「ふっふっふ、掃除の裏ワザを知っているのです」

佳「へえ、何よ？」

葉「畳を掃除する時はお茶の葉を使えばいいんですヨ」

佳「よく知ってるわね」

まさかそんなことを知ってるとは思わなかった。

というか、それを覚える暇あつたら料理をまずは覚えなさい。

佳「じゃあそれで頑張りなさい」

葉「はい」

葉留佳は台所に駆けて行った。

今回は大丈夫そうね。

一人安堵していると葉留佳がお茶の筒を持って戻ってきた。

それはクドの――

佳「ちよつと葉――」

葉「それ――」

シユボツと音を立ててふたを開けるとその勢いのまま中身をぶちまけた。

佳「……葉留佳」

葉「なに、お姉ちゃん？」

佳「…正座なさい」

葉「へ？」

佳「正座あ!!」

葉「はいいい!!」

それから小一時間説教が行われたのは言うまでもない。

掃除—×

教訓『葉留佳は放っておこう』

恋とニートと誕生日 後編

説教が終わる頃には日もすっかり暮れかけてしまっていた。

葉留佳はその間一度も足をくずさせなかったので立てずに orz のままプルプルと震えている。

正直可愛くて仕方ない。

表情には出さないようにいないと…

理「ただいま」

理樹が帰ってきた。

佳「おかえりなさい、理樹」

葉「理樹君、おかえり…」

理「葉留佳さんどうしたの？」

佳「なんでもないわ」

理「そ、そう」

ぴしやりと言いつつ放ったので理樹は少し驚き気味だった。

理「ところでまだ晩御飯は作ってないよね？」

佳「?ええ、まだ準備してないけど?」

理「よかった、二人ともちよつと一緒に来てほしいんだ」

葉「どこに行くんですか?」

理「ついてからのお楽しみかな?」

よく分からないが断ることもないので理樹に言われるままついていくことにした。

佳「じゃあ早く行きましょう」

理樹の背中を押して外に出るのを急かした。

佳「行って来るわね」

そう言つて私は玄関の鍵をかけた。

―足が痺れて動けないままの葉留佳を残して。

葉「ちよ、ちよつと待つてええええええ!!」

葉「ひどいですよお::」

佳「ちよつとした冗談じゃない」

葉留佳は少し瞳に涙を浮かべていた。

葉留佳をなだめながら理樹についていくとたどり着いたのは学校だった。

葉「学校、ですか?」

理「うん」

佳「ちよつと待って理樹、今の私達は休学中…つまり部外者よ」

理「大丈夫だよ、ちゃんと許可はとってあるから」

理樹は私がどういう反応をするか完全に読んでいたようでポケットから私達三人分の許可証を取り出した。

佳「驚いたわ」

理「こうでもしないと佳奈多さんは入ってくれないって分かってたからさ」

葉「お姉ちゃんはクソ真面目ですからネ」

佳「なっ!?!それはあなたはあなた達が—」

理「ストップ」

思わず食って掛かりそうになるのを理樹が制した。

理「ケンカしないで、ほら、行こう」

理樹は私達の手をとって歩きだした。

その手はとても温かく、気付けば私からも握り返していた。

横目で見た葉留佳の顔が赤く見えるのは見間違いでないだろう。

私の顔にも熱が上がっているのを感じもう片方の手でマフラーを深く巻き直した。

引つ張るようにして理樹が連れてきたのは使い慣れたあの学食だった。

私の記憶が確かなら営業時間は過ぎてしまっているはずだ。

だというのに中には明かりがついたままだった。

佳「理樹？ここがどうしたの？」

葉留佳も同じ疑問を抱いているようで首を傾げていた。

理「いいからいいから、中に入つてよ」

そう言うのと理樹は私達の後ろに回り込んで背中を押してきた。

佳「ちよつと理樹何を——」葉「理樹君どうし——」

パンツパンパンツ

押されるままに中に入った私達を出迎えたのは小さな連続した破裂音。

これがクラツカーのものであることに気付くのに数秒を要した。

クラツカーに続くのは拍手。

リトルバスターズの面々とあーちゃん先輩、風紀委員の子達、そして両親達が温かい

拍手を送ってくれていた。

恭「遅かったな」

理「ごめんごめん」

謝る理樹に問いかけた。

佳「理樹、これは？」

戸惑う私達に理樹は微笑みながら言った。

理「佳奈多さんと葉留佳さんの誕生日パーティーだよ」

佳&葉「!!」

佳「何で今日が誕生日だって」

理「好きな人達の誕生日だからね、ちゃんと知ってるよ」

佳「でも私達あなたに教えてないわ」

理「あー…それは」

唯「私に聞きに来たのだよ」

一歩前に出た来ヶ谷さんが答えた。

唯「サプライズパーティーをしたいから二人の誕生日を教えてほしいとな」

晶「最初から俺達に聞きやあいいのによ」

佳「謀ったわね、父さん」

父さんは心底面白そうに笑った。

朝の電話はきつとこのサプライズのための布石だったのだろう。

恭「話は後だ、そろそろ始めよう」

理「そうだね、じゃあ改めて—」

「せーの」の掛け声とともに全員が同じ言葉（語尾に違いはあるけれど）を口にした。

「誕生日おめでとう（ございます）っ!!」

銀色の出会い

あの誕生日の日から一週間。

婚約したからといって特に私達に変化はない。

……と思っていたのはどうやら私達だけだったようだ。

それは今朝のこと。

今日は珍しく三人揃っての朝食だった。

佳「はい理樹、あくん」

理樹は同じようにあくと口を開け私のとった卵焼きを食べた。

佳「どう？」

理「今日もおいしいよ」

佳「よかった」

理「お返しに、はい、あくん」

佳「あくん」

葉「……………」

私達の様子をジト目で見ている葉留佳に声をかけた。

佳「どうしたの？箸止まってるみたいだけど」

もしかしてどこか具合悪いのかしら？

葉「どうしたの？…じゃないですよこんのバカップル!!」

理「葉留佳さん!？」

葉「いくらなんでもイチャイチャし過ぎですよ！何があつたかはお姉ちゃんの左手の薬指につけてる指輪を見れば大体わかるけど、流石に私がいる時くらい遠慮してくださいヨ！」

理「いやまあ——佳「だって——」

理&佳「葉留佳（さん）だし!」

葉「何その共通見解!？」

私として理樹と以心伝心できたみたいでちよつと嬉しかった。

理樹もそうだったようで見つめ合うと互いに少し顔が赤くなった。

その様子を見て諦めたように葉留佳が溜め息をついた。

葉「もういいッス……」

葉「というわけでバイトをしようと思うのですよ」

佳「どういいうわけよ?」

唐突な決意表明に溜め息をつく。

葉「いや／＼そろそろ二ートも卒業しないと」

…自覚あつたのね。

葉「てことで外出て探してきます！」

佳「ちよつと葉留佳!?!」

止める間もなく葉留佳は出掛けて行つた。

まあそうそうバイトなんて見つかるものじゃないだろうし、放っておけば勝手に帰ってくるだろう。

今日は近くのスーパーで特売の日なので安く仕入れた食材でご馳走を作ろう。

理樹、喜んでくれるかな？

私は足取り軽くスーパーに向かった。

スーパーから帰つて来ると隣の部屋の前で考え込んでいる女性がいた。

カチューシャで留められている綺麗な銀の長髪が印象的だった。

？「困つたな、一旦帰るか？いや、少し待てば……………」

佳「どうかしたんですか？」

声をかけると少し驚いた後、恥ずかしそうに答えた。

？「合鍵を家に忘れてきて入れないんだ。たぶんもう少しすれば家主も戻ってくると思うんだが……」

既にかなり寒くなってきたているこの時期に外で待つのは応えるだろう。

佳「よかつたらこちらで待ちませんか？」

？「え、しかし……いいのか？」

佳「ええ」

？「ありがとう、助かる。ああ自己紹介が遅れたな、坂上智代だ」

佳「二木佳奈多よ」

互いに自己紹介をした後、私は坂上さんを連れて部屋に入った。

佳「緑茶でいいかしら？」

智「ああ、お構いなく」

遠慮がちな坂上さんにクドおすすめのお茶を出した。

佳「粗茶ですが」

智「部屋にあげてもらっただけでも十分ありがたいのにお茶まで出してもらって本当にすまないな」

佳「気にしなくていいのよ坂上さん」

智「私のことは智代でいい」

佳「じゃあ私も佳奈多でいいわ」

つい先程あったばかりだというのに名前前で呼び合うまでになったことが少し可笑しくて私達は笑いあつた。

佳「お隣の岡崎さんとはどういう関係なの？ やっぱり恋人？」

智「そうだ」

智代さんはそれが誇らしいことと言わんばかりに胸を張って答えた。

智「佳奈多はここで三人で暮らしてるんだよな？」

佳「ええ、妹とか、彼氏の三人で暮らしてるわ」

智「妹？ ネームプレートには三つ苗字があつたが？」

佳「それはねー」

私は大まかにこれまでの経緯を説明した。

この話は初対面の人にする話ではなかったがこうして話してしまったのは智代さんの雰囲気によるものかもしれないと思つた。

佳「ーというわけで今に至るわ」

これまで真剣なまなざしで聞いていた智代さんは話が終わると優しく微笑んだ。

智「頑張つたな」

佳「ええ」

智「今は幸せか？」

佳「とつても」

智「そうか」

しんみりとした空気が流れた。

佳「そつちの話も聞きたいわ」

智「私の？まあいいが面白い話でもないぞ？」

佳「こつちだけ話すなんて不公平じゃない」

智「わかつた。私が朋也と出会つたのは――」

話し込んでるうちにすっかり遅くなつてしまつた。

智「そろそろお暇しよう、朋也もとつくに歸つて来てるだろう」

佳「もうそんな時間なのね」

智「また今度ここに来てもいいだろうか？」

佳「友達だもの、いつでも来て」

智「それじゃあまた」

佳「またね」

再会の約束をし智代さんは帰っていった。
まあお隣だけど。

理「ただいま」

入れ替わりに理樹が帰ってきた。

佳「お帰りなさい」

理「ご機嫌だね、何かあったの？」

佳「実は――」

唯湖、襲来

あれから時々智代さんがウチに来るようになった。

どこのスーパーが安いとかの情報交換をしたり、それぞれの得意な料理を教えあったり、彼氏の惚気話をしあったり――

一部所帯じみてる感じは否めないが、私にとっては有意義な時間だった。

かくいう今日も智代さんはウチに来ている。

ただいつもと違うのは智代さんが何やら思いきりへこんでいることだった。

佳「はい、お茶」

智「ありがとう」

佳「それで？どうしたのよ？」

智「それが……」

ピンポーン

智代さんが話し始めようとしたところにチャイムが鳴った。

ク「どなたかいらっしやいますか？」

どうやら来たのはクドリヤフカらしい。

佳「いいかしら？」

智「私のことは気にしないでくれ」

扉を開けるとそこにいたのは声の主クドリヤフカと――

――来ヶ谷さん。

即座に扉を閉めにかかったが来ヶ谷さんに素早く足を挟まれ防がれた。

唯「ひどいじゃないか」

佳「いえ、今来客中ですので」

唯「そう邪険にすることもあるまい？ 現にそのお客様は気にしなくていいと言っていないではないか」

どれだけ耳いいのよ!!

佳「いや、でも」

ク「駄目なんですか……？（・ω・）」

しよんぼり俯くクドリヤフカの様子に罪悪感を刺激された。

佳「……はあ、わかったわよ。あがりなさい」

ク「おじやまします」唯「邪魔するよ」

来ヶ谷さん、自分一人じゃ入れてもらえないの分かってクドリヤフカを連れてきたわね。

智「佳奈多、私は帰るとするよ」

佳「そう？ごめんなさいね」

智「いや、いいんだ」

立ち上がり、帰ろうとする智代さんを来ヶ谷さんが制した。

唯「まあ待ちたまえ、どうやら落ち込んでいるようだな。状況から察するに佳奈多君に話しに来たのだろうか？私達にも相談してみてはいかがかな？」

智「しかし」

ク「悩みがある時は誰かに話すのが一番なのです。よろしければ話してください」

智「佳奈多、いい友達に恵まれてるな」

佳「ええ」

智代さんはクドリヤフカの頭を撫でた。

ク「わくわく」

目を細めてそれを受け入れるその様子はまるで主人に撫でられて喜ぶ子犬のようだった。

智「じゃあ聞いてもらおうかな」

智「—というわけなんだ」

三人「……………」

内容としては岡崎さんとイチヤイチャしているところを弟の鷹文君に見られてしまったというものだった。

クドリヤフカと来ヶ谷さんは互いに顔を見合わせて苦笑いを浮かべるだけで智代さんの話に答える様子がなかったのでまずは私が率直な意見を述べた。

佳「何か問題なの？」

智「え？だってその…恥ずかしいじゃないか、そんな姿を弟に見せるなんて」

唯「智代君、残念だが佳奈多君にその相談をするのは無駄だぞ？」

智「？なぜだ？」

唯「君も佳奈多君の惚気話は聞いたことあるだろう？」

智「まああるが？」

ク「その大半は部屋に妹の葉留佳さんがいる時の話だと思います」

智「な!？」

ク「だから共感は得られないと思います」

唯「妹好きも相まって感覚がマヒしてるからな」

智「佳奈多が初めて遠く感じる…」

佳「？」

何故か智代さんに遠い目で見られた。

智「いや、もう深くは考えないようにしよう…」

唯「うむ、それがいい」

よく分からないが解決したらしかった。

唯「それにしてもあの不良達から恐れられた君がこんな恋する乙女だったとは、事實は小説より奇なりと言ったところかな」

智代さんの身体がビクツと反応した。

智「知っていたのか？」

私は以前岡崎さんとの馴れ初めを聞いた時に聞いていたけれど来ヶ谷さんが知っているとは思わなかった。

唯「噂程度にはな。こんなナイスバディーをしていると馬鹿が寄って来るんだが、そいつらを粉碎した時に聞いたのだ」

ク「ないすばでいー……」

クドリヤフカがナイスバディーに反応してへこんでいた。

唯「馬鹿げた話であつたし、信じてはいなかつたんだが君を見て確信した」

元々勘の鋭い人だ、おそらく来ヶ谷さんの中で何か感じるものがあつたんだろう。

智「確かにその噂は私のことを言つたものだろう。今でもたまにそういった輩から喧嘩を仕掛けられることもある」

唯「だろうな。一度貼られたレッテルはそう撤回できるものじゃない」

どこかトゲのある言い方に違和感を感じた。

佳「どうしたんですか」

唯「佳奈多君に危害が及ぶ可能性を考えたか？」

佳&智「!!」

寒気がするほどの冷たい視線だった。

唯「智代君は確かに強いのだろう、しかし佳奈多君はそうではない。嗜む程度に剣道をやつたことがあるだけの、いわゆる普通の女の子だ」

佳「来ヶ谷さん！」

唯「君は黙っている、私は今智代君と話をしている」

気圧されてそれ以上何も言えなかつた。

唯「相手は不良だ。よからず人質といつた下衆な手段をとることだつてありうる。君はそれから必ず佳奈多君を守り通せるか？」

智「それは……」

そんなの絶対に出来っこない。

智代さんが俯くのを見て嘆息し、今度は私の方を見る。

唯「次に佳奈多君」

佳「……はい」

唯「君は智代君から既に聞き及んでいたはずだ、一度も考えたことはなかったか？」

佳「ありませんでした」

唯「甘いつ!!」

空気が震えた気がした。

唯「君の危険はそのまま葉留佳君、理樹君にも及ぶことだつてある!」

佳「……すみません」

私の謝罪と共に沈黙がこの場を支配――

――しなかつた。

唯「よし、じゃあ王様ゲームでもするか」

三人「……ええ?」

唯「どうした？ああ準備なら任せろ」

佳「あ、あの来ヶ谷さん？」

唯「ん？」

本当に何もなかったかのようだった。

佳「いや、ん？って……」

唯「なんだ？今の話を聞いて絶交でもする気になったか？」

智「——っ!!」

絶交と聞いて智代さんは身体を強張らせた。

佳「いえ、それはないですけど」

唯「智代君は？」

智「私は、佳奈多がよければ友達でいさせてほしい」

佳「もちろんいいに決まってるじゃない」

智「佳奈多……ありがとう」

唯「うむ、何も問題ないな」

佳「縁を切れて言ってるのかと思ったんだけど」

唯「別に佳奈多君の交友関係に口を出したりはしない、ただ私の言った危険が全くな
いわけじゃないからな。少し忠告したまでのことだ」

佳「もう少しやり方を考えてください」

唯「はっはっは、しかしいい薬になっただろう？まあ人気のない道は通らない、その程度の危機感があれば問題ないだろうがな

智「貴女には敵いそうにないな」

佳「ええ」

唯「私など所詮は独り者、立派な騎士ナイトのいる君達には敵わんさ」

思わず私達は顔を真っ赤にした。

唯「いいものも見れたしそろそろ寮に帰るとしよう。クドリヤフカ君はどうする？」

ク「私も帰ります」

唯「では智代君、佳奈多君のことをそこで理樹君と立ち聞きしている彼氏君の次くらいによろしく頼んだぞ」

理&朋「!!」

智「ああ、まかされた」

唯「では、また会おう」

そう言い残して来ヶ谷さん達は去っていった。

智「佳奈多、すまない。私は迷惑をかけてしまうかもしれない」

佳「それはお互い様よ。気にしないで、友達じゃないの。それよりもまずやることが

あるわ」

智 「そうだな」

佳 「理樹っ!!」 智 「朋也っ!!」

理 & 朋 「……はい」

隙を見て逃げ出そうとしていた二人だったが、名前を呼ばれ観念したようだ。二人まとめてのお説教が始まった。

鷹文くんと河南子さん 前編

佳「理樹……」

理「佳奈多さん……」

見つめ合いキスをする。

葉留佳は今日、西園さん達に連れられウインドウショッピングに行った。

私もどうかと誘われたが理樹と過ごしたかったので今回は断った。

久しぶりの理樹との二人っきりの時間。

毎日のようにキスしているがそれでも鼓動が高鳴り、一向に飽きるなんてことはなかった。

しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。

？「……………」

佳「？」

どこからか視線を感じ玄関の方を見ると開いているキッチンの小窓から誰かが覗いていたことが分かった。

隠れたつもりなのだろうがさつき見てしまった以上続けるわけにもいかない。

理樹から離れ玄関に向かう。

理「ど、どうしたの？」

角度的に理樹は気が付かなかったようで私の行動に動揺していた。

佳「これよ」

ガチャツと扉を開けると恐る恐るといった感じに覗いていた犯人が顔を出した。

鷹「ごめん！佳奈多姉え、理樹兄い！」

頭を下げるこの少年は智代さんの弟、鷹文君。

私達を理樹兄い、佳奈多姉えと呼び慕ってくれている。

理「別に鷹文になら見られてもいいけど、覗きは感心しないよ」

鷹「覗くつもりはなかったんだって、兄ちゃんにゲームするから理樹兄いがいたら呼んで来いって——って、え!?!見られていいの!?!」

理「うん、別に。佳奈多さんもいいでしょ？」

佳「ええ、知らない人ならともかく、鷹文君なら構わないわ」

さつきは知らない人の可能性もあったから続かなかったが、最初から鷹文君だと分かっていたら気にせずいただろう。

鷹「へー、理樹兄いも佳奈多姉えも変なトコ吹っ切れてるね」

理&佳「？」

鷹「そんな何言ってるのこいつ？みたいな目で見ないでよ、僕がおかしいみたいじゃ
ん」

理「まあ僕達はいいけどあんまり智代さんと岡崎さんのは覗かないようにした方がいい
と思うよ。智代さんちよくちよくへこんでウチに来てるし」

鷹「どれも事故だから僕の意図じゃないんだけど」

佳「それでも気を付けるくらいは出来るでしょう？」

鷹「ん、まあわかったよ。あんまり理樹兄いと佳奈多姉えに迷惑かけるのも悪いしね」
佳「その気遣いを数分前に発揮してくれれば尚よかつたんだけど」

鷹「だから悪かつたって」

まあいじるのもこのくらいにしておこう。

鷹「それで、どうする理樹兄い？やめとく？」

理「うゝん」

佳「行つてきていいわよ理樹、なんかそういう雰囲気じゃなくなっちゃったし」
少し寂しい気もするが気が乗らなくなったのも事実だった。

理「わかった」

鷹「ほんとごめん」

佳「いいのよ、楽しんできて」

理「じゃあ行つて来る」

佳「いつてらつしやい」

軽くキスして見送った。

鷹「本当に僕の有無は関係ないんだね」

それだけ言い残して理樹と鷹文君はお隣へ入つて行つた。

智『なんでお前はいつもいつもこんなタイミングで来るんだっ!!』

どうやら鷹文君はそういう星の下に生まれたらしい。

鷹文くんと河南子さん 後編

智「お邪魔してもいいだろうか……？」

先程の叫びから間もなく智代さんがウチに来た。

佳「どうぞ、はい、お茶」

もう来ることは分かっていたので既にお茶の準備はしてあった。

智「……………」

佳「……………」

どちらも何も話さない。

何度が繰り返し返すうち、この形が一番いいことが分かった。

智代さんに必要なのは落ち着く時間なのだ。

もちろん話しかけられれば答えるが、とりあえずは様子見で自力で復活するのを待つのが最善だった。

ピンポン

智代さんをこのままにしておくのも忍びないが出ないわけにもいかないので鍵を開け扉を開けた。

恭「よう二木」

いたのはバスターズの男達だった。

謙「相変わらず元気そうだな」

佳「おかげさまでね」

真「理樹はいるか？」

佳「隣でゲームしてるわ、行ってみたら？」

真「よっしゃあ！今すぐ行くぜ！」

謙「少しは落ちつけ」

真「だってよ、理樹だぜ？」

謙「そう言われると確かに……」

「ただ、理樹が好きなのよ？」

「まあ、私以上ってことはないでしょうけど。」

二人は先に隣へ入って行った。

恭「ところでそこにいるのは誰なんだ？」

智代さんは女子メンバーは何度か会う機会があったが、今思えば、男子メンバーと会

うのはこれが初めてだった。

佳「今ちよつとヘコンでますから、また後で紹介します」

棗先輩は中の智代さんの雰囲気を感じたらしい。

恭「わかった、何でヘコんでるのは知らんが元気づけてやれよ」

佳「先輩に言われなくてもそうします」

恭「じゃあな」

短くそう言うのと棗先輩も隣の騒ぎに加わった。

く少ししてく

智「ありがとう、もう大丈夫だ」

佳「そう、よかったわ」

智「毎度ながらすまない、やっぱり見られるのは恥ずかしいんだ…
照れる智代さんは同性の私から見ても可愛かった。

智「それにしても鷹文の奴、狙ってやってるんじゃないだろうか？」

佳「それはないんじゃないかしら」

少なくともさつきは完全に偶然だった。

智「むう………」

コンコン

河「先輩います？あ、いた」

チャイムではなくノックをし、普通に勝手に入ってきたのは智代さんの後輩で鷹文君の元彼女でもある河南子だった。

呼び捨てにしてほしいとの本人の希望で私も呼び捨てで呼んでいる。

どこことなく葉留佳に似ている気がした。

佳「河南子、なにさらっと入って来てるのよ」

河「鍵開いてたんで」

智「だめじゃないか、不法侵入と変わらないぞ?」

河「あーすいません、以後気を付けます」

絶対またやるわね。

佳「それで? どうかしたの?」

河「いやー鷹文で遊ぼうと思ってさつき隣に入ったんですけどなんかむさい野郎共の溜まり場になってるじゃないですか? しかもめっちゃテンション高いし、怖くて逃げてきたんですよ」

容易に想像できる光景だった。

佳「理樹の親友達よ」

河「へえ理樹先輩の親友ですか、ちよつと意外だなー。ああゆうアグレッシブなタイプ苦手だと思ってました」

佳「まあ小学生くらいからの付き合いなのもあるんじゃないかしら。それに全員理樹に対して異様に好意的だし」

河「アー……ッ♪♪♪ってやつですか」

佳&智「?!」

河「…ネタふる相手間違ったな…」

よく分からないが反省しているようだった。

河「とまあそれはおいといて、あたし達も女子会しましょうよ」

佳「随分突然ね」

河「だって男達だけ楽しんでるなんて不公平じゃないですか」

佳「そう言われてもね」

智「別に楽しんでるならいいじゃないか」

河「えくやりましょうよ」

河南子が駄々っ子モードに入った。

これ以上せがまれるのも面倒だ。

佳「……はあ、智代さん、いいかしら」

智「佳奈多がいいなら私は構わない」

河「やたっ♪」

河南子は即座に跳ね起きた。

佳「それで、具体的には何するのよ？」

河「ここに〇ツキーがあります。ただ食べるのもつままないですしポツ〇ーゲーム風に食べましょう」

智「どう食べるんだ？」

河「二人で両端から食べるんです」

智「な！それじゃあ最後にキスすることになるじゃないか！」

河「そこはあくまで風だから、てきとーなとこで折つちやえばいいんです」

智「それなら、まあ、いいのか？」

河「いいんです、いいんです」

智「……ふう、一度だけだからな？」

そう言って智代さんはポ〇キーのチョコの方の端をこちらに向けてきた。

智「佳奈多、早くやって終わらせよう。私も恥ずかしい」

佳「仕方ないわね」

私は向けられた端を啜えた。

その時――

恭「いやー盛り上がるな」

鷹「兄ちゃん達来たときは怖い人達かと思っただけど面白いね」

真「へっ、ありがとよ」

謙「たまにはこういう遊びもいいものだ」

理「佳奈多さんも一緒……」朋「智代、一緒にやら……」

男達が私達を誘いにやってきた。

その目に映るのはポツキ〇を啜え、恥ずかしさから頬を赤らめている私達。

あ、――

折れる音が虚しく響いた。

それと同時に理樹と岡崎さんが走り出した。

理&朋「僕（俺）の彼女が浮気したああああ!!」

佳&智「ちょ!?!」

私達はすぐに立ち上がり、走って行った彼氏達を追いかけた。

誤解が解けたのは日付が変わる頃だった。

もう一人のとも 前編

11月も終わりに差し掛かり、いよいよ寒さが本格的になってきた。

そろそろ雪も降ってきそうな気配だ。

秋を感じさせてくれていたあの银杏の葉もすっかり落ち、樹の周りは黄色い絨毯を敷いたようになっていた。

あの後、智代さんと二人で河南子に説教すると、黒幕に來ヶ谷さんの存在があることがわかった。

今度会ったらあの人も絶対説教ね。

どうせ馬耳東風だろうけど。

佳「よし、洗濯終わり」

今日やるべきことはすべて終わってしまった。

理「お疲れ様」

葉「おつかれ」

二人が私を労ってくれた。

今日は理樹のバイトもやすみで三人揃って暇していた。

葉留佳は相変わらず何もしていない。

今もただごろごろと転がっていた。

理樹はというと棗先輩から借りた漫画を読んでいた。

スクレボっていったかしら？

私も座り、西園さんが貸してくれた小説を読み始めた。

貸してくれたのは『R e r e a d』という恋愛ものの小説だった。

仲津 静留というキャラクターが私のお気に入りだった。

そのうち西園さんが『R e r e a d』の秘蔵の本を見せてくれると言っていたので楽しみにしている。

その話をする西園さんの頬が赤くなっていたように見えたが多分気のせいだろう。

理 「……………」

佳 「……………」

葉 「……………」

理 「……………」

佳 「……………」

葉 「……………」

理 「……………」

佳「……………」

葉「うがーっ!!」

佳「うるさいわよ」

葉「何行無駄にするつもりですか！読んでる人も暇なんですヨ！」

構ってもらえないのが寂しかったのかよく分からないことを言っていた。

葉「てことで私は外行ってきますヨ」

唐突に宣言して葉留佳は走り出した。

何がしたいんだろうあの子は。

…まあいいか。

私達はそれぞれの読書に集中した。

それからしばらく没頭していたので気が付かなかったが理樹がスクレボを読み終え手持ち無沙汰にしていた。

佳「理樹もどこか行きたかったら行ってきていいわよ」

理「うん」

理樹は返事すると私の寄りかかっているクッションの反対側に陣取った。

佳「私のことは気にせず好きにしていいのよ?」

理「わかつてるよ、僕が好きで佳奈多さんと一緒にいたいんだ」

佳「物好きね」

理「そうかな?好きな子と一緒にいたいと思うのは普通のことだと思うけど」

こういう風に乗っすぐ好意を向けられるのは恥ずかしかった。

あれだけ人前でイチャつくのは平気なのにこういうのが恥ずかしいと思うのはおかしいのかしら?

佳「す、好きにしなさい」

背中合わせでよかった、赤くなっている顔を見られずに済むから。

理「うん………くすっ」

理樹にはそれがお見通しだったみたいでくすりと笑った。

佳「…最低ね……最低」

理「え、どうして?」

私の彼氏は意地悪だ。

佳「なんだか手玉に取られてるみたいで悔しいわね」

理「そう?」

佳「そうよ。理樹、ちよつとこつち向いて」

理「?——ん！」

理樹がこつちに振り返ると同時にキスをした。
軽い感じですぐに唇を離れた。

佳「お返しよ」

理「じゃあ僕も反撃するよ」

今度は理樹の方からキスされる。
そこからキスの応酬が始まった。

もう一人のとも 後編

鷹「理樹兄い、佳奈多姉えそろそろいい？」

何度目か数え切れなくなつた頃に鷹文君が切り出してきた。

佳「……仕方ないわね」

鷹「そんな嫌そうにしないでよ、それに仕方ないって来てからだけでもすごい回数してたじゃん」

割と序盤に鷹文君は来たのだけど無視して続けていたのだった。

佳「それでも足りないものよ」

鷹「そんなもんかなあ？」

理「それで、今日はどうしたの？」

鷹「すごい言い辛いんだけど、ちよつと待ってて。今連れてくるから」
そう言い鷹文君は一度部屋から出て行った。

連れてくるって誰をだろう？

理「誰だろう？彼女かな？」

佳「なんで私達に紹介するのよ」

鷹「おまたせ」

鷹文君が再度現れる。

その傍らにいたのは幼稚園児くらいの女の子。

……え？

佳&理「……………」

鷹「いや、そんな訝しげに見られても。何か言つてよ」

理「鷹文、僕も一緒に行つて謝るから親御さんに返しに行こう」

佳「ごめんなさい、鷹文君がそこまで追い詰められているなんて知らなかったわ」

鷹「やっぱりその反応だよね！誘拐じゃないから！そんな哀れんだ目で謝られても困るから！」

流石に誘拐したわけではないらしい。

佳「じゃあその子は誰なの？ちゃんと説明しなさい」

鷹「…父さんの隠し子」

佳&理「……………」

坂上家は家庭崩壊寸前だったのを鷹文君が体を張つて繋ぎ止めたらしい。

鷹「ウチの玄関にいてさ。母さん達には見せられるわけないからとりあえず兄ちゃんのとこに連れてきたんだよ。兄ちゃんも姉ちゃんもいなかったけど」

理「じゃあさつき連れてくるってずつと外で待たせてたの!」

鷹「いやそれは大丈夫。兄ちゃんから合鍵もらってるし」

姉の彼氏の家の合鍵を何でももらってるのだろうか。

鷹「二人が帰ってきたら僕から説明するからさ、とりあえずこっちで待機していいかな?二人だと間が持たないんだよ」

佳「わかったわ、いいわよね理樹?」

理「もちろん」

鷹「助かるよ」

礼を言った後、今度は女の子に優しく話しかける。

鷹「じゃあお兄ちゃんちよつと出かけてくるからそのお姉ちゃん達と遊んでてね」

?「わかったー」

元気よく返事する女の子の頭を撫でて鷹文君は出掛けて行った。

理「それじゃあ僕達と遊ぼうか」

?「うんっ」

理「君の名前教えてくれるかな?」

?「ともだよー」

理「それじゃあとも、何して遊ぼっか？」

と「うんとねー」

こういう時、理樹がいるのは本当に心強い。

どうやらトランプで遊ぶことになったらしい。

と「おねーちゃんもほら、あそぼーよ」

それから私達は三人で遊んだ。

と「すう……すう……」

遊び疲れたともは可愛い寝息をたてて眠ってしまった。

佳「可愛いわね」

理「そうだね」

起こさないように髪をそつと撫でた。

ふととももの持つて来ていたリュックが目に入った。

佳「何か母親の手掛かりになるものがあるかもしれないわ」

理「ちよつと見てみよう」

リュックを開けてみてみると入っていたのは着替えに幼稚園の制服のようなものに

保険証。

佳「母親はしばらく帰ってくる気はないようね」

理「どうしてわかるの？」

佳「ただ一日子供を預けるだけなら保険証は必要ないでしょう？」

理「そうか……ねえ佳奈多さん、これって」

佳「それ以上は言わなくていいわ」

辿り着いた結論はたぶん理樹も同じだろう。

きつともは……

おわりとはじまり 前編

智「よかったなとも」

と「たかいたかーい」

朋「あ、こら、あんまり暴れるなよ」

岡崎さんがともを肩車している。

智「なにもついて来なくてもよかったんだぞ？」

佳「あら、親子の団欒を邪魔しちやっただかしら？ねえ、パパさんママさん？」

ともは岡崎さんをパパ、智代さんをママと呼んでいる。

智「い、いや、うんそんなことはないぞ？」

葉「まあいいじゃないですか。ともも皆で一緒の方が楽しいですよねー」

と「うん！おにいちゃんたちがいればもっとたのしいよー」

佳「ごめんね、とも。理樹お兄ちゃんは今日本仕事が朝早くてね」

河「鷹文は直接学校行ったんじゃないかな」

と「ざんねん」

佳「その分帰ってきたら一緒にまた遊びましょう？」

と「わかったー」

朋「ほら、そろそろ幼稚園着くから降りような」

岡崎さんがともを降ろすと今度は智代さんが手を繋いで歩き出す。

それは何も知らない人から見れば仲の良い親子にも見えるかもしれない。

葉「……………」

葉留佳はその様子をじつと見つめていた。

私と同じことを思っているのかもしれない。

私は葉留佳の手を握った。

今は手を繋いで歩ける人がいるんだっていう気持ちを含めて。

葉留佳は最初こそきよとんとしていたがすぐに嬉しそうな顔をして私の握った手を

ぶんぶんと振り回した。

佳「ちよつと葉留佳」

葉「ねえとも、皆で幼稚園まで手を繋いでいきませんか？」

と「そうだねーそのほうがたのしいよー」

葉「じゃあ決まりだね」

朋「ちよつと待て、俺もか？」

河「当たり前じゃん」

朋「男、俺一人なんだが」

確かにこの状況で手を繋ぐのは男の岡崎さんには恥ずかしいだろう。

河「ともさんとともに、あいつ手を繋ぎたがらないんですよ」

と「もーだめだよ、パパもつながないよ」

朋「手を繋ぐと腕がとれちゃうんだ」

岡崎さんがとんでもない嘘をついた。

でも流石にともだつて――

と「えー、それはたいへんだよ！ つないじゃだめだよ」

信じるの!?

純粹なのはいいけどこれは危険じゃないかしら？

智「こら朋也、変な嘘をつくな」

朋「わかったよ」

しかたなくといった感じに岡崎さんが手を繋ぐ。

と「パパだいじょうぶなのー!?!」

朋「ああ、今治つたんだ」

と「よかつたー」

無邪気に喜ぶともに一抹の不安を感じずにはいられなかった。

先生「ともちゃん、おはよう」

と「おはよーございます」

ともはそのまま園内に入って行った。

先生はこちらに向き直って真剣な顔つきになった。

先「えつと坂上さんは？」

智「私だ」

先「親御さんが送りに来なかったのはどうしてなんでしよう？それに皆さんは？」

見るからに学生くらしいの見た目の私達が気になったのだろう。

佳「私達は智代さんの友達です。智代さんのご両親は忙しいそうなので私達が来まし

た」

戸惑っていた智代さんに代わって私が答えた。

先「そうなんですか…ともちゃんは…新しいおうちに迎えられたんでしょうか？その

ことが心配で…」

智「新しいうち…うちが？」

先「え…娘さんは聞いていないのですか？ともちゃんのお母さんからはそう伺ってい

ます。あの子は坂上さんの家の子になります、と」

智代さんが何かを言おうとしたが、岡崎さんが智代さんの手を握りそれを制した。

智代さんは動揺していた。

当然のことだろう。

そのことを微塵も考えていなかったのは智代さんだけだっただろうから。

先「あの子のお母さん……三島さんは、とても子供思いで優しい方でした。でも、精神的に少し弱い人で……あの子を手放したことで思いつめていないといいんですけど……と
もちゃんは昨日は元気でしたか？」

智「……………」

河「うん、元気に私達と遊んでたよ。先輩にすつごく懐いてる」

何も喋らなくなった智代さんの代わりに河南子が答えてくれた。

先「そうですね。優しいお姉さん達がいるなら、大丈夫ですね」

智「……………」

智代さんは終始呆然としたままだった。

朋「学校ちゃんで行けよ」

岡崎さんはすぐに仕事場に行かなければならなくなったらしい。

朋「佳奈多、葉留佳、河南子、智代を頼む」

佳「ええ、お仕事頑張ってね」

朋「すまない」

岡崎さんは走り出しすぐに見えなくなった。

誰もいなくなつた歩道に立つたままの智代さんは一向に歩き出そうとしない。

佳「そろそろ行かないと間に合わないわよ」

智「……なあ……あの子は何も知らないんだ……」

河「……………」

智「お父さんに会えるからって家の前まで連れてこられただけなんだ」

葉「……………」

智「たちの悪い悪戯か……そんなことしたら可哀想だろ……あんないい子なのに……」

可哀想じゃないか……」

佳「そうね……だからといって貴女がここにいっても何にもならないわ。貴女のすべき

ことは学校へ行くこと、そしてあの子と一緒に弁当箱を買いに行つてあげることよ」

智「……うん……」

頷いてようやく歩き始めた。

その様子を私達は黙つて見送つた。

葉「大丈夫ですかね」

佳「どうかしらね？少なくとも今日の授業の内容は頭に入らないでしょうね」

河「先輩なら帰る頃には立ち直るよ、ともにあんな姿見せるわけにはいかないし」
佳「だといいけど」

学校に向かう智代さんの背中はいつもより小さく見えた。

おわりとはじまり 中編

鷹「大変だよ理樹兄い佳奈多姉え葉留佳姉え！ともがいなくなつたつ！」

理&佳&葉「!!」

鷹「姉ちゃんが幼稚園まで迎えにいったらもういなくなつてて、幼稚園の先生も帰り支度するところまでは見てたらしいけど、ひとりでかえつちやつたみたいでさつ」

佳「智代さんは？」

鷹「今搜してる」

葉「どこをです力？」

鷹「さあ…闇雲にだと思っけど」

理&佳&葉「……………」

理「ねえ鷹文、智代さんつてさ」

鷹「言わなくてもいいよ、分かるから」

すぐに冷静さを失うわね……

佳「岡崎さんは？」

鷹「もう仕事終わったみたいで連絡つかなかった。たぶんとももの家に向かっているかそ

の帰りだと思うけど」

佳「たぶんともは家にいるはずよ。鷹文君」

鷹「わかった」

鷹文君は保険証を取りに行った。

佳「ここに誰か残って岡崎さんの帰りを待つ必要があるわ、葉留佳頼める？」

葉「了解、岡崎さんかともが帰ってきたら連絡するよ」

鷹「取って来たよ」

佳「それじゃあ葉留佳、行ってくるわ。後は頼んだわよ」

葉「イエッサー」

葉留佳を残し私達は智代さんと合流すべく走り出した。

「智代さんは幼稚園までの道のりですぐに見つかった。」

智「佳奈多っ！大変なんだっ！」

佳「聞いているわ、まずは落ち着きなさい」

智「落ち着いてなんかいられるかっ！ともがいなくなったんだぞっ！ひとりなんだぞっ！あんなに小さいんだぞっ！」

一気に捲し立てる智代さん。

智「迷子になってるかもしれないんだぞっ！可哀想じゃないかつ！」
パンツ―

智代さんの目の前で手をたたいた。

―猫だまし。

智「え……？」

佳「わかったから落ち着きなさい。冷静になればどこにいるか分かるから」
智代さんは目を閉じ息を整えつつ考え出した。

智「う……うわあああ……ともが、ともがあああ……」

スパアアアンツ!!

智「いたっ」

佳「いい加減にしなさい」

泣き崩れた智代さんの頭を思いきりはたき落した。

智「とも……どこにいるんだ……」

佳「はあ……あの子の家よ」

智「……そうか！今いくぞ、ともっ！」

ものすごい勢いで走り出したがすぐに立ち止まりまた崩れた。

智「場所を知らないんだった私はっ！」

理「智代さんってあんな感じだったっけ？」

鷹「可愛いでしょ」

佳「そうね」

智代さんを回収し私達はとももの家まで走った。

保険証に書いてあった住所、そのアパートの二階に続く錆びた階段にともは座っていた。

智「ともっ！」

ともは期待に満ちた顔で私達を見たがすぐに悲しそうな顔に戻った。

ともが待っていたのは智代さんではなく母親だったのだ。

智代「……………」

智代さんもそのことがわかったから何も声をかけられなかった。

何度も声をかけようとしてはためらってを繰り返した。

ここは私の役目だ。

佳「とも、帰りましょう」

なんて残酷な言葉だろう、もしかすると私はともに嫌われたかもしれない。

ともは少し間を開け小さく帰れないと呟いた。

それからすぐにともは声をあげて泣いた。

これまでもずっと我慢していたのだろう。顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。

智「……とも」

智也さんは瞳に涙を湛えながらとももの震える体を抱き締めた。

智「ともものは……私が、私達を守るから。だから安心しろ」

智代さんは優しく言った。

と「おかあさんは……？」

理「僕達が必ず探すよ。ともと二人で話が出来るようにする。だから、帰ろう」

と「…………」

ともは泣きやみ、小さく頷いただけだった。

家に帰って来てからも、ともはふさぎ込んだままだった。

その痛々しい姿に誰も声をかけることができないでいた。

狭い部屋に6人もいながら沈黙が続く。

動いたのは智代さんだった。

智代さんはともを背中から抱きしめた。

智「好きだ、とも。ずっとそばにいるからな」

それに呼応するように鷹文君がともの手をとった。

鷹「僕も、そばにいるよ」

理樹と葉留佳を見ると頷き返してくれた。

私達もともそばに座った。

佳「私達もいるわ」

と「うん……」

ともは智代さんの腕を抱いた。

と「いっぱいちゅーして」

智「ん？」

と「ともにもいっぱいちゅーして……おかあさん……むかしはいっぱいしてくれただのにしてくれなくなったんだ……とものこときらいになったから……すきだったら、ちゅーしてほしい……」

安心したいんだろうと思った。

智「うん、するぞ、ちゅー」

ともは頬にキスをした。

ともは安心したように智代さんに体重を預けた。

智「ずっと好きだから、とも」

と「うん」

おわりとはじまり 後編

ともはいろいろあつて疲れたんだろう、すぐに寝てしまった。

朋「俺がいない間にそんなことになってたんだな」

河「大変だったんだね」

佳「まあその分絆は深まったんじゃないかしら？……パパと河南子以外は」

葉「そうですね、たぶん私達にもちゅうしてくるくらいには深まったと思いますよ……パパとカナ以外は」

理「あれだけ懐いてくれると照れくさいね……パパと河南子は分からないかもしれないけれど」

鷹「だそうだよ、河南子と兄……もといパパ？」

朋「ホントに悪かったよ、だが俺の言い分を聞けば納得してもらえるはずだ」

智「なにをしていたんだ？」

朋「ともの母親と会ってきた」

全「!!」

朋「お前達もとものアパートは見ただろ」

佳「ええ、もう引越したって聞いたけど」

朋「俺もそれ聞いて駄目かと思つたんだが、とりあえず幼稚園に行つてともの母親が映つてる写真もらつてきたんだ」

鷹「それは盲点だったね。でもどうやって見つけたの？」

朋「ただお前達の家の前で待ち続けた。とものことが気になればきつと現れると思つたからな」

理「途方もない話だね」

朋「ああ、でも来たんだ」

葉「それでそれで？」

朋「とりあえずともと一度だけ会つてもらおう約束をしてきた。定期的に写真を送るのが条件」

智「……説得はしたのか？」

朋「取りつく島もなかった」

智「身勝手すぎる！縁を切つたんじゃないのか……」

朋「声のボリュームを落とせ、ともが起きるぞ」

智「そんな親とはもう会わせない方がいい。ともが傷つくだけだ」

朋「決めるのはともだ」

智「お前はともが傷つくのが分かかってて会わせるっていうのか」

朋「ああそうだ。そしてひとつ言っておくぞ、ともを傷を勝手にお前が決めるな」

智「だが…」

佳「岡崎さんの言う通りよ。それにともが母親に会いたがっていたのは貴女ももう見たでしょう？」

智「……私はどうしてればいい？」

佳「黙って耐えなさい」

私は一番難しいことを強いた。

智「……うん……わかった、たえる……」

この日はこれで解散となった。

ともは母親と会うことを望んだらしい。

お隣に行く支度していた。

佳「行くのね」

智「……ああ」

やはり智代さんは気が進まないらしい。

智「佳奈多、一緒に来てくれないか？それでもし私が暴走しそうになったら止めてほ

しい」

佳「もちろん、ここまで来て置いていかないですよ。最後まで面倒見るわ」
それから間もなくして全員の支度が整った。

朋「鷹文、河南子、留守番よろしく」

河「ほいほい」

鷹「頑張つてきてよ」

智「うん…いこう」

と「うんっ」

智代さんはともの手を引いた。

これから待つ辛さを知らないその小さな手を。

待ち合わせの場所はともが住んでいたアパートの隣の公園にしたそうだ。

予定の時間より早く着いたためベンチに座つて待つ。

智代さんは何度も時計を確認しそわそわと落ち着きがない。

佳「少しは落ち着きなさい」

智「わかつてはいるんだが…」

朋「来たぞ」

岡崎さんの視線の先に女性が現れる。

その人は私達の前まで来ると深くお辞儀した。

確かに岡崎さんのもらってきた写真に写っていた人だった。

と「ママっ！」

ともは母親に向かって走り出そうとするが智代さんが手を繋いだままでいるのでそれが出来ない。

理「智代さん、手を」

理樹にそう促されてようやく智代さんはその手を離した。

ともは母親に駆け寄り腰のあたりに抱きついた。

その時のともは顔は安心しきつたい笑顔だった。

そして、それは私達には向けられたことのないほどの笑顔だった。

震える智代さんの手を今度は私が掴む。

母親も優しい笑顔で受け止め、手袋を外し娘の頭を撫でる。

なぜそんな笑顔で娘を手放すことができるんだろう。

私は憤りと諦観が混ざったような感情でその母娘を見つめていた。

母親「とも」

母親がともに諭すように話しかけた。

母「私はあなたに人並みの幸せも与えられなかった。ごめんね、とも。あなたのこれ

からの幸せを…祈ってます」

…え？

母親はそれだけ言うのと笑みを残して背中を向ける。

そのまま遠ざかっていく母親の後ろ姿をともは呆然と見ていた。

母親を抱いていた手は上げられたまま宙に浮いている。

すぐそばでぎっ、と土を蹴る音がした。

私の手を振りほどいて智代さんが駆けていた。

ともの体を抱き、宙に浮いたままの手を握り締めた。

智「もう、終わったんだ…とものつらいこと、全部終わったから…これからは楽しい

ことだけが待ってるから」

両方背を向けているので表情は読み取れない。

智「私と過ごす毎日が待ってるから…絶対それは楽しいから…な、とも…だから…も

う安心しろ…」

理樹も岡崎さんもその様子を黙って見守っていた。

智「不安なことなんて何も…後は全部楽しいから…な、とも…」

今終わったんだ。

—親子の生活が。

そして始まるんだ。

新しい生活が。

理「あ……雪」

空を見上げると雪の粒が私の頬にとまり溶けていった。

この冬初めての雪だった。

初雪がこの悲しい思い出も白く染め上げればいい。

智代さんとともを見て、柄にもなくそんなことを考えていた。

SNOW WARS prologue

ともが岡崎家の一員になって一週間が経った。

智代さんは相変わらずともを溺愛していて、目に入れても痛くないといった様子で今この時も可愛がっている。

ちよつとやりすぎな感じは否めないが。

まあこうしてちよくちよく来ているあたり、私達も大差ないかもしれない。

鷹「それにしてもさ」

理「ん？」

鷹「理樹兄い達、最近入り浸りじゃない？」

鷹文君はキーボードを打つ手を止めずに言った。

佳「そうかもしれないけど、鷹文君が言うセリフじゃないわね」

鷹「まあそうなんだけど」

河「いいじゃん、暖かいし」

確かに8人もいるこの部屋は暖かくなっている。

鷹「狭いでしょ」

葉「ともー、鷹文が私達に出て行って言うんだよ」

と「もーだめだよ、なかよくしなきゃ」

鷹「別に喧嘩してるわけじゃないよ」

と「じゃあなかよしのちゅー」

葉「へ？誰と」

と「ハルと」

葉「誰が？」

と「おにいちゃん」

葉「勘弁してください」

葉留佳は、さっと土下座した。

6歳児に土下座する○歳って…

鷹「別にしたくないけどここまでされるとなんか傷つくなあ」

河「あたしがしてあげよっか？」

鷹「…：いい」

河「あたしとキスが出来ないってのか、ああ!？」

鷹「いだだだだだだだだだだ」

智「それにしても鷹文、パソコンにばかり嘯り付いてないで外で遊んできたらどうだ？」

外には雪が積もっている。

鷹「いや、なんで僕だけ外で遊ばなきゃなんないのさ」

河「食っちゃパソコン食っちゃパソコン、たまには動けっ！」

鷹「食っちゃ寝の河南子よりはまともだよ」

葉留佳はわきで口笛を吹いている。

思い当たる節があるからだろう。

鷹「だいたいさ、今時雪遊びなんて小学生でも——」

恭「雪合戦をするぞ」

鷹「……………」

勢いよく扉を開け、二番目の年長者でありながら二番目に子供な人が現れた。

朋「とりあえず玄関閉めろ、寒い」

恭「ああすまん」

棗先輩は扉を閉めてドカッと座った。

朋「それで？」

恭「雪合戦だ」

朋「いや、それは分かった。なんで雪合戦？」

恭「そこに雪があるからだ」

朋「……………」

無駄だと分かり岡崎さんは黙った。

恭「もうすでに皆公園に集合している。俺はお前達を呼びに来たんだ」

葉「いいですネ、やりましょやりましょ」

と「ともやりたい」

鷹「えー」

恭「なんだ鷹文はやりたくないのか？」

鷹「だって寒いし」

河「ともさんとともに、鷹文と一緒に遊びたくないって言うんですよ」

と「もーおにいちゃんもいっしょにあそばないとだめだよー」

河「ほらみる鷹文バーカ、鷹文バーカ」

鷹「何でそこまで言われなきやいけないのかわかんないけど…わかったよ、僕も行く

よ」

恭「残りは？」

智「もちろん参加するぞ。皆で遊ぶなんて久しぶりだから楽しみだ」

佳「たまにはいいかもね」

恭「よし、決まりだな」

棗先輩は携帯を取り出し連絡を取り始めた。

恭「……俺だ。……ああ……ああ……全員参加だ。……わかった、少し待ってろ」

手短に済まし携帯をパタンと閉じる。

恭「待たせたな、それじゃあ行くか」

葉「しゅっぱーっ」

河「しゅっぱーっ」

と「しゅっぱーっ」

同じく手を上げてテンションを上げる三人を微笑ましく思いながら私達は他の皆の待つ公園へ向かった。

SNOW WARS epilogue

それは昨日の雪合戦のことだった。

雪合戦は公園に集合したのはいいものの人数が多すぎたため急遽河原で行われることになった。

そして戦いも中盤、調子に乗った井ノ原が投げた雪玉が猫に当たった。

棗さんはそのことに怒りハイキックを繰り出す。

そこまではいつもの彼らのコミュニケーションとも言えるものだった。

ただ一つ違ったのはその井ノ原の吹っ飛ぶ射線上に理樹がいたことだった。

しかも、その延長線にあるのは川。

足を雪に取られて理樹は回避できなかった。

あの巨軀にぶつかられては線の細い理樹ではひとたまりもなく、そのまま二人で川に落ちてしまった。

宮沢がすぐさま川に飛び込み急いで理樹を引き上げた。

12月の川なんて寒いなんてものじゃないだろうに「俺のことはいいから早く理樹を！」とあくまで理樹を助けようとする宮沢は不覚にも格好いいと思った。

今度は棗さんが宮沢から理樹を受け取りお姫様抱っこで走り出した。私はそれに追従した。

家に着くとすぐに濡れた衣服を脱がせ、暖房の前に座らせた。それでもまだ理樹は震えていた。

「後はお前の仕事だな」と棗先輩は部屋を出た。

気をきかせてくれたのだろう。

私は震える理樹を少しでも温めるためにしばらく抱き締めた。熱を取り戻した理樹はそのまま眠りに落ちた。

そして現在に至る。

「風邪をうつすと悪いから」という理樹の意向で葉留佳はお隣に退去中だ。

今頃ともや河南子と遊んでいるだろう。

佳「まったく、今度会ったらただじゃおかないわ」

理「真人も悪気があったわけじゃないから許してあげてよ」

佳「理樹がそう言うなら私から手を下すのはやめとくわ」

あの後、クドリヤフカから聞いた話によると井ノ原は来ヶ谷さんにボコボコにされたらしい。

さらに駄目押しで一週間『理樹のトラウマ』の固定称号をつけられたそうさ。

理樹のことが大好きな井ノ原にとって理樹のトラウマになっているという称号はこれ以上ない罰だった。

実際トラウマになんてなつてはいないけど。

佳「：すでにぼろぼろだし」

理「え？」

佳「そう言えば棗さんがカップゼリー持つてきてくれたけど食べる？」

理「あ、うん、もらうよ」

棗さんは自分の蹴りが間接的であつたとはいえ理樹を川に落とすことになつたのが気がかりだつたようで朝早くに大量のカップゼリーを持つてやつてきたのだった。

佳「すまなかつたつて伝えてくれて言つてたわ」

理「後でお見舞いありがとうつて言いに行くよ」

一応棗さんも加害者なのだから被害者の理樹がお礼を言いに行くこともないんじゃないかと思つたが、こういうところが理樹の良いところだとも思つた。

佳「でも棗さんが来たのはちよつと意外だったわ」

学校にいた頃は猫ばかり気にかけていて他者のことを気にもかけていないという印象が強かつた。

少なくともお見舞いに来るようなタイプではないと思っていた。

理「あはは、鈴は人見知りするからぶつきらばうな感じに見られがちだけど本当は仲間思いのいい子なんだよ」

「佳奈多さんにも知っていてほしいんだ」と嬉しそうに語る理樹。

これが小さい頃からずっと一緒にいて築いてきた絆なんだと思った。

思えば理樹を救出するまでの宮沢と棗先輩の連携はそういった信頼からの力だろう。

今回は棗さんと井ノ原のせいで起きたことだったから二人での連携になったが、いざという時この5人のチームワークに適うものはそうそうないだろう。

理樹にこんな風に嬉しそうに語らせる、そしてそんな理樹の私が知らないことまで知っている棗さんが少しうらやましかった。

佳「……………ねえ、理樹」

もしも理樹が棗さん達と出会ったその頃に、私達と出会えていたら――

理「どうしたの？」

――理樹は私達を好きたすになってくくれたた？――

佳「…何でもないわ」

頭に浮かんだ問いを直接理樹に尋ねることはしなかった。

今こうしていることが答えだと思ったから。

不意に理樹が私の頭を撫でた。

佳「理樹？」

理「なんとなく撫でたくなった」

佳「そう……」

私はそれを拒まずにされるままに受け入れた。

撫でる理樹は風邪のせいかわげで、どこか遠いところになくなってしまっそうで――

佳「理樹はいなくなったりしないわよね……？」

馬鹿げていると分かかっていても聞かずにはいられなかった。

理「うん、あの日約束したよ？佳奈多さん……佳奈多のそばで愛し続けるって。その気

持ちは変わらない、むしろ毎日どんどん愛おしくなってる」

佳「ありがとう、理樹」

『私も愛してるわ』

私はその言葉を口にしなかった。

なぜなら私の唇は塞がれているから。

初めてのクリスマス 前編

看病の甲斐もあつてか理樹の風邪もすっかり良くなつた。

理樹は井ノ原が風邪を引いたことを聞き、男子寮に向かつた。

理樹から聞いた話によると井ノ原が風邪を引いたのは出会ってから初めてのことで
そうだ。

きっと気付いてないだけだと思ふけど。

そういうわけで今日は葉留佳と二人での買い物だ。

葉「それにしてもお姉ちゃんと二人でお出かけって久しぶりですネ」

佳「そうだったかしら？」

葉「そうですね。お姉ちゃん理樹君にべつたりだし」

佳「仕方ないわよ、好きな人と一緒に暮らしてるんですもの」

葉「自然に惚気ますなあ」

葉留佳がニヤニヤ言ってくるのでちよつとムツとする。

佳「何よ？」

葉「お姉ちゃん変わったよね」

佳「…たしかにそうね」

葉「理樹君とのこともそうだけどさ、こうして並んで歩いてるのも半年前には思いも
しなかったですヨ」

佳「ええ」

葉「だからさ、毎日楽しいんだ。お姉ちゃん達と一緒に過ごすの」

佳「……………」

葉「でもさ、私、お姉ちゃん達の邪魔になつてないかな？もしもそうなんだったら私
は両親ズの家に戻つても—」

佳「葉留佳」

葉留佳が言い終わる前に遮った。

葉「……………」

佳「一緒に暮らしてる好きな人の中にはあなたも含まれているのよ。だから邪魔なん
て思ったことはないわ」

葉「お姉ちゃあああああんっ!!」

葉留佳はいきなり私に抱きついてきた。

佳「ちよつと葉留佳!?!」

葉「お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん」

連呼しながらすり寄せる葉留佳。

何事かと私達を見る視線がとても恥ずかしかった。

佳「『このニート働け』とは時々思うわ」

半分くらいもう諦めてるけど。

葉「うぐつ……」

佳「まあ、いいわ。あなたの好きなようにしなさい」

葉「うん」

「ありがとう」と葉留佳。

お礼を言うべきなのは私の方なのに。

葉「ねえねえお姉ちゃん見て見て。もうクリスマス一色ですよ」

もう話を切り上げようとしたのか、天然なのか分からないが葉留佳は商店街を指差して言った。

「

佳「もうクリスマスは明日だもの。当然よ」

樹にはイルミネーション用の飾りを取り付けられ色とりどりに輝いていた。

店頭にはケーキの注文募集のポスターが貼られていたり、リースが飾られていたり

いかにもクリスマスといった様子だった。

葉「もうプレゼントの準備は出来てる？」

佳「当たり前じゃない」

明日はリトルバスターズの面々とクリスマスパーティーをすることになっている。そこでプレゼント交換をするとのことだ。

葉「さすがお姉ちゃんですね」

佳「あなたまさか」

葉「やはは、今日中に買いますよ」

佳「はあ…」

葉「ちなみに何買ったんですか？」

佳「明日のお楽しみよ」

葉「それもそうだね」

私「買ったのはマグカップだ。

面白みがないと言われるかもしれないが、男性陣に渡っても大丈夫なものが思いつかなかったたので無難なマグカップにしたのだった。

もちろん柄は理樹の好みに合いそうなものを買った。

佳「とりあえず今日の分の買い物済ませたら小物屋に行きましようか。そこなら何かあるでしょ」

葉「それじゃあ、れつつごー！」

買い物物を済ませた後、私達は予定通り小物屋に入った。

葉留佳が物色している間、私は別行動で店内を見て回った。

あるものが目についた。

私はそれを手に取った。

葉「お姉ちゃん」

葉留佳は綺麗に包装された箱を持ってやってきた。

佳「欲しいものは見つかった？」

葉「ぼつちりですよ。お姉ちゃんそれ買うの？」

私の手にあるものを見ながら聞いてきた。

佳「ええ」

店員「ありがとうございます」

それぞれ買ったものを持ち店を出る。

葉「理樹君も喜んでくれると思いますヨ」

佳「そうだといいけど」

葉「だいじょぶじょぶ」

理樹、喜んでくれるかしら？

初めてのクリスマス 後編

全「メリークリスマス!!」

パンツパンパンツ

掛け声と同時に皆が一斉にクラツカーのひもを引く。

恭「じゃんじゃん食ってじゃんじゃん飲んで今日は楽しもうぜ！」

智「私達が参加してもよかったのだろうか？」

恭「もちろんだ。一緒に遊んだからにはもう仲間だからな」

智「仲間、か。そうだな、私達は仲間だ」

納得したらしい。

既に井ノ原はフライドチキンにがつついている。

真「肉うめえー!!」

謙「もう少し落ち着いて食え。他のやつらの分がなくなるだろ」

真「だってよ、目の前に肉があるのに食わない方がヤゴつてもんだろ？」

ヤゴ? ああ野暮ね。

葉「お馬鹿だね、真人君」

真「何だと!？」

葉「ヤゴじゃなくてヤドですよ」

…葉留佳、どっちも馬鹿よ。

「そうだったのか」と唸る井ノ原。

「ふふん」と胸を張る葉留佳。

敢えて誰も間違いを指摘しなかった。

岡崎さんは笑いを堪えるのに必死で震えている。

河南子は訳が分からないという顔だった。

河南子もか。

小「あ、あはは…」

神北さんは苦笑いを浮かべていた。

魚「この三人でクイズ大会でもすれば面白そうですね」

恭「面白そうだな、それ採用」

西園さんの思いつきに棗先輩が食いついた。

恭「第一回お馬鹿は誰だ?クイズ大会」

タイトルがもう三人に喧嘩を売ってる気しかしないのだけど。

恭「これから俺達でクイズを出していく。真人、三枝、河南子はそれに答えていけ。

合つてたら＋1ポイント間違えたら－1ポイント、お手つきはないが一人が答えたら正解にしろ不正解にしろ次の問題な」

真「やってやるぜ！」

葉「負けませんヨ」

河「まあ負けはないっしょ」

三者三様の答えで参加の意思を示した。

恭「それじゃあ理樹、トップバッターはお前だ」

理「ええ僕!? うーん、じゃあ平成の前は？」

流石に簡単すぎじゃないかしら?

真「はいっ！」

真つ先に井ノ原が手を上げる。

他二人は少し出遅れた。

恭「真人」

真「江戸!!」

恭「不正解」

真「うおおおおー!!」

最初からエンジン全開だった。

恭「次、西園」

魚「力の限りを尽くすことを骨という漢字を使って何というでしょう?」

河「はい」

恭「河南子」

河「粉碎骨折♪」

恭「はずれだ」

河「…まじっすか」

恭「マジだ」

魚「正解は粉骨碎身です。惜しいと言えば惜しいですね」

恭「次、来ヶ谷」

唯「うむ、『What in the world did you do?』を訳せ」

ク「えーっと、えーっと」

横でクドリヤフカも一緒に悩んでいた。

葉「はい!」

恭「三枝」

葉「お前は世界に何をしたんだっ!?!」

朋「ぶはっ」

遂に岡崎さんは堪えきれずに噴いた。

恭「間違いだ」

葉「え〜」

その後も珍解答は続き、結果、13ポイントずつで同率首位となった。

この先、この子達は本当に大丈夫なんだろうか？

恭「余興も終わったところでいよいよお待ちかねのプレゼント交換だ」

それぞれ買ったものを出した。

恭「準備はいいな。曲が止まったところで終了だ。それじゃあスタート」

軽快な音楽と共にプレゼント交換が始まった。

何周かしたところで曲が止まった。

恭「ここでストップだ」

私の元に回ってきたのは小さい箱だった。

恭「じゃあそれぞれ開けるぞ」

皆が渡ったプレゼントを開ける。

私も箱を開けてみた。

佳「何これ？」

中に入っていたのはある缶詰だった。

唯「佳奈多君に渡ってしまったか」

どうやら来ヶ谷さんの差し金だったらしい。

どうか来ヶ谷さん以外に考えられないけど。

唯「どういものかは佳奈多君は知っているだろう？」

佳「ええ」

唯「男共の誰かに渡したかったところだが仕方ないな」

佳「夕チが悪いですよ」

唯「はっはっは、ちよつとしたジョークだよ」

来ヶ谷さんが用意したこの缶詰、シユールストレミング。

通称、世界一臭い缶詰だ。

こんなところで開けたら地獄絵図になるだろう。

渡ったのが私だったのでよかったが井ノ原あたりに渡っていたら大惨事になっていただろう。

理樹に渡ったのは智代さんの選んだ白くまのぬいぐるみだった。

今度とも三人で遊ぶ約束をしていた。

小「ほわあっ!？」

神北さんが突然大きな声を出して倒れた。

葉「こまりんに渡ったんですネ」

神北さんが持つていたのはびっくり箱だった。

佳「まったくあなたは」

葉「やはは、ここまで驚いてもらえとは思わなかったですヨ」

佳「神北さん動いてないわよ」

葉「え？こまりくん？」

小「きゅ……」

佳「気絶してるわ」

葉「あちやく」

私は友達が多い（仮）

佳「手伝ってもらえて助かるわ」

恭「お安い御用さ」

真「この筋肉にまかしときな」

そう言つて軽々と引き出しを出すことなくダンスを持ち上げる井ノ原。

いつもは圧迫感と暑苦しさしか感じられないこの筋肉も今日この日ばかりは頼もしい。

今日は12月31日大晦日、皆に手伝ってもらい大掃除をしている最中だ。

元々荷物自体は少ないのであまり作業という作業もないのだけれどこの機会に隅々まで掃除してしまおうと彼らに協力を仰いだのだった。

どうしても理樹や私達の力ではどうしても時間がかかってしまう。

快諾してくれた彼らのおかげでスムーズに事が進んでいた。

理「佳奈多、これはここでいいかな？」

佳「ええ、そこに置いておいて」

理樹も自分の出来る範囲で働いている。

来ヶ谷さんはそれを見てニヤニヤしていた。

佳「何をニヤニヤしてるんですか」

唯「いやなに、理樹君もすっかり佳奈多君を呼び捨てにするようになったものだと
思ってたな」

佳「そ、それは恋人同士なのですからファーストネームで呼び合うのは当然です」

唯「うむ、仲良きことは美しきことかな。それで式の日取りは決まったか？ 仲人としてははつきり決めてもらいたいものだが」

理&佳「「ぶっー」」

思わず吹き出してしまった。

唯「レディとして、そういう反応は感心しないぞ」

佳「すみません、っていうか式って……というより来ヶ谷さんが仲人って決めてませ
んよ」

唯「なん……だと……」

まるで騙されたような反応をする来ヶ谷さん。

唯「君の√ではいいタイミングで登場してやったではないか」

佳「？」

何を言っているのだろうか？

佳「とりあえず、まだそんな余裕はありません。本当に式を決める時に仲人は考えます」

唯「結婚は決まっているのだな」

佳「なっ!？」

唯「はっはっはっは」

来ヶ谷さんはしてやったりという感じだった。

いつか仕返しをしてやると心に決め、掃除を再開した。

佳「お疲れ様、お茶をどうぞ」

恭「ありがとうございます」

謙「働いた後の一杯はいいものだ」

真「筋肉に染み渡るぜ」

葉「たっだいま」

掃除が終わったので男達にお茶を振る舞っていると葉留佳達残りの女子メンバーがちようどよく帰ってきた。

佳「おかえりなさい、寒かったでしょ？今お茶入れるわ」

小「かなちゃんありがとう」

ク「ありがとうございます〜」

この二人のぼわぼわオーラは癒されるわね。

魚「とりあえずメモにあつたものは買ってきました。後で確認お願いします」

佳「ありがとう」

鈴「掃除は終わったのか」

理「うん、さつき終わったよ」

鈴「それじゃあ一緒に遊ぼう。すぐろく持ってきたんだ」

理「いいけどまずは準備が終わってからね」

理樹の言う準備というのは年越しパーティーの準備のことだ。

手伝ってもらう代わりに場所を提供することになっていたので。

鈴「わかった今すぐ準備するぞ」

そんなにやりたいのね、すぐろく。

佳「帰って来たばかりでなんだけど手伝ってもらっていいかしら？」

小「うん、鈴ちゃんもやる気満々だしいいよ〜」

ク「パニヤートナ（了解です）！」

魚「冷え症なので少し温まってから参加させていただきます」

唯「では私と温めあおうか？」

魚「やっぱり働くことにします」

唯「つれないな」

葉「姉御姉御、私のここ開いてますよ」

唯「さて私もたまには動くこうじやないか」

来ヶ谷さんは葉留佳を無視して台所に来た。

葉「ひどつ!？」

佳「葉留佳は飾り付け頑張ってちようだい。あなたにしかできない仕事よ」

葉「やはは、お姉ちゃんがそこまで言うなら頑張りますヨ」

葉留佳は張り切って飾り付けを始める。

その様子を見て来ヶ谷さんが小声で話しかけてきた。

唯「葉留佳君の扇動、うまいじゃないか」

佳「何年あの子の姉をやって来てると思ってるの？」

唯「それもそうだな」

はっはっはと笑う来ヶ谷さん。

唯「まあ葉留佳君よりも問題はこっちだな」

来ヶ谷さんの視線は台所に向いていた。

小「クーちゃんちよつとそつち詰めて」

ク「限界です」

鈴「めちやくちや狭いな。いやもうくちやくちや狭い…」

魚「全員では無理そうですね」

棗さんの言う通り台所が狭すぎてぎゅうぎゅう詰めになっているのだ。

佳「時間はかかるけど人数減らしてやるしかないでしょう」

唯「賢明だな」

佳「ちよつと皆」

智「佳奈多、差し入れに来た」

皆に指示しようとした矢先に智代さんが現れた。

佳「そうだわ、ねえ智代さん。台所借りてもいいかしら？」

智「ああ、構わないぞ」

佳「それじゃあ二手に分かれて準備しましょう」

智代さん達も加入してくれたおかげで作業効率もだいぶ上げることができ、日が暮れる前に全ての準備が整った。

恭「今年是我らリトルバスターズのメンバーが揃った記念すべき年だ。これからのバスターズの発展と――」

鈴「乾杯」

全「乾杯！」

恭「鈴……」

棗さんに乾杯の音頭を取られた先輩は悲しそうだった。

まあパーティーの前の話なんて誰も聞きたくないでしょうし、皆棗さんGJと思っているだろう。

真「食うぜゝ超食うぜゝ」

謙「毎度のことながら変わらんな」

葉「あー真人君取りすぎ！」

河「すげえ食いっぷりだな」

井ノ原は例のごとく肉を食い漁っている。

小「鈴ちゃんの作ったこれおいしいよ」

鈴「こ、これは小毬ちゃんも手伝ってくれたから…」

智「うん、これはいい出来だと思う」

ク「おいしいのです」

と「おねえちゃんのりようりすごくおいしいー」

鈴「／／／／／／／／／／」

棗さんは料理を褒められて照れている。

鷹「やっぱりこうなるんだね」

魚「パーティーらしくていいじゃないですか」

鷹「まあね。美魚姉えは入って行かないの？」

魚「あの中に入るのには酷く苦労しそうですし」

朋「西園はこいつらの中では珍しく落ち着いてるな」

魚「元々独りでしたから」

朋「なら楽しいだろ、こういう空気も」

魚「まあ」

テーブルから少し離れたところでは三人が話している。

それが合わさってわいわいがやがやとした喧騒になっていた。

佳「まったく騒がしいわね、あなた達が揃うと」

理「あはは、そうだね。でも」

唯「それがいい。こうして馬鹿やれる仲間がいるというのは何よりの宝だよ」

佳「そうですね」

理「佳奈多だつてもう僕らの仲間だよ」

佳「ありがとう、理樹」

もう輪の外から見守らなくていいんだ。
そう理樹は言ってくれた。

だから私はこれからも歩んでいく。
この愛すべき馬鹿な友達達と共に。

男の戦い

日も暮れた頃、一発の花火が打ち上げられた。

それから間もなく隣から誰かが出て行った。

おそらく岡崎さんだ。

佳「それじゃあ行くわよ」

理「うん」 恭「ああ」 真「おう」 謙「わかった」 唯「うむ」

それぞれが返事をする。

喧嘩しに行っている以上それに介入するにもそれなりの武力が必要になるのでこのメンバーでの行動になった。

真「にしても何であいつ喧嘩なんかしてんだ？ どうせやるなら俺とやりやいいのによ」

唯「戦闘狂の真人少年とは違うタイプだからぜひぜひ何かを守るためといったところだろう」

恭「熱いじゃないか！ 護るための戦い、いい響きだ」

理「また漫画の影響かな」

謙「たぶんそうだろう」

テンションの上がつている棗先輩を見て、溜め息気味の理樹と宮沢。

唯「どうやら目的地に着いたらしい」

辿り着いたのは雪合戦したあの河原だった。

岡崎さんはそこにいた男達と一言二言交わすとたくさんいた中の一人と土手から降りていった。

恭「ここからじゃ見えないな」

佳「この際土手まで上がりましょう」

男達から少し離れたところから土手に上がるとファイティングポーズをとる岡崎さんが見て取れた。

見ている私達に気付いた人がこちらに近づいてくる。

男「アンタ達、野次馬なら帰んな」

恭「あそこで戦ってる奴の知り合いだ」

男「アンタらもか」

佳「もって？」

男「そこにアンタらと同じくアイツの応援に来てる奴がいるぜ」

男が指差すその先にいたのは河南子だった。

野次馬でないことがわかった男は戦いを見に戻った。

私達はとりあえず河南子のところに行った。

河「あ、ちつす」

佳「何をしているの？」

河「観戦つすよ、愛の戦士の」

視線の先には岡崎さん。

河「先輩に任しとけば瞬殺なのに意地張って頑張ってるんだよ、俺が一人でやらなきやあって」

唯「馬鹿だな」

河「まあ多分今日で終わるよ。相手あの人より滅茶苦茶強いし」

気付けば岡崎さんが仰向けに倒れていた。

佳「ちよっ!？」

河「ああ大丈夫、あれくらいじゃあの人すぐ起きるから」

河南子の言葉通り、岡崎さんはすぐさま起き上がり構える。

恭「……………」

理樹を含め喪先輩達は何も言わずに戦いを黙って見続けていた。

何度かダウンしふらふらになりながらも岡崎さんは戦いを止めようとしな

佳「もう止めた方が」

河「そろそろヤバイな」

河南子もだんだんと焦りの表情を見せた。

河「おい、もうやめとけ」

河南子が遂に制止の言葉をかけた。

朋「やめられない。俺があいつらを守らないと」

岡崎さんは止める気はないらしかった。

男「そろそろ終いだ」

対戦相手の男が岡崎さんの腹に拳を放った。

朋「かはっ——!!」

河「まずいつ!」

相手は今の一撃で動けなくなっている岡崎さんの頭部に大振りのパンチを繰り出そうとした。

見ていられなくなり思わず目を閉じた。

ザツと誰かが走り出す音がした。

間もなくして鈍い音が響く。

それと同時に集まっていた男達の怒声が聞こえた。

開いた目に映ったのは岡崎さんと相手の間で倒れている理樹だった。

佳「理樹ッ!!」

駆け寄ろうとしたが棗先輩に止められた。

恭「真人、謙吾」

真「おう」謙「ああ」

短く返事する二人は怒り心頭といった様子だ。

宮沢は理樹の方へ駆け寄り、無事を確かめると抱きかかえてこちらに帰ってきた。

佳「理樹はッ!？」

謙「目立った外傷はない。気絶しているだけだと思っ」

佳「…よかった…」

とりあえず怪我らしい怪我がなかったのは幸いだ。

私は緊張の糸が切れたようにその場にへたり込んでしまった。

朋「おい、お前何やって—」

岡崎さんの声に顔を上げると井ノ原が対戦相手と岡崎さんの間に立ち構えていた。

男「どういうつもりだ？」

真「選手交代だ。お前の相手はこの俺だ」

男「手加減はなしだ」

井ノ原の体軀を見て鍛えていることが分かったのだろう、先程までとは明らかに威力の違うであろうストレートを放った。

井ノ原はそれを避けようともせず腹に直撃する。

真「仲間！手をあげる奴あー」

両手を組み、振り上げる。

真「この俺が許さねえッ!!」

振り下ろされたハンドハンマーは男の頭にクリティカルヒットし、それきり動かなくなつた。

真「次はどいつだ！」

井ノ原が土手を睨みつけると一人の男が現れた。

真「お前か」

男「いや、こいつを回収しに来ただけだ」

真人の足元でのびている男を指差しながら言う。

男「すまなかつたな、庇いに来たとはいえ無関係の奴をまきこんじまつた。このタイマンは今日で終わりにする」

井ノ原に向かって頭を下げた。

真「あいつらはそれで納得すんのか」

男「しなくてもさせるさ」

男は倒れている人の腕を取りそのまま引きずって行つた。

そして「その気絶してる兄さんが起きたら俺の代わりに謝つといてくれ」とだけ言い残し、土手にいた残りのメンバーも引き連れていなくなつた。

残っているのは私達だけ。

恭「真人、思いきりやれ」

井ノ原に指示を出していたが何のことか分からなかつた。

真「言われなくてもやる」

井ノ原は岡崎さんの目の前に立ち――

ドゴツ!!

岡崎さんの頬を力一杯殴つた。

朋「ツッてえな!!何しやがる!!」

恭「分からないのか?なら謙吾、次はお前にまかせる」

謙「まかされた」

今度は宮沢が岡崎さんの前に立つ。

謙「歯、食いしばれ」

言い終わるのが早いか遅いか宮沢が拳骨で井ノ原が殴った方と反対の頬を殴る。

恭「朋也、お前は一人で抱えすぎだ。何もかも一人でこなそうとするのは傲慢だ」

朋「それでも俺がやらなけりや」

唯「それで理樹くんは傷付いたのだよ」

言いながらアツパーをきめる来ヶ谷さん。

岡崎さんは星空を眺めるように仰向けに倒れたまま動かなくなった。

朋「……ならどうすりや良かったんだ？」

恭「簡単だ、俺達に相談しろ。そうすりや全力でお前の力になってやるぜ」

朋「じゃあ次からそうする」

恭「そうしろ」

朋「さっそく頼みがあるんだが」

恭「なんだ？」

朋「起こしてくれ、動けん。雪に寝そべってるからすげえ寒い」

恭「いい葉だ。しばらくそうしてろ」

朋「…そうだな。少しこうしてから帰る」

恭「じゃあ俺達は帰るぞ。理樹を連れてかないとならないしな」

朋「ああ」

誰か残った方がいいのではないかと思つたが来ヶ谷さんに止められた。

「男には情けをかけてはいけない時がある。それが今だ」そうだ。

男のプライドというやつかしら？

よく分らないけど。

私達は岡崎さんを残し家に帰った。

岡崎さんが戻って来たのはそれから二時間も経つた後だった。

その瞳に映るのは

恭「恋愛相談がある」

あの喧嘩騒動から二週間。

私達の生活はいつもの変わらぬ日常を取り戻していた。

岡崎さんの怪我也すっかり跡が見られなくなった。

変わったことがあるとすれば岡崎さんの様子だろう。

打ち解けたと言えいいのかしら。

恭「いや、無視するな」

面倒ですから。

佳「面倒ですから」

恭「思ったまま言うなよ」

理「佳奈多、そう言わないでさ」

はあ……

佳「神北さんが好きなら告白すればいいじゃないですか」

理「!？」

恭「……なんでわかった」

佳「わかりますよ」

理「全く分からなかったんだけど」

佳「理樹には分からないかもしれないわね」

だつて私が気付けたのは棗先輩の神北さんを見つめる目が私を見つめる理樹の目に似ていると思ったからだもの。

理樹本人では気付けないだろう。

理「？」

理樹は首を傾げていたけれど敢えて説明はしなかった。

佳「それで、何の相談がしたいんですか」

恭「それがだな、その……あの……」

珍しくしどろもどろな先輩は見ていて面白かった。

佳「はつきりしないならどうぞお帰りを」

恭「…告白ってどうすればいい」

佳「自分で考えてください。以上」

理「容赦ないね」

恭「ま、待ってくれ」

佳「まだ何か？」

恭「自分で考えまくって、答えが選べなかったから来たんだ」

佳「つまりプランを立てすぎて選べない？」

恭「そうだ」

理「ちなみにどんなのがあるの？」

恭「例えば…」

先輩は嬉々としてプロポーズ案を語りだした。

恭「とか他には…」

佳「褒先輩」

恭「どうした？」

佳「はつきり言ってしまうえば、あなたの妄想に付き合ってもらえません」

恭「なぜだ!？」

佳「無理なものが多すぎます。高級レストランで食事後、隣のビルを見ると部屋の明

かりが『I LOVE YOU』とか不可能でしかないじゃないですか」

恭「ああそれは謙吾が出した案だ」

佳「宮沢……」

そんな残念なキャラだったんだろうか。

理「まあ恭介らしくやるのが一番じゃないかな」

恭「俺らしく？」

理「どんな告白の仕方だとしても大事なのは恭介が小毬さんのことが好きだったことだよ」

佳「確かにシチュエーションも多少はあるけどそれ以上に大切なのは気持ちだわ」

恭「……そうか、そうだな」

納得した様子の子の先輩は懐から携帯を取り出し誰かに電話をかけた。

恭「……俺だ。今大丈夫か？……今理樹達のところにいるんだが来れるか？……わかった、待ってる。じゃな」

まさか――

理「今のつて」

恭「小毬だ。俺はこれから告白する」

佳「まったくなんでウチでする気になってるんですか」

恭「俺が俺らしくあるためだ」

佳「それでは私達はお隣に行っているのでせいぜい頑張ってください」

理「頑張つてね恭介」

私達は棗先輩一人を残して部屋を出た。

佳「大丈夫かしら？」

もしも告白が失敗したら神北さんはリトルバスターズに居辛くなるんじゃないかと思つた。

理「大丈夫だよ」

理樹は当然のように答えた。

佳「どうして？」

理「だって小毬さんが恭介を見る目って――」

その後しばらく、私達の話題は新たなカップルの誕生でもちきりだった。

Beginning to run 前編

智「河南子、話があるんだ」

智代さんが河南子の正面に座った。

河「ほへ？」

智「河南子」

改めて名前を呼んで向き合った。

智「だからだら過ごしていても、何も変わらない。よくしていくこと、それが大事なんじゃないか？」

河「よくしていくこと？」

河南子は怪訝な顔をした。

河「んーじゃあ、母親を説得して再婚止めてくださいか？」

河南子が岡崎さんのところに居着いているのは母親の再婚話が発端だった。

智「いや…それは私が口出しできることじゃない。でも、話し合って、お互いの気持ちをもっと知れば、よくなると思う」

河「うわ、教科書通りの説得だあ」

佳「そんなにお母さんの再婚が嫌なの？」

河「嫌」

河南子は短く拒絶の意を示した。

佳「それは亡くなったお父さんのことが引つかかっているの？」

河「もちろんそれもあるよ。でも、それはさ…象徴なんだよね。先輩が信じてる、ずっと続いていく愛なんかないっていうさ」

智「……………」

河「そんなものがなかったらさ…楽しく生きたもん勝ちじゃん。あたしはさ、ここだからだら暮らしているのが好きなんだ。楽しいから。苦しいこともないしさ」

切実なその言葉に私も智代さんも何も返せなくなった。

鷹文君のキーボードを打つ音だけが響いていた。

ともだけが不思議そうに、私達の顔を無遠慮にきよろきよろと見回していた。

あーあ、冬休みだったのにテンション下がっちゃった…とも肉まんでも買いにいこっか」

と「いくー」

河南子は立ち上がり、ともを連れて部屋を出ていく。

智「河南子は…」

ドアが閉まってから、智代さんが口を開いた。

智「ああはいうが、苦しいんじゃないだろうか。なんだか…救いを求めているように見えた」

佳「そうね」

智「助けてあげたい」

カタカタカタカタ

鷹文君のキーを打つ音が一際大きくなっていた。

これ以上聞きたくないということね。

佳「鷹文君少し姉さんを借りるわね」

鷹文君の答えを待たず智代さんを連れ出した。

佳「河南子が救いを求めているとしたら、それは鷹文君によ」

歩きながら話し始める。

佳「最初からあの子の目的は鷹文君に会うことだったみたいだし、あの子は今もきつと鷹文君が好きよ。だから確かめに来たんじゃないかしら、鷹文君もまだ自分のことを好きでいてくれてるってことを」

智「うん…そうだな。私もそう思う」

佳「でも、何かがふたりを割いているんでしようね」

智「そうなのか：？」

佳「たぶんね。問題はふたりが別れた時、三年前に何があったかよ」

智「三年前か：」

智代さんはすつと目を細めた。

佳「鷹文君が家族を繋ぎ止めるために公道に飛び出したのも、河南子がお父さんを亡くしたのも、ふたりが別れたのも全て三年前。智代さん、三年前に起きたことを知っている範囲で教えてくれないかしら」

しばらく沈黙した後：

智「河南子の父親は、陸上部の顧問だったんだ。鷹文はその人を慕って陸上をしていて。長距離走者だった。その父親が亡くなったのは鷹文が公道に飛び出した三ヶ月後。鷹文が退院して少ししてからのことだ。元から心臓が弱い人で：心臓発作で倒れてそのまま：」

智代さんは一度そこで言葉を切った。

智「そして：それを境に鷹文と河南子は疎遠になった。私が知ってることはこれだけだ。悲しいことにな」

佳「十分よ。後は鷹文君に直接聞くわ」

智 「それは容易なことじゃないぞ」

先程の鷹文君の様子を思い出す。

佳 「分かってるわ」

智 「どうするんだ？」

佳 「話を…してみるわ。出来れば二人で」

智 「わかった、私は少し出ていよう。鷹文を頼む」

私は一人で鷹文君のいる部屋に戻った。

Beginning to run 後編

鷹「おかえり、つてあれ？姉ちゃんは？」

佳「ちよつと出かけてもらったわ」

鷹「……………」

鷹文君はすぐに察したようだった。

鷹「それで、僕から三年前に何があつたか聞こうつてわけ？」

佳「半分当たりよ」

鷹「半分つて？」

佳「まずは私の昔話を聞いてもらうわ」

鷹「は？」

佳「どこから話せばいいかしらね…」

私は鷹文君に全てを話した。

家のこと、葉留佳のこと、理樹のこと、私が話せることは全部。

佳「質問はあるかしら？」

鷹「何の前振りもなくとてつもなく重い話を聞かされた僕への配慮は？」

佳「ないわ」

鷹「ははっ即答」

佳「それじゃあ今度は鷹文君が話す番よ」

鷹「……ぜんぶ、教えてくれたんだ」

鷹文君が呟くように話し出した。

鷹「勉強も、運動することも、仲間を作ることも……生きるこの意味もぜんぶ」

—それまで無気力に生きていたこと。

—恩師に誘われて陸上を始めたこと。

—河南子に出会ったこと。

—河南子に惚れたこと。

—河南子と付き合い始めたこと。

—家族を守るために恩師を裏切ったこと。

鷹「最後に言われたんだ……そんな奴に河南子が河南子がやれるものか、つてさ……そしてそれが本当に最後の言葉になった。僕はずっと、先生の言葉を待ち続けてたんだ……許しの言葉を……でも聞けなかった」

私は黙って聞き続けた。

鷹「その日以来、僕は夢を見る。全力で走ってる夢。周りがなんにも見えなくなるぐ

らしいのスピードで……心臓がばくばくいって、破裂しそうで……それでも破裂しない限り、全速力でひた走る。ゴールのテープを切る。振り返ると、遙か地平線の向こうに、他のランナーたちが見える。滑稽なくらい小さい。僕はそれで勝つたんだと気付く。僕は、息を切らせながら、先生の元に駆け寄る。勝利の報告をする。そして、いつものように、これで河南子をくれますかって、訊こうとする……だけど、それ以上何も言えなくなる……先生は優しい顔で僕の言葉を待ってくれている。でも言い出せない。それは、僕が現実にあつたことを知っているから。先生が、次に言う言葉は決まっているから……そんな奴に河南子がやれるものか、つて……だから、僕はもう何も言えない……ただ先生の前から逃げ出したい。先生が優しい顔のままにいるうちに。でも疲れきっていて、足は動かさない。苦しくなつて……もだえて……飛び起きる。もう、終わったことなのに……全部、終わったことなのに……今でもたまに見る。それは呪いみたいなものなんだ。僕の過ちの……」

鷹文君の話はそこで終わつた。

鷹「ね、佳奈多姉え」

佳「なに？」

鷹「すべて昔話だからね。もうすべて、終わつてるんだ。僕はもう、河南子のことが好きじゃない。ただ、たまに昔のことを思い出して、夢でうなされるだけ。それも少なくなつてきてる。すべては、時間が解決してくれる。便利なもんだね。だからさ……くれ

ぐれも、ねえちゃんに話したりしないですよね」

それだけ言い残して鷹文君は自分の家に帰っていった。

佳「…というわけよ」

私は帰ってきた智代さんにすべてを伝えた。

今この場にいる岡崎さんと理樹、それに偶然遊びに来た棗先輩と神北さんにも聞いてもらった。

智代さんは涙を流していた。

と「わー、ともがはなしきくよ、なににな」

話を理解していないともが智代さんをなぐさめていた。

ともを抱きしめて、顔を上げた。

智「鷹文ひとりが…すべてを犠牲にしてたんじゃないか…私たち家族のために…」

朋「そうだな…」

智「夢でうなされてるのも知ってた。わけを訊いても、教えてくれなかった」

朋「あいつはさ…夢の中で、今も走り続けてるんだ。ずっと苦しみながら。救ってやってくれ」

智「うん…」

智代さんは手の甲で瞳に湛えた涙を拭った。

智「あいつを幸せにする」

小「きつとできるよ」

河「たっだいまー」

出かけていた河南子が帰ってきた。

河「うわっ、修羅場？」

泣きはらした智代さんを見て引いていた。

智代さんは立ち上がると河南子に近づいた。

河「え、なに…ん、やんのかっ…うわっ」

構えかけた河南子を抱きしめる。

河「え？あたしに乗り換えんのっ？」

智「河南子…こんなにも長い時間…つらい思いをさせてしまった…許してくれ…私が絶対に、お前を幸せにする…」

河「は、はあ…」

河南子は啞然としたままだった。

F i n i s h i n g r u n n i n g

時は流れ、日曜日を迎えた。

意外と有名な大会なのか、思いのほか多くの参加者がいた。

去年の今頃は部屋に閉じ込められ勉強をしていたのでまったく知らなかった。

誰もが思い思いにアップを行って、スタートの時刻を待っている。

朋「何キロ走るんだ？」

智「鷹文は15キロのコースだ」

気の遠くなる長さだった。

岡崎さんが練習の3キロでさえ、息を切らしていたことを思い出す。

コースの見取り図が大きく張り出されていて、一番長いコースが15キロになっていた。

山を駆け上がり、峠道の側にある森林公園を一周してから、坂道を駆け下りる起伏の激しいコースだった。

小「すごく長いね」

謙「あいつ、大丈夫なのか？」

智「昔はこれぐらい平気で走っていた。それに優勝しろなんて言っていない。ただ走りきってほしいだけだ。走り終えるためにな」

真「？」

井ノ原を含め他のリトバスメンバーもきよとんとしている。

鷹文君のことを知っているのはこの間話したメンバーと来ヶ谷さんだけ。

：あの人どこから情報得ているのよ：

理「あ、いた。鷹文だ」

理樹が集団の中から鷹文君を見つけ出した。

鷹文君はスタート地点の広場のやや後方にいた。

朋「おまえも、応援してやれよ」

岡崎さんは振り返って、河南子に向けて言った。

河「……………」

ロープで張られた導入口側で声をかけた。

佳「頑張って」

葉「がんばれー！」

ク「頑張ってください！」

鷹「無理しない程度にがんばるよ」

ストレッチで上半身を伸ばしながら、鷹文君が答えた。
スタート30秒前。

参加者が位置に着く。

鷹文君は気の抜けた顔のまま、やや見上げていた。

声「よーい」

スピーカーからスターターの声が響く。

パーーーーン！

号砲が鳴り、一斉に走り出す。

智「鷹文はどこだ？」

恭「あそこだ」

集団の中央、元気なお爺さんたちと同じくらいのスピードだった。

智「よし、朋也、河南子、追いかけるぞ」

朋「は？」

岡崎さんが訊き返す。

智「鷹文を叱咤するんだ。あいつは真面目に走ろうとしていない。だから、追いかけてちゃんと走らせるんだ」

言うが早い、智代さんは走り出していた。

朋「お、おいっちよつと待てよ！」

岡崎さんは慌てて追いかけていった。

河南子もそれについていった。

残される私達。

魚「私達はどうしますか？」

恭「ミツシヨンだ」

真「よっしゃあ！」

恭「各自ポイントに着き鷹文の応援するぞ。ポイントに鷹文が到着し次第ゴールに戻ってこい」

理「了解」

恭「ミツシヨンスターだ!!」

棗先輩の合図とともに私達も一斉に走り出した。

ク『おーばー、鷹文さんが来ました』

恭『了解した』

ク『リキ』

理『何?』

ク『今のおーばーの発音はねいていぶつぽかったんじゃないでしょうか!』

理『そうだね』

ク『わーふー』

小『ほわあ!?!』

恭『どうした!?!』

小『智代さんたちが草むらから出てきて驚いたよ』

智『やればできるじゃないか』

少し離れたところからだろうが智代さんの声が響いていた。

恭『とりあえずお前たちはゴールに向かえ』

葉『鷹文君来ました。へばってきてますネ』

魚『あ：岡崎さん達も来ました』

朋『死ぬ気で走れよっ!』

鷹『死ぬよっ!』

鷹文君の悲鳴のような声が聞こえた。

その後も他のメンバー達のところにと到着するくらいタイミグで智代さん達が応援に駆け付けていた。

コースとは違って近道しているとはいえ、よく体力がもつわね…

改めて智代さん達の身体能力の高さに驚かされた。

皆がゴール前に息を切らしながら集合する。

朋「きたぞっ！」

智「あと少しだ！頑張れっ！」

皆で声を枯らす勢いで応援する。

鷹「うあああああああー！ー！ー！ー！ー！」

ふらふらになっていた鷹文君は最後の力を振り絞り、前を走っていたランナーを抜きゴールした。

全員が駆け寄った。

智「よし、よくがんばったな、鷹文」

鷹「……はあ……はあ……はあ……」

朋「すげえラストスパートだったな」

真「ナイスガッツ」

謙「見直したぞ」

鷹「……………」

恭「後はゆつくり休め」

鷹「…ぼくは…」

唯「うん？」

鷹「…優勝した…？」

智「いや…」

鷹「負けたの…？一位じゃなかったの…？」

智「ああ…」

鷹「何位だったの…？」

智「……………」それは…」

佳「31位よ」

鷹「……………」

言い辛そうにする智代さんの代わりに私が答えた。

鷹「な…なんだよ、それ…そんな悪い成績、聞いたことないや…はは…」

鷹文くんは目を閉じ俯いた。

そしておかしい声で呟く。

「先生」

きつと報告をしているんだろう。

今は亡き恩師に。

鷹「…先生、僕、走りましたよ…走りました…でも、ぜんぜんダメで…」

智「鷹文…」

鷹「ダメでしたけど…でも…楽しかったです」

朋「……………」

鷹「今も、僕の周りには仲間がいてくれて…それは、先生が集めた陸上部みたいな、毎日馬鹿をしてる人たちで…」

佳「……………」

鷹「あの頃みたいだったんです…一番楽しくて、幸せだった時…みんながいて、一緒に馬鹿やって、盛り上がった…それで、そばにはいつもあいつがいてくれて…」

鷹文君の懺悔のような呟きを誰にも止められない。

鷹「先生…僕は…先生と…あのくそ弱い陸上部と…河南子が…好きでした…大好きでした…」

誰にも止める権利がなかった。

鷹「そして…今も僕は…河南子が好きです…大好きです」

「許すよ」

鷹「……………」

ただ一人を除いて―

鷹「え…」

河「許すよ」

驚いて上げた鷹文君の頬に手を当て河南子が答えた。

鷹「かなこ…」

河「許すから。あたしが許すから…あんたが夢で苦しんだら…あたしがそばで、こうして、許してあげるから…許し続けるから…だから、もういいんだよ…もう…夢の中で走らなくても…」

鷹「もう…走らなくていいの…?」

河「うん、もういいんだよ…」

鷹「もう…勝たなくていいの?」

河「勝たなくていいよ」

鷹「もう…夢におびえなくていいの…?」

河「うん、もう、怯えなくていいよ…許すよ…ぜんぶ。あたしが許すから…」

鷹「……………」

河「だから、もう休みなよ…夢の中でも…おつかれさま」

鷹「……………う…うあああ…」

鷹文君は河南子の胸の中で泣いた。

恩師の名前を連呼して。

晴れ、金属音、河原にて

佳「行ってくるわね」

理「行ってくるよ」

葉「ほいほーい楽しんできてネ」

葉留佳に見送られ私達は出かけた。

今日は久しぶりのデートだ。

ここのところ、色々ありすぎて全然二人の時間を作れていなかったので楽しみだ。

佳「どこに行くの？」

理「とりあえず市街地に出てみようと思う。後は雰囲気かな」

佳「要するにノープランね」

理「ごめんごめん、佳奈多と以外街に出て遊んだりしないからどこに何があるか分からなくて」

佳「いいわよ。理樹がいるところならどこだって楽しいもの」

理「ありがと、じゃあ行こう」

どちらからともなく手を繋ぎ、街へと歩き出した。

とりあえず午前中は以前行った小物屋をいろいろ見て回った。

今、私達はファーストフード店で食事中だ。

理「これからどうしようか」

佳「どうしましょうか」

元々二人ともこういうことには不慣れなのでどうしても行き詰まってしまう。

佳「？宮沢？」

窓の外をふと見るとなにもやらそわそわした様子の宮沢がいた。

理「あ、ホントだ」

いつもの様に剣道着にリトルバスターズジャンパーという見ているこっちが寒くなる格好なので正直すぐく目立っていた。

理「何してるのかな？」

佳「待ち合わせ、じゃないかしら」

理「恭介たちかな？」

佳「それなら一緒に出てくるんじゃない？」

その答えはそう待たないうちに現れた。

理「古式さん…だよね？」

佳「そうね」

宮沢の待ち人はどうやら古式みゆきさんだったようだ。

佳「へえ：やるじゃない、宮沢」

理「あ、行っちゃやうね」

やたらオーバリーアクションな宮沢とそれを見てかくすすすと笑う古式さんは人の流れに消えていった。

佳「今度会った時のからかうネタが出来たわ」

理「程々にね」

佳「そろそろ出ましようか」

理「そうだね」

会計を済ましてその後どうするか話し合った結果、家でのんびり過ごそうということになった。

こうして外で遊ぶのもいいけれど家でまったりいちゃつく方が性に合っているという共通見解だった。

帰り道、河原を通ると私達と同じくらいの歳に見える人達が野球をしていた。

ここ最近はず雪も降らず快晴のため野球が出来るくらいに乾いてしまっていた。

「悪い、その人」

見ていることに気付いたのか声をかけてきた。

「ちよつと手を貸してくんねーか？こつち一人足らねーんだ」

理「どうする？」

佳「手伝ってあげたら？もう帰るところだったんだし」

理「わかった」

理樹は土手を走って降りていった。

私はゆっくり歩いていくと応援してる子達のところに行つた。

「すみませんあのアホが急に」

車椅子の少女が謝つた。

佳「いいのよ。それにしてもこの時期に外で野球するのも珍しいわね」

「アホの集まりですからSSSSは」

佳「SSSS?」

「まあ仲良し集団みたいなものです」

リトルバスターズみたいなものかしら？

佳「へえ、私達も似たようなチームの一員よ」

「そうなんですか？」

佳「学校内で缶蹴りしたり、肝試ししたり、馬鹿なことばかりやってるけどね」

「ウチも同じようなもんですよ」

親近感からかこの子達とも打ち解け、試合は理樹の安打で勝利した。
また今度一緒に遊ぶ約束をして別れた。

佳「面白い人達だったわね」

理「うん、僕達となんか似てるって気がした」

佳「あの高松って人は井ノ原と同じものを感じるわ」

理「そうかな？」

佳「そろそろ帰りましょう。葉留佳がお腹を空かせて待ってるわ」

理「そうだね。でもこのくらいはいいかな」

そう言うのと理樹は不意に私にキスした。

佳「もう、こんなところで」

理「大丈夫、誰も見てないよ」

佳「仕方ないわね。私だって我慢してたのに」

今度は私から理樹にキスをした。

今日も一日、いい日だったわ。

母をたずねて約何里？ 前編

朋「とももの母親を探したい、手伝ってくれ」

岡崎さんがそう言って協力を頼みに来たのはあのデートからそう間の空かない内のことだった。

今日は棗先輩と神北さん、それに来ヶ谷さんと西園さんがウチに来ていた。

なんでもあのデートの日、岡崎さん達は写真を送る件でとももの母親と会っていたらしい。

その上で何故とももの母親がともを手放すに至ったのか知りたいと思っただけだ。

佳「当てはあるのかしら？」

朋「いや、まだ何も。ここ数日図書館から借りた本で書体について調べたけど何も掴めなかった」

理「書体？」

朋「手がかりという手がかりはとももの母親から届いた手紙だけなんだがそれが今時珍しく筆で書かれてたんだ。それで調べてみた」

岡崎さんは懐から封筒を取り出し手紙を私達に見せた。

恭「確かに筆書きだな」

棗先輩が見たままを言う。

ふむ、と来ヶ谷さんが何かに気付いたような反応を見せた。

小「ゆいちゃん、何かわかったの？」

唯「ああ、そしてゆいちゃんはやめてくれ……」

いつもの様に冷や汗をかきながら続けた。

唯「この紙は恐らく雁皮紙だろう」

朋「雁皮紙？」

葉「なんですかそれ？」

美「ジンチョウゲ科の植物である雁皮から作られる和紙のことです」

唯「流石博識だな。補足するとこの紙が作られているところはあまり多くはない。こ

の辺りの近くであれば……」

来ヶ谷さんが言った地名をメモすると急いで隣の部屋に戻っていった。

私達も後を追っていくと鷹文君の喜びの声が出迎えた。

鷹「やった！1件のヒット！完全に絞れたよっ」

皆でパソコンの画面を覗きこむと地方紙のニュースが載っていた。

朋「ここにいるんだな……」

唯「おそろくな」

智「ただいまー」と「ただいまー」

ちようど智代さんとともが帰ってきたようだった。

智「皆集まってどうしたんだ？」

朋「見つかったんだ」

ともがいるので何をかは伏せて言ったが智代さんにはちゃんと通じたらしい。

智「とも、私はちよつとお隣に行つてくるが絵本を読んで待つてくれ」

と「うん、わかったー」

ともが絵本を読み始めるのを確認してから私達は目配せして部屋を出た。

智「みんな、ありがとう」

智代さんはそう私達を労った。

朋「しかし辿り着くだけでも、大変そうな場所だな…」

恭「仕事は大丈夫か？」

朋「有給を使うさ」

恭「そうか…そうだな」

鷹「ともの面倒は僕らがみてるよ」

朋「ああ、よろしく」

河「待って」

話が決まりそうになったところで河南子が割り込んだ。

河「鷹文は、お留守番。あたしはミステリーツアー参加で。あたし、戦力になるよ」

朋「いや、戦わないから」

河「相手はあれですよ、洗脳された村の住民たちですよ。禍々しい神とか祀ってますよ。展開的には、一度はみんな縛られて、監禁されますよ」

智「こら、勝手に住民を悪者にするな」

智代さんから指導が入った。

河「でも精神が弱い人だったんでしょ？ すぎるものが必要だったはずだよ。閉鎖された山中、宗教的なものを感じずにはいられません」

智「ただ単に身を寄せられる知り合いがいるだけかもしれないじゃないか」

河「じゃあ、どうしてともを連れていかなかったの？」

ともがいなかったから隠さずに言った。

智「それは…その人の身勝手だ…」

河「住民は悪く言ったら怒るのに、その人のことは悪く言うんですね、先輩は」

佳「今のは私もどうかと思うわ」

智「いや、今のはなしだ：口がすべった：」

流石に智代さんも悪いと思つたのかばつが悪そうにしていた。

智「そうだな：」

腕を組み変えて、思い直したように言う。

智「河南子の言う通りかもしれない。何かをそこで盲信しているのかもしれない」

いや、それはない。

智「目覚めればきつと：」

そこまで言うとは智代さんは押し黙つた。

もし仮にそうなればとも別れなくてはいけないことが分かつているからだろう。

智「……………」

河「ほら、あんたたちだけじゃ、こんな風に辛気臭くなるっしょ？もー仕方ないな、あたしが行つて、盛り上げてあげるよ」

朋「いや、盛り上がる必要ないから」

鷹「いいよ、河南子。一緒に行つてきなよ」

朋「いや、お前が決めるなよ。全然良くないよ」

河「まあ、連れてけ。実はあたしキーパーソンなんだ」

朋「いや、キーパーソンはそんなこと言わないから」

鷹「いいよ、河南子。お前がやりたいようにやれよ」

さつきから鷹文君がひたすら河南子について行かせようとしている。

朋「だから、お前が決めるなよ、なに爽やかに言っただよ」

河「わがまま言うなああああーっ！」

朋「いや、お前だろ」

河「……ごめん、連れてってください」

朋「お前、プライド無いのな」

恭「どうするんだ？」

朋「はあ……河南子も連れていく」

河「見たか、鷹文、ばーか、鷹文、ばーか」

鷹「なんで僕がくそみに言われているのかよくわかんないけど、まあ、留守番は僕に

任せておいてよ」

確かに河南子がいれば、重い空気は払われるだろう。

朋「それで、お前達はどうする？」

岡崎さんは私達に聞いてきた。

佳「もしいいならついて行きたいわ。乗りかかった船だもの」

智「もちろん構わないぞ」

葉「私も行きますヨ」

理「恭介は？」

恭「すまないが俺は就活があるから行くことは出来ない」

理「そう…」

残念そうにする理樹。

ちよつと嫉妬しちゃうわね。

小「私も老人ホームのボランティアがあるから、ごめんね」

唯「私は同行しよう」

美「私は留守番の方でお手伝いさせていただきます」

恭「とりあえず残りのメンバーにも、とものことを気にかけるよう話しておこう」

智「すまない、私達の問題なのに」

佳「何を今更言ってるのよ」

恭「そういう時は言うことが違うな」

智「…ありがとう」

こうして岡崎さん、智代さん、河南子、私、理樹、葉留佳、来ヶ谷さんがともの母親を探しに行くことになった。

母をたずねて約何里？ 中編

早朝。

以前学校へ行っていたよりも早く、駅に集合していた。

それぞれ大きめのカバンを持参した。

何日間の旅行になるか分からないので数日分の着替えなどが入っている。

朋「忘れ物はないな」

河「んなことしてるかー」

智「大丈夫だ」

佳「平気よ」

葉「準備万端絶好調ですよ」

理「うん、大丈夫」

唯「問題ない」

ちなみに出来るだけ品行よく見せるため、岡崎さん以外は皆制服だ。

まあ3種類の制服の集団は傍から見るとむしろおかしく見えるかもしれないけれど。

河南子や葉留佳は特に気を付けなければいけないのであらかじめ嚴重注意しておい

た。

智「それより、旅費の方が心配なのだが……」

朋「……まあ、寸志もらったからな」

岡崎さんは仕事場の親方さんからある程度もらっていたらしくそれを今回の三人分の往復と宿代に充てるらしい。

私達はというと普段切り詰めた分だけではどうしても心許なかったので両親達に事情を説明して援助してもらった。

流石にお隣の家の隠し子の母親に会いに行くとは言える訳もなかったので人助けのためとだけ話したが、両親達は納得してくれた。

今度会ったときは肩でも揉んであげようかしら？

朋「時間、大丈夫か？」

智「あと20分くらいあるな」

河「ねー、アイス買っていい？」

朋「仕方のないやつだなあ……」

葉「あ、私も食べたい。いいでしょお姉ちゃん？」

佳「はあ……仕方ないわねえ」

葉「やった」

河南子と葉留佳は揃ってアイスの自販機に走って行った。

朋「お互い大きい子供を持つと苦労するな」

佳「ええ：まあそんなところも可愛いけれど」

朋「そうか？」

智「可愛いじゃないか」

唯「うむ」

それから私達は電車が来るまでアイスを頬張る二人を眺めていた。

車窓を流れていく景色は、それなりに楽しかった。

実のところ、この街を出たことのない私達は電車に乗るのも初めてだった。

一般知識としてどんなものかは知っていたけれど、こうしていざ乗ってみると新鮮味が感じられる。

車内販売もなかなか風情があつていいと思う。

葉留佳も同じようですつきから辺りをきよろきよろと見回したり座席の感触を確かめたり落ち着きがなかった。

河「あ、アイス買ってーっ」

朋「仕方のないやつだなあ：つて、お前、さつきも食ってなかったか？」

そう言いつつも販売の女性を見つけると買ってあげていた。

割と溺愛してるんじゃないだろうか？

河「でも、こういうのもいいよねー」

アイズに嘯り付きながら河南子は心底楽しいといった様子で言った。

河「あー、ともも連れてきてあげたかったなあ」

…鷹文君は？

座っているのに体が強張りだした頃、私達はようやく目的の駅に到着した。

鷹文君が作ってくれた乗り換え案内によるとここから先はバスで行くらしい。

街道を抜け、山道に入る。

民家が少しずつ減っていく、その代わりに田畑と山林が広がっていく。

目的地のバス停に着く頃には私達しか乗客がいなくなっていた。

降りがけに岡崎さんがバスの運転手さんに話を聞くと、時々人の出入りがあるらしかった。

一本道だから迷いはしないが遠いと同情された。

理「まだ結構歩きそうだね」

智「とりあえず先に昼を済ませた方が良さそうだな」

とはいえ、店らしいものは目の前の小さな雑貨屋しかない。

河「あ、アイスも買っている」

朋「仕方がないやつだなあ……って、仕方がないことあるかつ！何本目だよつ」
あ、流石にツッコんだ。

智「まあ、高いものでもなし、いいじゃないか」

朋「仕方がないやつだなあ……」

そこでパンとアイスを買って求め、近くのベンチに座り昼食を済ませた。
冬によくアイスをそんなに食べられるものだ。

徒歩で山道に入る。

河「鬱蒼としてますな、うっそーってくらい」

智「この辺は、夏は涼しくなって気持ちよさそうだ。」

佳「住み心地がいいでしょうね」

智代さんが河南子のダジャレを素でスルーしたので敢えて私も乗ってみることにした。

河「先輩方、河南は傷付きました」

智「何をうなだれているんだ？」

前々から分かっていることだが智代さんにはツッコみの素質は皆無だ。

そういう意味では河南子と智代さんの相性は最悪なのかもしれない。
たぶん葉留佳とも。

今まで、誰かしらがツツコんでいたから河南子は自然に振る舞えてたのではないだろうか。

葉「まー、気持ちは分かりますヨ」

同類的なものを感じてか葉留佳が同情していた。

河「いいんだ、ひとりで雪うさぎ量産して動物園作るんだ…」

拗ねたように、しゃがみ込む河南子。

河「あぶなーーい！雪玉トラップだあああーっ！」

ひよいひよいと雪玉を投げつけてくる。

岡崎さんと智代さんにくっつか当たった。

河「少しは避けるよ、お前ら」

朋「いや、お前こそ少し落ち着けよ」

河「あんたたちの危機感を試してみたんだよ。全然なつてないね。これが鉛玉だったら、お前ら死んでたぞ」

唯「ほう？では君も戦死だな」

いつの間にか河南子の背後に回っていた来ヶ谷さんが河南子の背中に雪を入れた。

河「わひやあ!」

はっはっはと来ヶ谷さんが高笑いする中、岡崎さんが理樹に何か耳打ちしていた。

佳「何て言われたの?」

理「何があつてもツツコむな、だって」

智代さんがすつと一歩前に歩み出た。

智「あのな、河南子」

河「うん?」

智「雪玉は鉛玉じゃないから、死なない」

河「…うん」

智「……………」

河「……………」

うわっ…この子の相性、悪すぎ…?

その後も河南子は必死にボケ続けたが智代さんに素で殺され続け、終いには「うあああああーっ!あたしの存在価値0じゃんっ」と泣き崩れてしまった。

あなたの存在はギャグがすべてなの?

そうこうしているうちに山道が途切れ、目の前に見えたのは、どこかで見たような田

舎の風景だった。

母をたずねて約何里？ 後編

辿り着いたそこは家が点在していて、大部分は畑のようだった。

高台には一際大きい建物があり、その周囲には人影が見えた。

智「…のどかなところだな」

河「でも見かけだけかもしれないよ。部外者だと知れたら、いきなり襲いかかってくるかも」

失礼極まりないわね。

河「用心して進みましょう。先頭はあたしがいきます」

河南子を先頭に、人のいる方へと歩き始めた。

あぜ道は舗装などされていなくて土がむき出しの状態だった。

先程の大きな建物を辿り着くと、門のそばに一人の男性がいた。

朋「あの、すみません。ちょっと訊ねたいことがあるんだけど」

男性は黙ったまま建物を指差すと畑の方へ走り去っていった。

唯「襲いかかるどころか逃げていったな」

朋「俺、そんなに怖いかな？」

理「いや、そういうわけじゃなさそうだけど」

佳「とにかく、入ってみましょう」

木造の建物は外よりは暖かった。

床はワックスがけもきちんとされていて、外観の割には手入れがすっかり施されていた。

朋「すみません」

岡崎さんの声が響くだけで返事はない。

朋「ごめんくださいーい」

「…はいはい、聞こえてるわよ」

気だるそうにひとりの女性が現れた。

女性「いらっしやい、何か用？」

葉「おお」

河「口きいてるぞ、この人、ひやつほー」

智「こら」

智代さんが河南子をたしなめる。

朋「あの、ちよつと人を探してるんだけど」

女「ひと？誰を？」

朋「三島っていう人」

女「三島さん、三島さん：ああ、有子さんね」

少し名前を反芻した後、思い出したように言う。

朋「ここにいるのか？」

女「いるわよ。あんたたち、有子さんの知り合いとか？」

女性は私達を見定めるように見回している。

河「どっちかっていうと家族に近いね」

女「あれま、有子さんに家族いるなんて、初めて聞いたわ。しかもこんなにたくさん」

佳「私達は違います。ただの付き添いです」

河「こちらの先輩、智代さんって言うんですけど、三島さんは：えーと、何になるん

でしたっけ？」

智「一応義理の母、ということになるか」

河「で、こっちの男が朋也で智代さんの彼氏」

朋「呼び捨てかよ…」

河「そのうち結婚するだろうから、こっちも家族ですね」

朋「勝手に決めるなよ」

唯「ほう、では智代君とはお遊びだと？」

葉「飽きたら捨てると？」

佳「最低ね…最低」

智「そうか…私はもてあそばれていたただけだったのか…」

朋「ああー、くそつ、結婚前提だよ！これでいいか！」

智「朋也…」

女「はいはい、ごちそうさま」

見ると、目の前の女性はくすくすと笑っていた。

女「わかったわ、それでどうしたいわけ？」

朋「会わせてもらえますか？」

女「私の一存じゃ無理よ。本人に聞いてくるから、ちよつと待つてもらえる？」

女性は奥へと消えていった。

理「大丈夫かな」

ここまで来ておきながら最悪会えずに終わる可能性だつてある。

そんなことも考えたがどうやら無駄な思考だつたらしい。

許可が出たのか、女性が奥から手招きしてくれた。

廊下は一步毎に、きし、きし、と音を立てる。

朋「…この建物、なんなんだ？」

岡崎さんが率直な疑問を口にした。

女「元々は病院なんだけどね」

朋「じゃあ今は？」

女「うーん、病院みたいなもの、かな」

女性はこの成り立ちを話してくれた。

戦前くらい女性の祖父が病院のなかつたこの村にここを設立。

この村に住んでいる人は、町や都会に適応できなかつた人らしく、どこか心を痛め、傷ついている人達を最初は治療の一環として入院してもらった。

その祖父が死んで以降、この人が管理人をしているらしい。

階段を登ると、一番奥の扉だけが閉まっていた。

そこが三島さんの部屋ならしく女性は軽くノックをした。

管理人「有子さん、大丈夫？」

すこしして、小さく、はい、と聞こえた。

確かに前に聞いた声だった。

部屋に入ると、三島さんはベッドから上体を起こして出迎えた。

管「じゃ、私は仕事に戻るから、何かあつたら呼んでね」

それだけ言い残して管理人は戻っていった。

私達は勧められるままパイプ椅子に座り、向かい合った。

有「…どうして、ここが？」

朋「いろいろ調べてね。これとか」

岡崎さんが差し出した手紙は幾度となく読まれて封筒の角や便せんが擦り切れていった。

有「…消印ですか？」

朋「それもあるけど、決め手のひとつになったのはこっち」

岡崎さんは便せんを見せた。

朋「これ、珍しい和紙なんだってな。こいつが知ってたんだ」

来ヶ谷さんを指しながら言う。

有「そうですね…ここの特産品だそうですから。管理人さんが筆を使うならと持ってきてくださいました」

有「子さんは私達の背後を窺った。」

有「ともは…来ていませんでしょうか？」

佳「家で留守番しています。智代さんの弟さんが面倒を見てくれます」

智「しつかりした奴だから大丈夫だ」

有「そうですか…よかつた」

理「どうしてよかったんですか？」

思いがけず理樹が発言した。

確かにわざわざ写真を求めるくらい自分の娘に会いたくないはずがない。

それは疑問だった。

有「今更もう会えませんか」

智「それは…あなたが今もそのことを愛しているからだ」

智代さんが床を見つめたままつぶやく。

智「だから、会えなくてほっとしてるんだ…それは矛盾したような感情だ。でも、今なら分かるんだ、そんな心情も…そうさせる何かが起こりうることも」

そこまで言うとき智代さんはゆっくり顔を上げた。

智「だから、聞かせてほしい…私達はそのためにここに来たんだ。あなたをそこまで追い込んだもの…それはなんなんだ？」

三島さんの目を真正面で見据えて言った。

三島さんは表情を変えず、止まったままだった。

その間、智代さんも瞬きすらせずその口が開くのを待った。

その真摯な思いが伝わったのだろう。

有「わかりました、お話ししましょう」

語られたのは、三島さんの半生。

身寄りがなく、ずっとひとりりで夜の仕事をしていた。

智代さんの父親と出会い、初めて愛を知った。

そして絶望。

その中で、生まれてきた小さな命。

それを希望に生き始める新しい日々。

だが次第に生活はひっ迫し、娘を守るために夜の仕事を続けるしかなかった。

そのことで他の母娘との摩擦が起きる。

ともと子供を遊ばせてくれる親はいなくなっていた。

園内でも、ひとりきりで遊ぶともを見て自分が嫌になる。

それでも生きていくために働き続け、精神もぼろぼろになり、やがて過労で倒れた。

病院で知らされたのは、過労とは全く関係のないドラマで聞くような病名。

すでに手遅れであることをつきつけられる。

…錯乱。

自分ひとりの面倒も見ることが出来なくなった彼女は、ともを父親に託すことにし

た。

そうして辿り着いたのがここだった。

有「ここには何もありません。あるのは、ひっそりとしたその日の暮らしだけ。ここなら余生を過ごせると思いました。だから私は、この場所で暮らすことにしました」

私達は、入れられたお茶を飲んでいた。

誰もが押し黙り、告げられた事実を飲み下していた。

来ヶ谷さんは平然とお茶を啜っていたけど。

三島さんはやることがあると退室していた。

河「なんか言えよ……」

河南子が岡崎さんの膝をつつきながら囁く。

朋「それ、お前の役目だろ……」

河「重すぎるよ……こんな展開、予想だにしてなかったの……今何言っても、笑えな

いじゃん……」

朋「お前のはいつだって笑えねえよ……」

河「そんなこと今言うなよ……シヨックだよ……軽く鬱入るよ……」

朋「思い出してみろよ……お前が来てから、誰か笑ってた記憶あるのかよ……」

河「……………」

思案する。

河「うわ、ねえよー。なんだこれ、何でこんな時にあたし別のことでショック受けてんだわけわかんねー」

朋「今こそ挽回しろよ…」

河「今こそって、今笑わすの生きてきた中で一番難易度高いよ…」

佳「むしろ今なら笑えるかもしれないわ」

河「まじっすか…」

佳「ええ、葉留佳あなたも協力しなさい。そのために来たんでしょ」

葉「突然無茶ぶりしないでくださいヨ!？」

朋「この空気を変えてくれ…お前達ならできる…否、お前達にしかできない…」

河「わかった…やってみるよ…」

しばし葉留佳と話した後、私達の前に立ち、口を開いた。

河&葉「ここまがるー」

朋「……………」佳「……………」

理「…いやいや、せめて何か言ってあげようよ!」

朋「河南子、お前、アイス買いに行くんだろ?」

佳「葉留佳もよね?」

葉「いや、こんなところで売ってないし…」

佳「じゃ、作りなさい」

河&葉「………ハイ」

「がんばれば、できるんかなー!」とつぶやきながら二人は出て行った。

しばらくの沈黙の後智代さんが漏らした。

智「私があさはかだった…一方的に、母親が悪いと決めてかかっていたんだ…」

朋「知らなかったんだから仕方ないだろ」

智「でも、もう知ってしまった…」

智代さんは震えていた。

岡崎さんはその震える手を握り締める。

私達は何も言わず部屋を出た。

理「智代さん、大丈夫かな」

唯「たぶんしばらくはあのままだろう。真っ直ぐな分打たれ弱いからな」

佳「………」

とものことを考えるなら母親一緒に暮らさせるべきだろう。
でも、いったいどうすれば…？

目的は達したがやりきれなさが残った。

これが私達が旅路の果てに得たものだった。

時を刻む村 1

その日はもうバスの最終便が出てしまったということでも泊めてもらうことになった。その代わりに料理の手伝いをする。

自給自足のため食材は野菜だけだった。

寝床は一部屋しか開いていないらしく、男女一緒だった。

それでもこの季節に野宿するよりは遥かにマシだった。

歩き疲れもあったのか布団に入るとそう時間も経たないうちに眠りに落ちた。

皆も似たようなものだったのか私が寝付く前に寝息が聞こえてきていたが、智代さんの寝息は聞こえてこなかった。

次の日は各々自主行動ということになり、私は智代さんのそばについていた。

来ヶ谷さんの言うまでもなく、智代さんは重苦しい顔をしたまま何をするわけでもなくじっとしていた。

時折、はっ、とするがまたすぐ浮かない顔に戻る。

ただそれだけを繰り返して一日が終わった。

夜、岡崎さんが散歩と称して外に出ていこうとした。

昨日遅くまで起きていた分のツケが回つて来たのか智代さんは一番に眠ってしまった。
ていた。

葉留佳も遊び疲れてか寝てしまっている。

河南子も含め、私達是一緒について行くことにした。

朋「どうかしたのか？」

河「いや、暗い顔してるからさ」

朋「そうか？」

河「そのまま、どっかから飛び降りかねないな」

朋「するかよ……」

山道を、ただぶらぶらと歩き続ける。

皆の姿が月明かりに照らされていた。

河「うわー、すごい星空」

河南子の感嘆の声に一斉に空を見上げた。

理「確かにウチの近くで見ると見るよりもケタ違いにすごいね」

唯「小毬君がこの空を見たら喜ぶだろうな」

河「あー、ともにも見せてあげたかったなー」

…鷹文君には？

河「こんなにも星が綺麗なんだからさ…元気、出しなよ、ね」
朋「…ああ、そうだな」

河南子なりに慰めていたのね。

私達はゴミの山に辿り着いていた。

岡崎さんは昼間ここに来ていたらしい。

朋「でも、結局何も出来そうにないけどな」

岡崎さんが苦笑混じりに言う。

河「ともがここに暮らせるようにすればいいんじゃないの？」

佳「それが出来ないから困っているんでしょ」

河「部屋も余ってたじゃないですか」

理「学校もないしね」

河「だったら作ればいいんじゃないですか？」

朋「何を？」

河「学校」

さも当然のように言う河南子。

朋「お前なあ…」

そこまで言つて岡崎さんは口をつぐんだ。

河「あたしが何？どうせ、馬鹿だろ、とか言うんだろ？」

朋「いや、これでも見直してるんだぞ。お前はさ…馬鹿の中の馬鹿だよ」
まるで褒めているかのように暴言を吐いた。

そのため河南子は少しの間きよんとしていたが言葉を飲み込むと、岡崎さんを睨みハイキックを繰り出した。

どぐしっ！

河南子はそのまま帰っていった。

唯「何か妙案でも思いついたようだな」

平然と話を続けようとする。

朋「…ああ」

起き上がりながら土を払う。

朋「河南子の言う通りだ。ないなら作ればいい」

全「は？」

朋「材料ならここにいくらでもある」

ゴミ山を指して言う。

朋「俺はこの村に学校を作りたい。それがこの村の希望になるはずだ」

理「勝手にそんなことしていいのかな」

朋「もちろん管理人に許可はとる。どうだ？」

私達は互いに顔を見合わせる。

もう気持ちは決まっていた。

佳「まったく、河南子のこと馬鹿呼ばわりしておいてそれを実現しようなんて大法螺吹きもいところだわ」

唯「だからこそ面白い」

理「僕達でよかつたら力になるよ」

朋「物好きな奴らだ……ありがとな」

岡崎さんの目に強い意志が宿ったように見えた。

朋「それじゃあ明日から行動開始な」

私達は私達にできることをしよう。

とものために。

時を刻む村 2

次の日、私達は早速行動を開始した。

流石に建物自体から作ることは無理なのでまずは使えそうな家を探した。

捨てられ廃墟となった家屋を順々に見て回る。

朽ちてたり、天井が抜け落ちていたり、床がまったくなくなっていたり、傾いてしまっていたり……

なかなか見つからなかった。

そのままさまよい続け、ようやくそれらしい家を発見した。

急いで施設に戻り、管理人に確認をとる。

管理人はどうせできないと思っただけでかすかにオーケーサインが出た。

岡崎さんと理樹はすぐにゴミ山に向かった。

私と来ヶ谷さんは二人と別れ、学校にする廃屋に向かった。

物を運ぶ手伝いでもよかったが、その前に掃除を済ませることにしたからだ。施設から借りたバケツに水を汲んで雑巾を濡らす。

寒さに拍車がかかったが気にせず絞り、上から手の届く範囲で拭いていく。

割と最近まで使われていたらしくそこまで汚れてはいなかった。

唯「ふむ、白か」

気が付けば来ヶ谷さんが私のすぐ後ろからスカートの中を覗きこんでいた。

佳「何をしてるんですかつ！」

唯「床を拭いているだけだが？」

佳「しらばつくないでください！」

唯「はっはっは、さて、真面目にやるとしよう」

そこからの来ヶ谷さんの働きは大したものだった。

私だつて家では家事全般しているし慣れていると思つていたが結局来ヶ谷さんの半分程度しか働けなかった。

一通り掃除が終わり、休憩していると理樹達が黒板を運んできた。

佳「よくあつたわね」

朋「俺も驚いてる」

唯「おそらくどこかの施設の廃材なのだろうな」

理「ふう、なかなかキツイね……」

佳「お疲れ様」

河「うおおっ、マジで作つてやがるっ」

葉「やはは、びっくりですよ」

河南子と葉留佳がやってきた。

河「どんな馬鹿だよ」

朋「いいよ、なんとも呼べよ」

河「ザ・斉藤」

朋「嫌だとも言い難いが、とりあえずやめてくれ」

河「それよりもみてき、これ」

そう言つて河南子が見せびらかしたのはお菓子だった。

葉留佳も同じものを持っていてどこか自慢げだった。

河「村の人がくれたんだよ」

葉「いいでしょ」

朋「お礼ちゃんと言つたか？」

河「言つたよ。子ども扱いですんなよ、も」

朋「子供みたいなもんじゃないか、お前」

河「んだよ、誘惑すつぞ、てめ」

朋「いいから大人しくしてろよ」

河「ふーんだ、いこつ」

葉「じゃあ、お姉ちゃん達頑張ってるね」

葉留佳と河南子は走っていなくなつた。

朋「何したかつたんだ、あいつら」

佳「さあ？」

私達は作業を再開した。

ゴミの山へ向かう途中、管理人に会つた。

管「あ、いたいた……ホントに作ってるの？さつきかなちゃん達から聞いたんだけど」

理「かなちゃん……？」

理樹が私の方をちらつと確認する。

にゅつふつと笑うウェーブのかかつたロングヘアの先輩が頭をよぎつた。

佳「私じゃないわよ」

管「ああ、そういえばあなたもかなちゃんだったわね。河南子ちゃんの方よ」

朋「いつの間にか親しくなつてたんだな」

管「はるちゃんといろんな人にお菓子をせがんでるんだもの。あの子達、今では村一

番の有名人よ」

管理人は思い出し笑いでもするように微笑みながら言う。

管「で、話を戻すけど……あなたたち、どうしてそこまでするの？言い方は悪いんだけど

ど、あなたたちにとっては他人でしょ？」

朋「それがどうかしたか？」

管「何で、そんな面倒なことに首を突っ込むのか気になったのよ」

岡崎さんはちよつと考えるような顔をしたが、すぐにはは、と笑った。

管「どうして笑うのよ」

朋「いや、全然考えたことなかったからさ」

その答えにどうしても笑みが零れる。

朋「たぶん、知り合ったからだよ。赤の他人ならそいつの知り合いに任せるさ。でも俺の知り合いだったら俺にできることをしてやりたい」

管「どうして？」

朋「そうやって考えて生きたら、もつと皆が幸せになれそうだろ。たしかに、施設に迷惑かけてすまないとは思ってる。でも、ともも有子さんも互いに好きあつてる。だつたら二人は一緒にいるべきだ。それで、俺にできることを考えてみたら、これだった」

管「本気みたいね」

朋「当然」

管「あなたたちも？」

私達に向けられる。

佳「ええ」

理「はい」

唯「ああ」

管理人は大きくため息をついた。

管「…止めようかと思っただけ、無理だと悟っちゃったわ」

朋「そりや助かる。あんたの相手をしてる時間も惜しかったんだ」

岡崎さんは歯に衣着せず軽口を叩く。

管「はいはい、分かっただわよ」

理「すみません」

管「いいのよ。でも、せめてお昼ご飯くらいは食べるに帰っていらっしやい。ぶっ倒れ

るわよ?」

朋「ああ、明日からそうさせてもらおうよ」

管理人と別れてゴミ山に向かった。

時を刻む村 3

作業は少しずつだが着実に進んでいた。

私達には知識がないため、どうしても岡崎さん頼りになるしかなかった。

黒板みたいな露骨に使うものならまだしも、どのケープルが役に立つのか、それが断線していないかどうかといったことは私達ではどうしようもない。

来ヶ谷さんはある程度分かるらしいが、正確さはやはり岡崎さんの方が上らしい。

岡崎さんに聞きながら作業をしていると時折葉留佳と河南子が冷やかにやってくる。

そして、智代さんも。

昨日現れた智代さんはどうしてもと別れることが受け入れられないのかどこか普段と比べおかしくなっていった。

そのため、岡崎さんは河南子達に智代さんを見守るように言いつけたのだった。

今日も作業を続ける。

岡崎さんが簡単に書いた図面を元に、配置場所を皆でああでもないこうでもないと話し合いながら組み上げていく。

河「ねえねえ、みてみて、いいでしょ、ホットケーキ!」

窓から外を見ると葉留佳達がクレープのように巻いたホットケーキを見せびらかしていた。

葉「なななーんと、中にはアイスが挟んであるのだあー!」

朋「どうしたんだ、それ」

葉「一緒に作ったんですヨ」

朋「またか」

河「違うよ、村の人が一緒に作ろうって誘ってくれたんだよ」

理「へえ…」

どうやらだいぶ村の人達と打ち解けてきているらしい。

河「みんなで楽しかったよ」

佳「それはいいけど、迷惑とかかけてないでしょうね」

葉「ちゃんとお礼も言ったし、みんな笑ってましたヨ」

朋「そっか、じゃ、その調子で仲良くな。あれ、お前達、智代は?」

河「あー、大丈夫、大丈夫、ちゃんと見てるってば。じゃあねー」

結局、食べ物を見せびらかしに來ただけだったらしい。

理「仲良くなれてよかったね」

佳「確かにね」

この村に來たばかりの頃は考えられなかったことだった。

午後になると、智代さんが訪れた。

智「なあ、朋也……」

朋「うん……?」

智「先に帰ろうと思うんだ」

朋「どうして」

岡崎さんは手を止めて、智代さんと向き合った。

私達はというと手を止めず、二人の方は見はしなかったが話だけは聞いていた。

智「ともが心配なんだ……」

朋「鷹文がいるだろ」

智「あんな頼りない奴には任せておけない」

朋「お前、矛盾してるぞ。とももの母親には、しっかり者だから心配ないって言ったじゃないか」

智「そういう意味じゃない……寂しい思いをしていると思うんだ……私じゃないと……約束したから……ともは私と遊びたいはずなんだ」

朋「悪いが……お前だけを先に帰らせるわけにはいかない。帰る時は一緒だ」

智「嫌だ、ともと一緒にいたいんだっ！」

朋「それはお前のわがままだろう」

智「……………」

朋「いや、全部お前のわがままだ。ともは、母親との暮らしを選ぶ。さして、俺達ともの生活は終わる。楽しかったな。そのことをちゃんと理解して帰ろうな」

敢えて厳しく突き放す岡崎さん。

果たして今の智代さんに届いているのだろうか。

智「本当に、それが正しいのか……ともがそれを選んだとしても、それが正しいとは限らない。そもそも母親はそれを望んでいるのか？」

朋「まだ望んでいない」

智「じゃあお前は何をしているんだ。全部無駄になるかもしれないぞ」

朋「母親も説得する」

智「それじゃあ、ともがまた不幸になつてしまうじゃないか……私だったらともを……幸せにできる……するから……誓うから……お願いだ……」

最後の方には嗚咽になっていた。

朋「河南子っ!!」

思わず二人の方を見てしまう。

岡崎さんが呼ぶと、木陰から二人が現れた。

朋「智代に花畑を見せてやってくれ。智代、きれいな場所があるらしいんだ。見に行つて来い」

葉「さ、一緒に行きましょう。きれいな花でいっぱいですよ」

河「ほら、いきーまーしよーーっ!!」

葉留佳が背中を押し、河南子がその手を掴んで引きずっていく。

智代さんはさすがのような目がずっとこちらに向けたまま連れていかれた。

佳「…岡崎さん、今日は智代さんについていてもいいかしら」

朋「ああ、あいつを支えてやってくれ」

私は彼女らを追つて、走り出した。

三人と合流した後、葉留佳達が見つけたという花畑に向かった。

確かにその花畑は圧巻の一言だった。

一面に広がる菜の花畑は十二分に感動に足るものだった。

智代さんは花を見てというより時間が経って落ち着いたようだった。

智「…河南子はどう思う？」

河「はい？」

智「ともと一緒に過ごして楽しくなかったか？」

河「もちろん楽しかったに決まってるじゃん」

智「佳奈多達はどうか？…一緒に遊んだだろ？楽しかったか？」

佳「ええ、楽しかったわよ」

葉「あんな可愛い子と遊んで楽しくないわけないですよ」

智「鷹文だつてそうだろうし、ともだつて私達と暮らしていけば幸せになれるはずだ。

いや、してみせる」

佳「ご立派な決意ね」

智「そうだ、多数決をとらないか？」

葉「多数決？」

智「ああ。ともと一緒に暮らす方がいいか、母親と一緒に暮らせる方がいいかを多

数決をとつて決めるんだ」

佳「……………」

本気で言っているのだろうか。

いくら盲目的だとは言ってもここまでだとは思わなかった。

智「河南子達はともと一緒に暮らすほうを選んでくれるな？」

笑顔で言う智代さんに対して私は呆れ顔、葉留佳は困り顔、河南子はそっけない顔で答えた。

佳「反対よ」

葉「それは賛成できませんネ」

河「母親とだね」

智「え？…なんでだ？」

困惑した様子の智代さんに代表して私が答える。

佳「岡崎さんも言ってたけど、それは貴女のわがままでしかないわ。それに、多数決なんて聞こえはいいけれど、とも意志を無視してる最低な意見だつて分かってる？」

智「っ！それは…」

佳「ともが私達の暮らしを選ぶならそれはいいことだわ。でも、とも意志を無視して縛り付けるなら、それは悪よ」

智「私は……」

智代さんはその場に崩れた。

佳「葉留佳、河南子、智代さんは任せたわ。もう作業に戻るから」

これでもまだ、だだをこねるといふのなら私から言うことはもう何も無い。私は二人に後を任せ、廃屋へ戻った。

佳「これが今日の報告よ」

朋「…そうか」

廃屋に戻ると私はとりあえず岡崎さんに報告した。

朋「はあ…あいつにも笑って見送ってやってほしいんだけどな」

唯「後は智代君の問題だ。ここで話したところで意味はない」

理「それまでに僕達は僕達にできることをしないと」

理樹が言うのと共に各々作業に戻る。

智代さん…信じてもいいわよね？

時を刻む村 4

花畑での一件から一夜明けて。

智代さんは脱走を試みた。

河南子が唯一監視のつかないトイレの小窓から逃げたのだった。

しかし、河南子が智代さんの財布を抜いていたため失敗に終わった。

財布を返せと河南子を脅す智代さんの迫力は今までにないものだった。

あれが荒れていた頃の智代さんの片鱗なのだろうか。

結果的にその財布が岡崎さんに渡ったことで事なきを得た。

私は甘い。

昨日まだだをこねるならもういうことはないと思っていたくせに、とぼとぼ去っていく智代さんの姿は痛々しさに手を差し伸べたくなる。

だが、一番そう思っているはずの岡崎さんが耐えている以上、私に出来ることはただ見守ることだけだった。

次の日。

河「あー、雪だあ」

話をしていると河南子が、窓の外の変化に気付き惚けたように呟いた。

朋「雪か…?」

ちようど目を覚ました岡崎さんがぼんやりとした瞳のまま尋ねた。

佳「そうみたいね」

河「今日も作業すんの?」

朋「もちろん」

本来なら中止にした方がいいのかもしれないが、小降りだ。

それにあまり悠長に構えている時間もない。

この程度の雪なら強行軍しても問題ないだろう。

そんな思いから中止は言いださなかった。

ちらちらと雪の降る中、ゴミ山を漁り蛍光灯に繋げる配線を探した。

来ヶ谷さんと岡崎さんの共通見解として、このゴミ山はなにかしらの施設の廃材で、それなら施設を作り上げている部品のほとんどがここにあるはずとのことだった。

しかし、ケーブルを見つけては岡崎さんと呼び確認するもなかなかお目当てのものは見つからない。

見つからないのかもと思いい始めた矢先「おい！これだ！あつたぞっ！」と岡崎さんの

喜びを隠しきれない声が聞こえた。

朋「誰か手伝ってくれ！」

細心の注意を払い、ゴミ山を登って岡崎さんの元へ向かった。

同じくして理樹も辿り着く。

理「どうしたの？」

朋「なんか引つかかっているみたいなんだ」

そう言つて岡崎さんがコードを引つ張るが確かにピンと伸びるだけで取り出せる様子がない。

朋「俺が引つ張っているからどうなっているか見てくれないか？」

理「わかったよ」

そう言うのと理樹はその先を覗きこもうとした。

理樹が手をかけるとそこにあつた鉄くすが、がしやりと音を立てて動いた。

そのせいでコードに引つかかっていたなにかも動いたのだろう、コードがするすると引つ張られ岡崎さんが体勢を崩した。

まるでスローモーションを見ているような錯覚に陥った。

ゆっくり仰け反るように何もありません。虚空へ岡崎さんは私達から離れていく。

私はその場から動けず黙って見ているだけだ。

だが、理樹は岡崎さんに手を伸ばした。

手を掴む。

引っばる。

もどってくる。

それにはんびれいするように。

どぐつ!!

りきがおちた。

時を刻む村 5

理「ん……………」

理樹が目を覚ました。

佳「理樹っ！」

安堵からの涙で理樹の姿がにじんで見える。

管「具合はどう？あ、傷口は開かないと思うけど触らない方がいいわよ」

頭の包帯に触れようとする理樹を止める。

理「僕、どうしたんだっけ？」

朋「俺を庇ってゴミ山から落ちて、頭を打ったんだ」

目を伏せ気味に岡崎さんが答えた。

負い目を感じているんだろう。

理「そっか…ごめんね」

だが、謝ったのは理樹だった。

理「真人なら簡単に引き上げたんだろうけど、僕じゃこうしないと助けられなかった。

そのせいで岡崎さんに責任感じさせちゃって」

朋「俺の方こそ不注意だった。本当にすまん」

理「いやいや、僕の方が」

朋「いや、俺の方が」

佳「はいはい、その辺にしておきなさい。ループしてるわよ」

理「佳奈多もごめん。その足、僕のせいだよね？」

理樹の目は私の足に向いていた。

理樹が落ちて、一度頭が真っ白になったがすぐに我に返った私はゴミ山を駆け降りた。

その時に引っかけ切ってしまったようだった。

理樹の治療後、私の怪我も診てもらった。

佳「まったく、そういうところは聡いんだから…これは名誉の負傷だからいいのよ」

腕の傷痕に比べればなんてことない。

理「…ありがとう」

理樹も察してかそれ以上は言わなかった。

唯「葉留佳君達にも感謝するんだな」

理「葉留佳さん？」

管「後ろよ」

佳「ゆっくりね」

理樹が頭を回転させる。

その先には丸くなって寝ている葉留佳と河南子がいた。

服は泥だらけだし、髪も溶けた雪で濡れている。

佳「理樹が落ちた後すぐこの子達が来て、誰か呼んでくるって雪の中走り回ってくれたのよ」

管「すごかったわよ。しばらく経ったら、ほとんどが集まった。誰もが、はるちやん達には敵わないな、って顔してね」

理「…そっか。葉留佳さん達にもちちゃんとお礼言わないとね」

葉「…ん」

葉留佳の臉がぴくりと動いた。

理「あ、起きた？」

葉留佳は理樹の姿を確認すると跳ね起きた。

理「ありがと…ぐふっ！」

いきなり腕をクロスした状態で理樹の腹にめがけてダイブした。

智「こら、葉留佳っ」

葉「心配かけるなっ！」

本気の怒声だった。

だが、すぐにいつもの調子に戻った。

葉「お姉ちゃんも、皆も、私も、理樹君のこと大切に思ってるんだから、驚かせないでくださいヨ……」

理「ごめん、もう大丈夫だから」

理樹はそう言つて葉留佳の頭を撫でた。

その後、目覚めた河南子から思いつき蹴られていたのは言うまでもない。

雪が止んだ後、皆で一緒に表へ出た。

この中で理樹だけがあのことを知らない。

皆、理樹の驚く顔を想像して意地の悪い笑顔をしていた。

廃屋の近くまで来ると喧騒が聞こえてきた。

葉留佳と河南子はそれを聞くと走って行った。

河「なにしてんのさ、早くおいでよ」

葉「早く早くー」

急かす二人に理樹は首を傾げた。

理「なにがあるの？」

朋「行けばわかる」

佳「二人とも落ち着きなさい。理樹は病み上がりなんだから」

理樹の問いには誰も答ええない。

二人に追いつき、その角を曲がる。

理樹は大きく目を見開き、その様子に皆満悦の笑みを浮かべた。

木材を加工する男性。

畳を干している女性。

屋根に上がって修繕している人もいた。

理樹達ももってきた黒板は綺麗に鉋がかけられて、新しい木目が日の光を浴びて輝いていた。

皆が思い思いの作業を真剣にやってくれていた。

それは昨日までは考えられなかった光景だった。

葉「みんなありがとー」

葉留佳の呼びかけに全員が手を止め、私達を囲んだ。

口々に、よかつたな、大丈夫かと声をかけられ理樹は困惑気味だった。

不審な態度や敵意はもう微塵も残っていない。

作業を手伝うと村の人に言われたと時、岡崎さんは後ろめたそうにしていた。ここに迷惑をかけると思っていたからだろう。

でも、皆、三島さんの子供が来ることを聞いて協力してくれようとしていた。

はるちゃん達を見てたら子供もいいかな、って笑って言いながら。

この時、私は気付いた。

岡崎さんはこの村に希望を作りたいと言っていたが、既に私達はこの村に、未来を指し示す希望を持ち込んでしまっていたということ。

有「村が変わってゆく…」

三島さんは窓に手を当てて、ぼんやりと廃屋の方を眺めていた。

有「あなたのその力は何？信念？」

こちらに向き直さず窓に映る岡崎さんに問いかける。

朋「恥ずかしいから言わない」

有「みんながあなたのように強ければいいのだけれど」

朋「弱ければ、そいつの周りにいる人が助けてくれる。俺はあんたの周りにはいないけど」

窓の外で、三島さんに気付いた村の人が手を振って呼んでいた。

朋「ほら、ここにはいるじゃん。俺達はとももの味方だからさ、俺達はあるたにとつては、疫病神みたいなもんかもしれない。多分どこへ逃げようと、追っかけて、こんな風にしてしまう。ともが望み続ける限り……それは迷惑か？」

有「……………」

長い沈黙の後、窓に映る三島さんの唇が震えた。

朋「ん……？」

有「……ありがとう」

朋「よかった。ともにはたくさん、ちゅーしてやってくれ。他の人にしてもらわなくても済むくらいな」

有「……はい」

私達は三島さんの部屋を後にした。

唯「格好良かったぞ、お姉さん惚れてしまいそうだ」

朋「悪いが智代一筋なんぞな」

智代さんの前で臆面もなく言う二人。

唯「はっはっは、フラれてしまったか。では、傷心の私は作業に戻るとしよう」
来ヶ谷さんは颯爽と去っていった。

朋「智代」

智「……………」

いつもなら照れたりなにかしらあるはずの智代さんは先程のやりとりを聞いても無反応だった。

朋「これで残ったのは、おまえのわがままだけだ。今はとものことをみんなが迎え入れようとしている。智代、お前はどうか考えてるんだ」

智「……………」

結局智代さんは黙ったままだった。

時を刻む村 6

電話を借りてから五日後、作業は無事に終わりを迎えた。

皆の協力があつてこそだけれど、ここ数日のMVPはくまだろう。

まあ、くまというか智代さんだけだ。

わざわざ鷹文君に送らせてまで着ぐるみで作業に参加していた。

思うところがあつたんだろう。

本当に不器用だ。

村の男の人達の3倍は働くその姿は私達からすれば智代さんにしか思えないけれど、何も知らない人達はただただ驚いていた。

私達が部屋に帰ると智代さんは散歩してくると言つて出掛けて行った。

入れ違いに管理人さんが一升瓶片手に現れた。

管「禁止してるんだけどさ、一緒にどうぞ？」

佳「どうも何も未成年なんですが」

管「まあまあ固いこと言わないの。18、19くらいなら飲まされるものよ」

葉「私飲んでみたいなあ」

管「ほらほら、はるちゃんもこう言ってるし」

佳「…一杯だけよ」

理「未成年の飲酒は法律で禁止されています。これを読んでいる20歳未満の人は真似しないように、大人の人は未成年に飲酒を勧めちゃいけないよ」

唯「メタフィクションな発言だな」

理「そこはちゃんとしておかないとね」

管「それにしても寂しいわね、明日には帰っちゃうんでしょ？ずっとここにいれば？」
朋「いや、そういうわけにはいかないから」

管「じゃあ、あなた達が結婚して年取って、やることなくなったらおいでなさいよ」

理「ぶふっ…」

思わず理樹が飲んでいたお酒を吹いた。

私も顔が熱くなった。

気が付くと葉留佳が俯いていた。

佳「葉留佳…?」

葉「…いやほんともうすみませんごめんなさいゆるしてくださいごめんなさい」

理「葉留佳さん!？」

河「あはははははは、泣いてる泣いてる」

朋「こっちはこっちでおかしいんだが。いや、いつも通りか」

唯「どうやら葉留佳君は泣き上戸、河南子君は笑い上戸なようだな」

たった一杯で？

理「酔いやすかつたんだね」

そこで来ヶ谷さんの目が怪しく輝いた。

唯「佳奈多君はどうなるのかな？」

来ヶ谷さんはじりじりとお酒の注がれたコップを持って近寄ってくる。

佳「いや、私はいいので」

唯「遠慮するな。ほら」

佳「んくっ——」

頭がぼうつとして、私の意識は途絶えた。

私達は昼食の後、とも達が来るのを待っていた。

昨日の晩の来ヶ谷さんにお酒を飲まされた後のことはまったく覚えていない。

理樹に訊ねても苦笑いするばかりで何も答えてくれなかった。

あの来ヶ谷さんすら冷や汗をかきながら「すまん」と短く謝っていた。

…何をしたんだろう？

河「きた、あれだ！」

ともが西園さんと鷹文君に連れられて小さな歩幅で歩いてくる。

待ちきれずに河南子と葉留佳は駆け寄っていった。

河「ともーっ、会いたかったよーっ！」

…鷹文君は。

二人に手を引かれながら村へと希望が辿り着いた。

朋「元気だったか、とも」

岡崎さんは膝をついて、とも頭の頭を撫でた。

と「うんー」

久しぶりのとももの笑顔は癒される。

理「西園さんもお疲れ様」

美「いえ、なかなか面白い体験でした。可愛いものですね」

唯「作ってはどうか？」

美「…セクハラです」

鷹「で、ねえちゃんは？」

朋「…ちよつとな」

智代さんはこの場にいない。

起きた時にはもういなくなっていた。

本人に現れる気がないなら探しても意味がないということであつておいていた。

唯「朋也氏、そろそろ…」

朋「そうだな…とも、お母さんに会いにいこうか」

ともは、うんつ、と強く頷いた。

景色が開ける。

村人たちが出迎えていた。

一人残らず、全員がだ。

初めはあんなに閉鎖的だつたのに。

旅路の果てであつたこの村には、もう未来と希望があつた。

先頭に立つのは二人。

管理人さんと、三島さん…とものお母親。

朋「ほら、とも、お母さんだ」

と「ママ！」

ともは駆けだそうとしたが岡崎さんがその肩を押さえているので二人の距離は縮まらない。

伝えなければいけないことがあるから。

ともと三島さんの間に入り、言い聞かせる。

朋「とも、いいか、よく聞くんだ」

ともは暴れて聞いていないようだった。

朋「聞くんた。ともは、ここでお母さんと暮らしていける。でも、それは長くは続かない。お母さんは病気なんだ」

病気と聞いてようやくともは岡崎さんにピントを合わせた。

朋「重い病気だ。もう治らない」

と「どうなるの…?」

朋「死ぬ」

岡崎さんは至極直接的に言った。

と「しぬの!?! ママ、しんじやうの!?!」

朋「まだだ、でも遠くない未来そうなる。それでもともは…お母さんと暮らしていくことを選ぶか?」

と「ママ！ママッ！」

朋「答えろ、とも、それでもお母さんと最後まで一緒にいたいかな？」

酷だと知りながらも岡崎さんは訊き続ける。

その答えを聞かなければ、母親の元へ送り出すわけにはいかないから。

「一緒にいたいかな？」

岡崎さんは辛抱強くとももの答えを待った。

ともが岡崎さんを見つめる。

そして…

こくん。

頷いた。

朋「そっか」

岡崎さんは安堵したように言う。

朋「じゃあ、俺達とはここでお別れだ。俺達は帰らないといけない。俺達には俺達の生活があるから」

河「ともといられて、すんげー楽しかったよ」

葉「また遊ぼうね」

鷹「僕達のこと忘れないでよね」

美「お元気で」

唯「また会おう」

理「お母さんと仲良くね」

佳「幸せにね」

皆が口々に別れの言葉を口にする。

朋「じゃあな、とも」

岡崎さんがともを解放したがともは走り出さなかった。

と「ママは？」

朋「いるだろ、あそこに」

と「パパのママは？」

朋「智代は…今はいない」
そう答えるしかなかった。

と「そ…」

ともは俯いた。

ポケットから、二つのぬいぐるみを取り出した。

これまで遊んでいたくまとパンダのぬいぐるみだった。

そのくまの方を岡崎さんに向けて差し出した。

と「これ…ママの。こっちはとももの。また一緒に遊べるように」

朋「分かった。渡しておく」

岡崎さんが受け取ると、ともは背を向けて歩き出した。

智代さん、本気でもう会わずに別れるつもりなの？

ともは背中を全員で見送る。

まるで自分たちの娘を旅立たせるかのように。

母親の元へ歩いていたともが途中で、歩みを止めた。

…そうね、貴女はそういう人だものね。

と「くまさんだ……」

いつからいたのかくまの着ぐるみが黄色い輪を持って立ちつくしていた。近寄るでもなく離れるでもなく二人ともその場から動かなかつた。

くまは少しの間俯くと、覚悟を決めたのだろうともに向けて踏み出した。手に持っていたのは立派な花飾りだった。

あの花畑で今日まで作ってきたのだろう。

と「くれるの？」

くまは、こく、と頷く。

喋らないつもりなのだろう。

差し出されたそれをとまが受け取るとくまはゆっくり背中を向ける。

佳「本当にそれでいいの？」

思わず私はくまに話しかけていた。

佳「貴女がいないわ」

くま「……私は……」

智代さんの声。

く「…笑って見送ってやれないんだ…」

理「そんなことないんじゃないかな」

唯「その通りだな」

朋「ともと過ごしてきた時間を思えば…自然に笑えるさ。な、智代」

逡巡を振り切り…

くまは小さく頷いた。

頭部を持ち上げると長い髪が落ちた。

と「ママっ」

とも呼びかけに智代さんが振り返る。

智代さんは笑っていた。

智「とも…これから、どんなことがあっても…どんなつらいことがあっても…私はのりこえてみせるから…だからともも…がんばるんだぞ…？」

と「うんっ」

ともは力強く頷いた。

智「どっちがつつよくなれるか、競争だな…負けないぞ…」

と「うんっ」

智「…:…:とも」

と「うんっ」

智「大好きなとも…」

と「うんっ」

智「元気で…」

と「うんっ」

智「いつまでも元気で…」

と「うんっ」

智代さんは全て伝えきった。

もう何も言わない。

ともは、最後にもう一度頷いた後…駆けだした。

母親の元に向けて。

智「さようなら、とも」

智代さんが小さくそう呟くのが聞こえた。

悠久円環のアンフアング

管理人の呼んでくれたタクシーで病院へ向かう間に、理樹に大体の経緯を説明した。

理「とりあえず、この半年くらいの僕の記憶がないことはわかったよ」

そう、まだ半年だ。

このくらいならそんなに支障はないだろう。

私達と出会うよりも前に戻っていたらもっと大変だったろう。

理「それでその二木さん？」

佳「なにかしら？」

理「その、ホントに僕達って付き合ってたの？イメージ出来ないんだけど」

理樹が寮会の手伝いを始めたのは修学旅行事件から少ししてからのことだからあの頃の私しか知らないため、無理もない。

佳「ええ、付き合ってたわ」

葉「見事なバカツプルでしたヨ」

理「そ、そうなんだ」

佳「これは理樹がくれたものよ」

私は左手の薬指にはめられた婚約指輪を見せた。

理「それを僕が？」

佳「私達の誕生日にくれたのよ」

理「ごめん、やっぱり記憶にない」

唯「まあそう焦ることはない。一時的なものかもしれないからな」

謝る理樹を来ヶ谷さんがフォローした。

唯「着いたぞ」

話をしているうちに病院に着いていた。

結論から言うと記憶喪失は治療できなかった。

正確に言えば、手を出せなかったそうさ。

記憶喪失の原因は脳に出来た腫瘍らしい。

それが新しい記憶を司る海馬に影響を及ぼし、ここ最近の記憶を消してしまっているという。

手術すれば治る可能性が高いという言葉は私達を安堵させた。

それだけならどれだけよかっただろう：

その次に語られた二つの事実は私達を打ちのめした。

一つは「手術の成功率は50%にも満たない」ということ。

そして二つ目は「手術が失敗した場合、理樹は死ぬ」ということだった。

しかし、それはあくまで手術をした場合であり、自然に治ることも考えられ、少なくとも腫瘍自体によつて死ぬことはないらしい。

それだけは救いだつた。

とりあえず、理樹は検査入院という形で入院することになった。

先生に一礼して診察室を後にした。

佳「理樹にはさっきの話は伝えないでおきましょう」

唯「…そうだな。無為に不安を煽ることもないだろう」

葉「岡崎さん？」

岡崎さんは長椅子に座つたまま、頭を抱えて俯いていた。

朋「俺のせいだ…俺があの時…」

佳「そんなこと—」

唯「ああ、そうだな。君の代わりに理樹君は記憶を失つた」

そんなことないと言う前に来ヶ谷さんが辛辣な言葉をかけた。

唯「そうして自己満足な悔恨の情に浸つていて理樹君の記憶が戻るならいつまでもそ

うしているといい」

朋「……………」

唯「君はそうして立ち止まっているのか？ 智代君に強さを強いた君がそうして俯いたままでいるのか？」

朋「……………佳奈多」

顔を上げ私の名前を呼んだ岡崎さんの目には強い意志が宿っていた。

佳「何？」

朋「俺はお前の大切な奴に取り返しをつかないことをした。謝って済むとは思ってない」

佳「……………」

朋「だから、せめて、俺にできることがあれば何でも言ってくれ。力になる」

智「私も、佳奈多達には世話になりっぱなしだ。恩返しをしたい」

……………

佳「……………貴方達が」

朋「え？」

佳「貴方達が嫌な人達だったら、逆恨みだったとしても憎むことが出来たのに…」

智「……………」

佳「隣人として、友人として、これからもよろしくお願いするわ」

智「佳奈多っ」

智代さんが泣きながら私に抱きついた。

佳「まったく、貴女が泣いてどうするのよ？」

智「佳奈多が泣かないからだっ」

佳「……私だっ……て……」

智代さんからもらってしまったのか、私も自然と泣いてしまっていた。

私達はしばらく互いを抱きしめながら泣いた。

来ヶ谷さんだけがその様子を微笑みながら眺めていた。

二木佳奈多の憂鬱

あーちゃん先輩「まったく、私のとこまで愚痴りに来なくてもいいじゃない。皆聞いてくれるでしょ？」

佳「あーちゃん先輩に言う方が気楽なんですよ」

私はあーちゃん先輩のところ遊びに来ていた。

あ「なんか私軽く見られてる？」

佳「気のせいです」

あ「まあいいけどね。今日、直枝君は？」

佳「棗先輩が連れまわしてます」

あの人はずっと変わらなない。

仕事休みの半分は遊びに来ているだろう。

あ「神北さんも、あ、今は棗さんか。大変よね、旦那さんがあれだけ自由だと」

佳「そうでもないみたいですよ。この間もドライブデートしてきたそうですし」

あ「へえ、棗君も意外とマメなのね」

佳「あれでもちゃんと小毬さんのことを愛してるみたいですから」

あ「妬けるわね」

佳「あーちゃん先輩は相手いないんですか？」

あ「なによ、自分には婚約者がいるからって言うじゃない？」

佳「まあその婚約者が問題ですけど」

あ「…もう3年くらいだったかしら？」

佳「はい」

そう、理樹が記憶を失ってから早いものでもう3度目の冬を迎えていた。

彼を取り巻く人々の環境も変わりつつあった。

棗先輩は商社に就職し、神北さんは大学に行かず入籍、専業主婦になった。

鈴さんは猫のブリーダーになるために先輩の人脈から色々教わり勉強している。

クドは工学部へ進学し、コスモナーフトの夢を追い続けている。

宮沢は進学せず道場を継ぐために日々研鑽を積んでいる。

その傍らには古式さんがいる。

西園さんは大学で司書講習を受けている。

教員免許もとり司書教諭になることも視野にいれているらしい。

井ノ原は留年が決定すると中退し、工事現場や引越し業者など力仕事関係をかたつ

ぱしから渡り歩いている。

退職理由はどれも「筋トレとして不十分」だそうだ。

…就職なめんな。

来ヶ谷さんは大学にこそ行ったものの、その大学の偏差値は決して高いと言えるものではない。

本人に志望理由を訊いたところ、「近いから」の一言で終わってしまった。

これだから天才は、と思わなくもない。

岡崎さんと智代さんは相変わらずラブラブだが結婚はまだだった。

たぶん、私達に気を使っているんだと思う。

鷹文君と河南子は今は同棲しているらしい。

時折、喧嘩しては隣やウチに来るが、仲はまあいいみたい。

だいたいこんなものかしら？

あ「どうなの？直枝君」

佳「変わりませんよ」

あ「そう」

回復の兆しは依然として現れていない。

理樹は一週間毎に記憶にリセットをかけ続けていた。

佳「正直…」

あ「え？」

佳「正直に言ってしまうえば、自信がなくなってきました…」

あ「何の？」

佳「もう一度理樹に好きになってもらう…」

この3年間、理樹から「好き」と言われたことは一度もなかった。

当然だとは分かっている。

過程が失われてしまっている今、理樹からすれば私は自分の彼女を名乗っている知り合いに過ぎない。

もちろん、優しい彼がそう拒絶するはずもないけれど。

停滞したままであることを無視することはどうしても出来なかった。

あ「倦怠期のカツプルみたいね」

笑いなから言うあーちゃん先輩にムツとくる。

佳「あーちゃん先輩に話した私が馬鹿でした」

あ「まあまあ、そう怒らないで。それに全部が全部つらいだけじゃないでしょ？」

佳「確かにそうですけど」

あ「それにね、私達だってなんでも覚えてるわけじゃないでしょ？私、一週間前の夜ご飯だって思い出せないわよ？でもだからって好きな食べ物まで忘れるわけじゃない」

佳「つまり？」

あ「かなちゃんか直枝君と過ごした日々は無駄じゃないってこと。記憶には残ってなくてもね」

佳「……………」

p r r r r …

携帯が鳴った。

画面を見ると棗先輩からの着信だった。

「もつとかわいい着メロとかあるでしょうに」と言うあーちゃん先輩をスルーして応じた。

佳「はい」

恭『ああ、俺だ』

佳「オレオレ詐欺ですか」

恭『違うわ！そろそろいい時間だし理樹帰すぞ』

佳「ああ、はい、わかりました」

恭『一緒に飯食うかって話してみたんだがお前の飯がいいんだとさ』

佳「!!」

恭『まあ俺も味気ない飯屋で食うより小毬の手料理の方が何百倍もいいからいいけど

な。それじゃ』

最後に惚気て棗先輩は通話を切った。

……………

あ「顔、にやけちやつてるわよ？」

佳「え!?!いや、その…」

あ「早く帰って愛妻料理作ってあげなさいな」

聞こえていたらしい。

佳「そ、それじゃ今日はこれで失礼します」

あ「またね、直枝君よろしく」

来たときよりも軽い足取りで私は家路についた。

その晩、理樹のお腹が少し出てしまうほど料理を作ってしまったのはご愛嬌…よね？

古河家の人々

今日は理樹を連れて古河パンに行くことにした。

手をとって歩き出すと、理樹は顔を真っ赤にして俯いてしまった

記憶を失ってからのというもの初々しい理樹の反応を見ると思わず私も頬が熱くなるのを感じていた。

すれ違う人達がかつちを見てはにやりとして通り過ぎていくような気がするのはいきつと錯覚に違いない。

道中終始無言のまま私達は歩き続け、気がつけば目的のパン屋に辿り着いていた。

葉「いらつしやー：おやおや、お姉ちゃんに理樹君じゃないですか。つていうか顔真っ赤だけどどうかしたの？」

店に入るとエプロン姿の葉留佳が出迎えてくれた。

：可愛い。

佳「なんでもないわ」

葉「パンをお求めですか？ならおススメのパンがあるのですヨ」

私達の答えも聞かず、葉留佳は陳列棚の一角から2つのパンを差し出した。

佳「…これは？」

葉「はるちんスペシャル！名付けてチョココメントパンですよ」

至つて普通のパンだった。

？「そいつにしてはまともなパンだろ？」

店の奥から同じくエプロンをつけた男性が現れた。

佳「おはようございます、古河さん」

古河「秋生があつきーでいいつつつてんのに変わんねえな、かなたん」

佳「金輪際その呼び方を止めてくれたら考えます」

秋「考える止まりかよ。まあそれでもやめる気はねえからいいが」

この人は古河秋生さん、古河パンの店長だ。

気さくないいい人ではあるんだけど、私のことを時々とはいえかなたんと呼ぶのはや

めてほしい。

佳「早苗さんと渚さんはいないんですか？」

早苗さんと渚さんは秋生さんの妻と娘さんのことだ。

娘さんと言つても私達よりも年上だ。

だから、古河夫妻はそれ相応の年齢であるはずなのだけれどどう見ても成人した子供

がいるようには見えなかった。

早苗さんに初めて会った時なんて姉妹かと思つたほどだ。

秋「いるぜ？おーい、さなえー、なぎさー」

秋生さんの呼びかけに応じて二人がカウンターまで出てきた。

早「いらつしやい」

渚「おはようございます、かなちゃん、直枝君」

佳「おはようございます」

理「……………」

理樹はどうにも落ち着かないようだ。

早「ふふ、そんなにかしこまらなくていいんですよ？」

理「あ、はい、えっと、初対面…ではないんですよね？」

理樹を連れてきたのは、今週は初めてだった。

渚「はい、直枝君はここでバイトしていました」

理「その、こういう時なんて言つたらいいのか…」

秋「笑えばいいんじゃないか？」

理「え？」

秋「堅つ苦しいのは、俺がめんどくせえ。だからよ、笑顔で『おはようあつきー』これでもいいだろ」

理樹は少しの間の後、少し照れくさそうに口を開いた。

理「おはようございます…秋生さん」

秋「かーっ！結局あつきーじゃねえのかよ」

理「その…ちよつと恥ずかしいので」

葉「いいじゃん、それに私がいつも呼んでるじゃないですか」

秋「お前なんざノーカンドノーカン」

葉「ひどっ!」

ぎやーぎやーと言い争う二人は放置することにした。

渚「この間はありがとうございます」

理「この間?」

佳「神北さんのボランティア活動の一環で児童館で劇をしたのよ」

渚「その時に私も誘っていたんです」

理「へえ、そうなんだ。覚えてないのかもしれないな」

早「ちゃんと録画してありますよ。よかったらご覧になりますか?」

理「ありがとうございます」

秋「お、おい、小僧、近所のがき共と野球するから付き合え」

理「え、あ、ちよつと—」

秋生さんは有無を言わず理樹の腕をとって外へ出て行った。
ちなみにその劇で理樹は姫役だった。

その場では吹っ切れてノリノリでやっていたが終わった後の理樹のテンションの下がり様は尋常じゃなかった。

流石の秋生さんもあれを見せるのは男として酷だと思っただろう。

渚「まったくもう、お父さん強引なんですから」

早「息子のように思ってるのかもしれないね」

早苗さんは二人が出て行った玄関を微笑みながら遠い目で眺めていた。

佳「いつもありがとうございます」

理樹が記憶を失ってからというもの、毎週ではないけれど時々こうして古河家の人々に会いに来ている。

この3年間、古河さんにはお世話になりっぱなしだ。

ウチの二……もとい葉留佳がここで働いているのも古河さんの厚意に甘えてのことだ。

早「いいんですよ、渚のお友達ですもの」

渚「お母さん……」

早「直枝さんは病気がちで友達作りが苦手だった渚の友達になってくださいまし

た。それだけでも私達は感謝しているんです」

渚「わ、私もっ、何か力になれることがあれば力になりたいんです…と、友達ですか
ら…」

これも理樹の人望なのかしらね…

佳「今度ともよろしくお願いします」

早「こちらこそよろしくお願いしますね」

互いに頭を下げ合うと何故か可笑しさが込み上げてきて、私達は顔を見合わせて笑い
あつた。

最早空気と化した葉留佳だけが所在なげに立ち尽していた。

日溜まりの街

しばらくして本調子になった理樹と外へ出た。

出かけるまでに葉留佳は起きてこなかったが葉留佳の分の朝食はきちんとラップして書き置きを残してきたので大丈夫だろう。

今日は夕方にスーパーのタイムセールに行くこと以外には特に予定はない。

デート気分で手を繋ぎ、照れる理樹を横目に街中を歩こうと考えていると――
? 「どいて〜!」

背後から不意に誰かから声をかけられた。

振り返ると目の前に女の子がいた。

宙に浮いている。

…ああ、つまずいたのね。

もう避けられないと分かっているからか状況だけは冷静に把握できていた。

そのまま謎の少女の突撃を受け転んでしまったが、理樹を巻き込まずに済んだのは幸いだろう。

? 「うぐう〜…」

佳 「いたた：」

理 「大丈夫？二人とも」

心配そうに尋ねながら手を差し伸べる理樹に「大丈夫」と答えながら、その手を借りて立ち上がった。

理 「君も立てる？」

？ 「ありがとうございます」

お礼を言いつつ理樹の手をとって立ち上がる。

茶髪のショートヘアで赤いカチューシャをしている。

背中には天使の羽をイメージしたような羽のついたバックを背負っていた。

少し服を払うと、少女はすぐさま頭を下げた。

？ 「ごめんなさい！つまずいちゃって！」

佳 「私は怪我がなかったからいいけど、貴女は大丈夫？」

？ 「は、はい」

理 「あれ、足すりむいちゃってるよ」

？ 「え？」

本人自身も気がついていなかったようだ。

理樹に指摘されたことで痛みが襲ってきたらしく、若干涙目になっていた。

? 「うぐうぐ」

「うぐうぐ」がこの子の口癖らしい。

佳 「ちよつと待つてて」

私はポシエツトから絆創膏を取り出してその子の足に貼つてあげた。

? 「ありがとう…」

佳 「消毒液は持ち合わせがないんだけど…」

女の子はほつとしたように息をついた。

理 「ウチに帰れば救急箱に入つてるよね?」

佳 「ええ、急ぎじゃなかったらウチまでついてきてもらえるかしら?」

? 「え!? いえ、本当、これだけでも十分ですよ?」

消毒液、怖いね。

理 「でも、やっぱり痕になつちゃうと大変だし、ここは僕達にお世話焼かせてくれな
いかな?」

? 「う、うぐう…わかりました…」

理樹にやんわりと言われて観念したらしい。

理 「僕は直枝理樹」

佳 「二木佳奈多よ」

？「ボクは月宮あゆって言います」
自己紹介を済ませて、三人でアパートに向かった。

佳「ただいま」

葉「ふあ、ほへえひゃん、ほはへり（あ、お姉ちゃん、おかえり）」
葉留佳が朝食を食べながら出迎えてくれた。

：もう昼食の時間なんだけど。

佳「行儀悪いわよ」

理「遠慮しなくていいからね」

あ「お、お邪魔します」

葉「誰ですか？その子」

佳「さつきぶつかつて転んじやったのよ。それで怪我しちやったから手当てするために来てもらったの」

葉「てつきり誘拐でもしてきたのかと」

あゆちゃんが少しだけビクツと反応した気がする。

理「いやいや、するわけないでしょ」

佳「ウチのニートはほっといいいわよ、あゆちゃん」

葉「いや、ちゃんと働いてますヨ!」

救急箱からお目当ての消毒液を見つけた。

佳「ちよつと沁みるわよ」

あ「うぐつ」

あゆちゃんは目を閉じて沁みるのに耐えていた。

佳「これでもう大丈夫よ」

良い子良い子というように頭を撫でてあげると目を細めて気持ちよさそうにしていた。

理「そういえばあゆちゃん、どこか行くところだったんじゃないの?」

理樹に尋ねられてぼやつと惚けていたところから戻ってきた。

あ「どこつてことはないんですけど、探し物をしてたんです」

理「探し物?」

葉「何かなくしたんですか?」

あ「それがよくわかんないんです」

佳「どういふこと?」

あ「失くしたことは分かるんだけど、それがなんだったのかが曖昧で…何か大事なも

のだったと思うんだけど…」

理「僕達も手伝うよ」

あ「え？」

佳「手伝うって、探し物が何かも分からないのよ？」

理「でも、一緒に街を回ってれば何か手がかりが掴めるかもしれないし。それにちよつと他人事とは思えなくてさ」

あ「それってどういう…」

葉「理樹君はね、ここ3年間の記憶がないんですヨ。だからあゆちゃんと自分が重なって見えるじゃないかな？そうですよネ？」

理「まあね、それでどうかな？」

あ「それじゃあボクも理樹さんの記憶探しを手伝ってもいいですか？」

理「もちろん、よろしくね」

あ「こちらこそよろしくお願いします」

佳「話が決まったところでお昼にしましょ。あゆちゃん食べれないものとかあるかしら？」

あ「あ、特にないです」

理「両親に連絡とかしなくていいのかな？」

あ「両親は旅行中なので問題ないです」

葉「へ？じゃあ家で一人なんですか？」

あ「祐一くん：友達のところにお世話になってます。今日はお昼いらないうて伝えてあったのでそっちも大丈夫です」

佳「そう、じゃあそのまま楽にしてて。すぐ作るから」

その後、ついさつき食べたばかりの葉留佳を除く三人で昼食をとった。

それから四人で色々見て回りはしたもののどちらもそれらしい兆しを得ることが出来ないまま夕方になってしまった。

葉「いやー、なかなか上手いかないもんですね」

佳「やっぱり本人達の実感に頼るしかない以上私達ではどうしようもないわね」

理「ごめん」

あ「すみません」

二人ともしゅんとしてしまった。

佳「べ、別に責めてるとかじゃないのよ？」

あ「あ！」

何かを発見したあゆちゃんが突然走り出した。

あ「ゆーいちくーん！」

どうやら昼の話に出てきていた祐一君らしい。

あ「うぐっ！」

理&佳&葉「「あ……」」

背後から飛びついたのを祐一君が回避したため、あゆちゃんは街路樹にもろに頭を打ってしまった。

振り返りもせずに避けたところを見るとどうやら一度や二度のことではないらしい。

祐一？「まったく、なんで俺を見かける度に突撃してくるかねこのうぐう星人は」

？「あゆちゃん大丈夫？」

祐一君の隣にいた女の子が心配そうに尋ねていた。

あ「うぐうく避けなくてもいいじゃない」

祐一？「嫌だよ、俺が吹き飛ばされるだけじゃないか」

？「まあまあふたりとも」

理「えつと……どうすればいいのかな？」

あゆちゃんが走って行ってしまったため私達は少し離れたところで見ているしかなかった。

思い出したようにあゆちゃんがこちらを手招きしてくれたので近寄って行った。

? 「あゆちゃん、この人達は？」

あ「今日一緒に探し物手伝ってくれたんだよ」

祐一? 「すみません、こいつなにか迷惑かけたみたいで」

理「いやいや、僕達もあゆちゃんに手伝ってもらってたからお互い様だよ」

佳「貴方が祐一君でいいのかしら？」

祐「はい、俺が相沢祐一です。あゆから聞いたんですか？」

佳「ええ、貴方のことは色々聞いたわ」

祐「あゆ、お前この人達に何言った？」

あ「ひーみーっー」

葉「そつちの子の話はまだ聞いてないんですけど、名前聞いてもいいかな？」

? 「水瀬名雪です。あの…私達スーパールのタイムセール行くつもりだったのでそろそ

ろ行かないと」

そう言えばもうそんな時間だった。

理「僕達も今日行くつもりだったから皆で行かない? その方が数量制限の商品も協力できるし」

祐「いいですよ、名雪もいいよな?」

名「うん、皆で行った方が楽しいもん」

佳「じゃあ歩きながら話しましょうか。遅れたけど二木佳奈多よ」
理樹と葉留佳も続いて自己紹介をした。

6つの長い影を並べて私達は戦場に向けて歩き出した。

深夜の告白

今日は12月31日、大晦日。

今年も皆で集まって年越しパーティーをしようという話になったのだが、人数の都合上、私達のアパートではあまりに狭いので小穂さんの伝手で広いスペースのある施設を貸してもらったのだった。

日頃のボランティアの賜物だ。

日が沈み始めた頃、私達は目的地である施設に到着した。

扉を開けると既にたくさんの靴が並んでいた。

大分揃ってきているらしい。

靴を脱いでスリッパに履き替え、皆がいるであろう部屋に進んでいく。

するとちょうどタイミングよく棗先輩が出てきた。

理「あ、恭介」

恭「お？お前ら今来たのか？」

佳「ええ、遅れましたか？」

恭「いや、そんなことはない。まだ全員そろってないしな」

葉「恭介さん、これ、どこに持っていけばいいですか？」

恭「そうだな、おーい、こまりー」

小『はーい』

とたとたという足音の後、小毬さんがひよつこり顔を出した。

小「どうかしましたーあ、理樹君、はるちゃん、かなちゃんいらつしやうい」

恭「三枝達が食いもん持ってきてくれたから置き場所案内してやってくれ」

小「はーい、じゃあ三人ともこつちに来て〜」

小毬さんのところに行くときと奏さんと名雪ちゃん、そして名雪ちゃんに似た女の人の姿があつた。

佳「二人とももう来てたのね」

奏「ええ」

名「あゆちゃんが落ち着かなかつたので」

理「そちらの方はもしかして名雪ちゃんのお姉さんですか？」

？「あら、お世辞がお上手ですね。名雪の母の水瀬秋子です。娘がお世話になります」

理「ええ!？」

理樹の気持ちは分かる。

早苗さんといい秋子さんといい見た目年齢が若過ぎだと思ふ。

葉「お料理中ですか？」

小「そうだよ、秋子さんすごい手際よくて、奏ちゃんも名雪ちゃんもすつごく上手なんだよ」

名「小毬さんほどじゃないですよ」

小「あ、持ってきたものはそこに置いておいて。皆は向こうの部屋にいるよ」
皆が持ち寄ったであろう食材が既にたくさん置いてあった。

佳「それじゃあ私も手伝うわ」

小「ありがと〜」

理「僕も何か手伝った方がいいかな？」

佳「男子厨房に入らず、よ。皆と部屋で待つて」

理「わかった。何かあったら呼んでね」

葉「お姉ちゃんフアイト！」

理樹と葉留佳は皆と合流しに厨房から出ていった。
とうか、葉留佳は少しは理樹を見習ってほしい。
佳「えっと、何から始めればいいのかしら？」

小「それじゃ〜」

それから五人での料理が始まった。

なにぶん人数が多いため一品作るだけでもなかなかの苦労だった。

岡崎さん達、古河さん一家が来てからは智代さんと早苗さん、渚さんが加わり、こちらはこちらで楽しくやらせてもらった。

秋子さんと早苗さんはやはり場数が違うので私達と比べて技術もスピードも格段に上だった。

なかなかこういった機会は得られないので二人にアドバイスをもらいながら着々と料理を作っていた。

ちよつとしたお料理教室だった。

秋「おまたせしました、皆さん」

秋子さんを筆頭に次々と料理を運んでいく。

その出来栄えに男性陣は思わずおおっ、と感嘆の声を漏らしていた。

一通り準備し終わると棗先輩だけが皆を一望できる位置に立った。

恭「今日は皆よく集まってくれた！一部ここで初めて会う奴がいるかもしれないが親睦を深めていってくれ。そもそも俺達リトルバスターズは――」

秋生「長えよ！乾杯!!」

皆「!!!かんぱーいっ!!!」

棗先輩のしばらく続きそうだった乾杯の音頭を秋生さんがぶった切り皆何事もなかったかのように話に花を咲かせながら食事を始めた。

少し寂しそうにしていた棗先輩だったが理樹と小毬さんに慰められて復活したらしい。

秋子「パン屋をなさってるんですか。今度買いに行かせていただきますね。その時は私の作ったジャムを持っていきますね」

祐&名&あ「!!!」

早「是非いらしてください。自家製のジャムですか、とても楽しみです」

秋生「ジャムパンとして売出すのもありかもしんねえな」

秋子「あらあら、ではますます腕によりをかけて作りますね」

祐「普通のジャムの方…だよな？」

名「うーん、お母さんあのジャムも好きだからわかんない」

あ「普通のジャムなことを祈るしかないね」

恭「そういやお前彼女今日は一緒じゃないのか？」

日「あ、えーつと、その…」

朋「恭介、触れてやるなよ」

恭「すまん、配慮が足りなかった。そのうちいいことあるさ」

日「いや、別れてねえからな!? 変な気の使い方すんなよ!？」

朋「今日は目一杯飲んで忘れちまえ」

日「信じろおおおー!!」

直井「音無さん、これおいしいですよ」

奏「結弦、これも食べて」

結「あ、ああ」

唯「あつはつはつは、モテモテじゃないか」

直「これもどうですか？」

奏「はい、結弦」

結「もう勘弁してくれ…」

河「うわ、また肉ばっか食べてんじゃん」

真「俺の筋肉が肉を食らえと囁くんだよ」

謙「想像するとなかなか気持ちの悪い光景だな」

鷹「ダメだよ兄ちゃん、良い筋肉を作るためにはバランスよく栄養摂取しないと」

真「なん…だと…」

鷹「野菜も食べれば兄ちゃんの筋肉も一つ上の高みに近づく、これ正論ね」

真「筋肉のため…うおおおー！食うぜえー！超食うぜええー！」

謙「肉だけじゃなく野菜料理もすごい勢いで減りだしたな」

鷹「兄ちゃんの筋肉フエチを甘く見てたよ…」

ゆり「取り分けるからお皿渡してくれるかしら？」

ク「ありがとうございます」

小「ゆりちゃんありがとう」

ゆ「なんか妹みたいでどうしてもかまいたくなるのよね…」

美「妹萌えですか」

ゆ「ち、違うわよ！…たぶん。ほら、どうぞ」

美「百合おねえちゃん」

ゆ「…なんかニュアンス違わないかしら？」

あらかた食べ終わるとボードゲームやカードゲームをして時を過ごした。時計を見るともう30分ほどで今年も終わる。

夜風に当たりたくなり退席した。

12月の深夜の空気は思っていた以上に冷たく、長居しないうちに戻ろうと思わせるには十分だった。

理「二木さん、どうかしたの？」

佳「少し外の空気が吸いたくなっただけよ。理樹はどうして？」

理「ちよつと二木さんが気になって。後話が出たかったから」

佳「話？」

理「うん、二人つきりできうして話し合う機会ってなかなかないからさ」

佳「じゃああそこのベンチに座って話しましょうか」

ベンチに座ると私は理樹に寄り添うようにした。

理「ち、近いって」

佳「いいじゃない、昔はもつとべつたりしてたわよ？」

理「そ、そうなんだ？」

佳「ええ」

理「ねえ、か、佳奈多」

佳「!?」

照れくさそうに少しどもりながら理樹が私の名前を呼んだ。

理「手術受けたと思うんだ」

佳「え……?」

今、なんて…

理「昨日先生から聞いたんだ。僕の記憶は手術で取り戻せるかもしれないって。昨日は別行動していたが、どうやら病院に行っていたらしい。」

佳「でも、成功率は50%を下回るのよ!」

理「うんそれも聞いた。失敗すれば…最悪死ぬってことも」

佳「ならどうして!」

理「佳奈多さんのことが好きだから」

佳「え?」

理「この一週間佳奈多さんと一緒に過ごして、佳奈多さんのことがまた好きになったんだ。だから手を引かれるだけじゃなくてちゃんと隣に並んで歩きたいんだ」

………

理「身勝手なことを言ってると思う。でも、これが紛れもない僕の気持ちだから」
理樹はそこまで言うのとポケットから指輪を取り出した。

婚約指輪に比べたらおもちゃのようなものだ。

理「今の僕にはこれが精一杯」

まるであの誕生日の再現のようで。

「でも、記憶が戻ったら働いていつかちゃんとした指輪を贈るよ」

もう失くしてしまったはずの時間で。

理「二木佳奈多さん」

だから、私は――

理「僕と結婚してください」

佳「はいっ……!」

その先を願ってしまったのです。

佳「本当に……いつまで待たせるのよ……最低ね……最低……」

理「ごめんね」

佳「うう……」

理樹の胸の中で私は泣き続けた。

理「あ……雪」

ちらちらと小降りの雪が降り始める。
頬に触れる雪の冷たさが熱くなった頬にはちょうどよかった。

ピリオド

いつもの病室に理樹を移し終える。

麻酔が効いているので目覚めるのにはまだ時間を要するだろう。

理樹はぐっすり眠ったままだ。

その寝顔はひどく安らかだったが、それを見ている私の顔はきつと酷いものだろう。
くうくう…

どんな状況でもお腹はすくらしい。

待たせている皆に合流するため個室を後にした。

消灯時間はもう過ぎていたのでほとんど人工の光はなく、月明かりで照らされていた。

? 「———!!」

ロビーまで来ると誰かが騒いでいるのが分かった。

十中八九知り合いだろう。

ゆっくりと声が聞こえるところまで近づくと。

葉「なんでッ!!なんで理樹君なのさッ!!」

葉留佳の叫びが響いていた。

葉「理樹君が一番幸せになるべきなのにッ!! どうしてッ!!」

唯「葉留佳君、ここは病院だ。せめて声量を落とせ」

葉「…姉御はすごいですね。そうやっていつも冷静で。どうせ私達のことなんか――」

美「三枝さんッ――」

恭「やめろ三枝。お前のためにも」

小「皆のためにゆいちゃんは落ち着いてるんだよ…」

葉「…すみません、姉御。頭に血が上っちゃって…」

唯「気にするな。だが、一つ言わせてもらうなら、私とて何も感じないわけではないよ」

葉「はい…」

唯「それに、一番近くにいた佳奈多君が耐えているのに…私達が動揺するわけにはいかないだろう」

来ヶ谷さんの声が少しだけいつもより震えている気がした。

これ以上黙って見てはいられないのでまるで来たばかりのように振る舞った。

皆もさつきまでの様子が嘘のように平然と話している。

普段通りにしてくれること、その気遣いが嬉しかった。

理樹の手術は「記憶を取り戻すことに関してのみ」成功した。

だが、長時間に渡る手術に理樹の身体は耐えきれなかった。

次に眠りについた時ももう目を覚ますことはないだろうとのことだった。

これが未来を求めた者に神様が下した罰だった。

食事を済ませ病室に戻る。

理樹はまだ眠っていたがもうじき目を覚ますだろう。

私は普通に接することが出来るだろうか？

理「……………ん」

理樹の目が開かれる。

恭「目が覚めたか」

理「きよう…すけ、うん」

謙「それでどうだ？記憶の方は」

理「思い出したよ、何もかも」

美「記憶喪失の間の記憶もあると」

理「うん、一部思い出したくないものもあるけど……」
おそらくあの劇のことだろう。

理「ごめん、もっと皆と話してたいんだけど佳奈多と二人にさせてもらえるかな？」

皆は顔を見合わせると次々と一言ずつ遺して退室していった。

唯「じゃあな少年、佳奈多君はすぐ隣だ」

佳「？」

ガラガラと音を立てて扉が閉まる。

これで二人つきりだ。

理「皆もう行っちゃったよね？」

佳「ええ」

ふう、と息をつき理樹は微笑む。

理「来ヶ谷さんは流石だなあ……」

佳「さっきのあれはどういう意味だったの？」

理「今ほとんど目が見えないんだ。この手もあんまり見えてなかったりする」

理樹が上げてる手は顔からそう離れていない。

つまり、もうその程度の距離すら見えていないのだ。

佳「でもさっき……」

理「声のする方に反応してただけだよ。失明なわけじゃないから人のいる位置くらいはわかるけど」

だから来ヶ谷さんは最後にああ言ったのか。

理「佳奈多…」

佳「な、何…?」

理「ありがとう…こんなになつた僕でも愛してくれて」

佳「そんなこと…当たり前じゃない…理樹は理樹なんだから」

理「そっか、嬉しいな。だから…今度は僕の番だ」

佳「どうということ?」

理「こつち…いや、あつちの話かな。はは、分かんないよね? 疲れてるのかな」

少しだけテンションの高い理樹に若干惑う。

理「ねえ佳奈多、もつと近くに来てもらえるかな? 最期にちゃんと佳奈多の顔が見たいんだ」

佳「最期って」

理「自分のことは自分が一番わかるよ。たぶんこれが最期」

佳「理樹…」

理「こつち来て」

理樹に抱き寄せられる。

理「うん、よく見える。佳奈多本当に綺麗になったよね」

佳「そんなことな——んっ」

不意打ちでキスされた。

これまでの分を取り戻そうとするかのように長いキスだった。

理「体力も落ちちやったなあ。息が続かない」

佳「無理しすぎよ」

理「そうみたいだね、眠くなってきた」

終わりは着実に近づいてきている。

理樹を直視できなくて顔を背ける。

理「最期の記憶の定番って最愛の人の笑顔だよ」

佳「そうね」

理「……………」

佳「……………」

理「ねえ、顔見せてよ」

佳「嫌よ」

理「どうして?」

佳「涙できっと見せられない顔になってるもの」

理「気にしないよ」

佳「私が気にするのよ」

理「いいからいいから」

佳「……………」

理「ね？」

佳「……………彼女の泣き顔が見たいなんて…最低ね……………最低……………顔を上げた。」

佳「これで…満足…？」

理「うん」

理樹の臉がゆっくりと降りていく。

佳「理樹…？」

理「……………」

返事は返ってこなかった。

佳「おやすみなさい…理樹……………つう……………」

私の最愛の彼氏は、この世のもうどこにもいなくなつた。

f r i e n d

無気力に時を過ごす。

バスターズの皆は初めの頃は私を心配して毎日のように来てくれていたが、それぞれの生活もあるし時間を空けることも必要だと思ったのか、ここ数日はめつきり来なくなった。

結局、皆に気を遣わせてばかりいる。

佳「最低ね……最低」

いつものように嫌悪の言葉を自分に浴びせる。

意味がないことなんてとづくにわかっているのに。

それでもそうしなければ私は私でなくなってしまう気がした。

どこを見ても、何をしても、理樹のことを思い出してしまう。

でも、もう理樹はどこにもいない。

その事実が狂いそうになる。

でも、そうはならない。

今、私を私たらしめているのは皮肉にも自責の念だった。

腕にはミミズ腫れのような痕の他にも爪痕ができてしまっている。私には自傷癖の気もあつたらしい。

この醜い傷痕を見ても理樹は――

自分の中でどれだけ理樹の存在が大きかったのか痛感する。思わず自嘲気味な笑みが零れた。

ドンドンドンッ！

玄関を叩く音に少しだけビクツとする。

誰だろうか？

扉を開けるとそこにいたのは息を切らした祐一君だった。

祐「佳奈多さんすみま…せ…はあ…はあ…あ…あの…ゴホツゴホツ…」

佳「ちよつと落ち着いて。ほらこれ飲んで」

私がコップに水を汲んで差し出すと祐一君は勢いよく飲み干した。

佳「それで、一体どうしたの？」

祐「あ、あゆを見かけませんでしたか!？」

佳「残念だけど見てないわね」

祐「そうですかお騒がせしてすみません！」

祐一君は嵐のように現れ去って行った。

……………

佳「これでよかったかしら？」

あ「うぐつ」

玄関先に立ったまま振り返らずに問いかける。

あ「バレた？」

佳「いつから？とかどうやって？とか色々分からないことはあるけどそんなことはもうどうでもいいわ。何か用？」

あ「うぐう、佳奈多さんが冷たい。これを届けに来たんだよ」

あゆちちゃんはコートポケットから取り出したものを私に手渡した。

それは天使のキーホルダーだった。

あ「これはなんとつ！なんでも3つの願いが叶うキーホルダー……に似てる、街の小物屋さんで見つけたキーホルダー」

佳「つまり、普通のキーホルダーじゃない」

あ「で、でも一つだけ願いが叶うんだよ？」

佳「へえ、そう」

あ「うぐつ、その目は信じてない！」

佳「ええ、信じてないもの」

あ「ほんとだもん！」

佳「もし仮にこれが本当に一つだけ願いが叶うキーホルダーだったとしても、私の願いは叶わないわ」

あ「佳奈多さんの願いって？」

佳「それは……」

葉留佳と仲違いする前まで戻ること……？

違う気がする。

理樹と出会う前まで戻ること……？

それも違う。

もしたった一つだけ願うことが出来るなら……

それが許されるのなら――

佳「理樹と……一緒にいたい……」

あ「叶うよ」

佳「え？」

あ「佳奈多さんの願いは叶うよ」

さつきまでのあゆちゃんとは雰囲気が変わっていた。

あ「でも、それには佳奈多さんも思えない出さないといけないことがあるんだよ」

佳「…な、何を」

あ「この悲しみが生まれた始まり。目を閉じて、そして思い出して。あの日本当は何が起こったのか」

あゆちゃんに従い、私は瞼と閉じた。

灰色の世界が広がっていた。

顔に無数の滴が降り注いでくる。

それが雨だと気がつくのにそう時間はかからなかった。

周囲を確認するために頭を動かそうとしても頭は私の言うことを聞いてくれない。

仕方なく目だけで見回すと辺り一面鉄くずの山だった。

もうここがどこだかはわかった。

ともの村のはずれの違法投棄のゴミ山だ。

理樹が記憶を失うきっかけとなった場所。

なぜ、私はこんなところで寝ているんだろう。

起き上がろうとしても身体は金縛りにあつたかのように動かない。
すぐそばでガシヤガシヤとゴミ山が崩れるような音がする。

誰かが叫んでいるようだったが私には何と言っているのかわからない。

不意に視界が暗くなり、雨粒が顔に降ってこなくなつた。

だんだんとその暗さに慣れ、目の前の輪郭がはつきりしてくる。

そこにいたのは必死に私に呼びかける理樹だつた。

駆け降りてくる時に引っかけたのか頬から出血していた。

理———!!———!!

口は動いているが音はなく無声映画のようだつた。

私も応えようとしても少しも動けない。

そしてゆっくりと私の脛が閉じられた。

あ「もうわかつたよね？」

佳「あの日ゴミ山から落ちたのは…私だつた…？」

あ「それじゃあ、出口はこつちだよ」

あゆちゃんが玄関を開けると、そこから先はさつき祐一君が出て行った外とは違い、ひたすら真つ白な何も無い空間だった。

佳「あゆちゃんは何者なの？」

疑問を投げかけると、あゆちゃんはにぱーという擬音がしつくりくる笑顔で笑った。

あ「ボクは月宮あゆ、佳奈多さんの友達だよ」

佳「これからどうするの？」

あ「ボクは祐一を待たなきゃ。だから佳奈多さんとはここでお別れ」

私はこの自分を友達と呼んでくれた女の子を残して行ってもいいんだろうか？

あ「ほら！理樹さんも待ってるよ。早く早く」

佳「ちよ、ちよっと——」

あゆちゃんは無理やり私を外に押し出した。

あゆちゃんが遠くなっていく。

あ「じゃあねー!!」

あゆちゃんがぴよんぴよんはねながら両手をぶんぶん振っていた。

佳「絶対！絶対また——」

……

目が覚める。

目の前の点滴からここが病院であることが分かった。

何か夢を見ていた気もするがどうしても思い出せない。

起き上がろうとしても身体が動かない。

辛うじて首は動いたので反対方向を見ると椅子に座って寝ている少年がいた。

中性的な顔立ちに少し小柄な背丈。

頬に少しだけ残っている切り傷の痕がボーイツシユな印象を感じさせる。

その少年はこくと大きく首を揺らすと目を擦った。

そして、少しだけ目を見開いた後、いつものように優しい笑顔になった。

理「おはよう、佳奈多」

佳「おはよう、理樹」

理樹の押す車椅子に乗り私達は理樹の友人との約束の場所に向かっていた。

佳「ねえ、本当に私が行ってもいいの？」

理「うん、向こうも彼女連れてくるって言ってたし」

車椅子というのは街中では目立つものだ。

ましてや男女のペアなのだから周りからどう見えているかは想像に難くない。

佳「やっぱり留守番してた方が……」

理「ダメ。それにもう着いちやったから」

大きな樹の下のベンチには既に二人の男女がいた。

理「祐一、待たせちやった？」

祐「いや、俺もさつき来たところ」

？「ボクが一番早いつてどういうことなのさ」

祐「それにしても聞いてくれよ。あゆのやつこの歳で床屋で髪切ったんだつてよ」

理「それは……だいぶ思い切ったね……」

？「うぐうぐ祐一君のいじわる」

祐「あ、まずは自己紹介だな。相沢祐一です。理樹とは病院で知り合つて意気投合しました。それでこいつが右宮（うぐう）あゆです」

あ「うぐつボクそんな名字じゃないもん。ボクは月宮あゆつて言います」

佳「二木佳奈多です」

なんとか動かせるようになった手を差し出し握手を求めた。

あ「よろしくお願いします、佳奈多さん」

佳「佳奈多」

あ「え？あ…よろしく佳奈多！」

佳「こちらこそよろしくね、あゆ」

理「それじゃあ今日はどうしようか？」

あ「ボクたい焼き食べたい！」

祐「いつも食ってるじゃねえか」

あ「今日は佳奈多と半分こして食べたいの！」

佳「私も賛成」

祐「まあいいけど」

理「」

あ「！」

祐「」

佳「」

